

川柳塔

平成二十九年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇八五号



日川協加盟

平成二十九年度 六賞発表

No. 1085

十月号

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

- 麻生路郎アルバム
- 麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
- 麻生路郎文集・麻生路郎語録
- 麻生路郎物語（東野大八）
- 麻生路郎の人と作品
- 麻生葎乃作品「福寿草」
- 麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
- 麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話 06-6779-3490

川柳塔社

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

ご注文は下記へ、ハガキかFAXにて。お支払いは到着後で結構です。

川柳の 理論と 実践

新家完司・著



実践を意識した豊富な例句で学ぶ作句法・選句法・心得
初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司
326頁。送料+消費税=2,000円 FAX 0858-52-2449

短歌俳句川柳一〇一年

小島 蘭 幸

『短歌俳句川柳一〇一年』は、新潮10月臨時増刊として平成5年に発行されています。私が45歳の時でした。いつも手の届くところに置いて大切に読んでいたのですが、平成22年の暮れに我が家をリフォームしてから忽然と姿を消したのです。大きな本だからすぐに出て来ると思っていたのですがどこを探しても出て来ないのです。もうこれは出て来ないと諦めて古書店で探すことにしましたが貴重な書物ということもあって、手にすることが出来ませんでした。

平成29年8月20日、平和祈念川柳大会が広島市で開催されました。実はこの数日前に、家中どこを探しても見つからなかった『短歌俳句川柳一〇一年』がふわりと出て来たのです。一九五六年 川柳「句集きのご雲」 広島川柳会編、は三〇六頁に紹介されています。私は、第68回広島平和祈念川柳大会で課題「触れる」の選者でしたので披露の前に『句集き

のご雲』の中から数句を紹介させて頂きました。

髪が抜けると泣いた少女にもう逢わず 午 朗
先生の死屍は大きく手をひろげ 木 公
神はつと眼をそむけたり八時十五分 幻 詩
原爆の遺品あの日の砂が落ち 広 文
ケロイドをかくす長袖暑く着る 夕ケコ

原爆投下から72年、『句集きのご雲』の一句一句は、核廃絶を訴え続けているのです。

さて、この『短歌俳句川柳一〇一年』の編集は、三枝昂之、夏石番矢、大西泰世の三氏が膨大な作業の協力をされています。川柳を担当された大西泰世氏は「一年一句歌集というやり方は、川柳では非常に難しかったですね」と座談会、短詩型文学百年のパラダイムの中で言っておられます。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり 路 郎
こおろぎよ私も蚊帳で起きている 葭 乃
大きな滝になろうと思う父の日に 薫 風

ここまで書いて、今年の元旦に尾道千光寺に初詣に行った時のことを思い出しました。大吉の御神籤に、失せ物デルとありました。

檸檬抄「囀星」……………山口光久・斉尾くにこ共選…(84)

橘高薫風句抄……………清水英旺選…(87)

一路集「好城」……………永見心咲選…(88)

初歩教室「返す」……………居谷真理子…(89)

インスピレーション・ナビ 印象吟……………大西泰世…(90)

川柳塔鑑賞……………伊達郁夫…(92)

水煙抄鑑賞……………加川靖鬼…(94)

せんりゆう飛行船⁸²……………新家完司…(96)

■句集鑑賞『再会Ⅱ』小島蘭幸著……………平宗星…(97)

『麻生路郎読本』余滴⁽⁴²⁾……………葉原道夫…(98)

九月本社句会……………弘津秋の子…(100)

句会燦燦……………各地柳壇(佳句地十選／藤井則彦・政岡日枝子)…(102)

十月各地句会案内……………十月各地句会案内……………(106)

柳界展望……………柳界展望……………(107)

■編集後記(ひとこと／上田和宏)……………朱夏・勝弘…(122)

座右の句

ついで来い月に日の丸建てに行く

(道博)

私の句

わがままは通らぬ母の握り飯

田中 恵

知ることが出来た。

摩天楼は堺の生まれで、早稲田大学を卒業後、堺市役所に勤務、丁度その頃麻生路郎師が堺市民病院の事務長に着任、市役所との事務のやり取りの中で路郎師と知り合うこととなり、摩天楼の旗振りで当時の堺市長をも巻き込んで川柳研究会を発足させ、堺川柳会の基盤をつくられた。その後「川柳雑誌」の編集に携わり、路郎師の死後は川柳塔の創設にも重要な役割を果たされたと言う。

摩天楼はまた川柳作家であったと同時に郷土史研究家でもあって『堺の川柳散歩道』『堺つれづれ草』『心のふるさと』等を著し堺の歩み、歴史、並びに川柳を通じて堺のことを書かれた。そこには並々ならぬ郷土愛を感じさせるものがある。摩天楼が堺を詠んだ句のいくつかを紹介する。

公書を吐けとは仁徳のたまわず

情熱の歌駿河屋の紺のれん

情熱の歌人晶子を思ふ海

柳の木ごとく堺はなごやかに

大漁の鉢巻堺の浜は晴れ

夜市見るボンボン船は三味が鳴り



小島蘭幸選

出雲市 竹治 ちかし
幸なのか可もなく不可もない暮らし

AIの育ち人の手におえず

ミサイルの盾に九条なれますか

立ち上がる仕種までもが亡父に似る

運転はOK歩くのは難儀

金烏玉兎 昔は夢を見せて呉れ

鳥取市 森山盛 桜

百態の人生模様それも人

我が身には効きそう日本語の薬

付度のかけらも見えぬゲリラ雨

パワーなら老眼鏡の奥にある

失言の相手が妻で繕えぬ

擬態しか生き抜く道は無くなった

岡山市 永見 心 咲

セレクトは苦手約束みな守る

半生のせんべい不発弾の音

線引きはうまいが円が描けない

コーティングしてもポロリと氏素性

風船になりそこなつたまま浮かぶ

パラパラ漫画指にからんで来るドラマ

松原市 森松 まつお

夕焼けがきれいビールも冷えている

精一杯妻に付度しています

漢検のまずは五級へ挑む朝

定刻に市バス来たので慌ててる

芸術の秋だ爆発でもするか

疲れたら秘密の基地へもぐり込む

大阪市 川端 一歩

若いなあ言われる川柳のお陰

通学路みんな綺麗な瞳して

娘が毎日何を食べたか聞きにくる

ひまわりは妻が笑った顔に似て

ストレスは寅さんを観て和らいだ

満足の一日終えてうまい酒

河内長野市 山岡 富美子

新刊書脳にも水を撒いている
立ち眩み気温三十八度です

感性は錆びても痛みには過敏

日捲りが指に重たいときもある

核という玩具が喧嘩売っている

酷暑日が今日も続いて冷奴

弘前市 高瀬 霜石

つぶあん派は与党 こしあん派は野党

たいていのことは大目に見ればいい

錆びた釘などとあなどつてはならぬ

もったいない一日スマホ見て暮らす

カタカナを多用する人信じない

日本晴れ黄金の海の中に立つ

堺市 澤井 敏治

断酒した夜から不眠が始まった

目が冴える午前一時を告げる鐘

急いたらアカンあの世が近こうなるだけや

身の丈の歩幅に変えて遠花火

海は詩人落暉飲み込みそして秋

秋冷にやっと戻った脳回路

鳥取市 両川 無限

運鈍根を僕の三角点にする

わたくしの干潟が満ちるまで遊ぶ

磨かねば曇るメガネも感性も

なあ蟻よ遊びごころはないのかい
お辞儀する角度へ落ちてゆく夕陽
三角の二辺はおんな対おんな

奈良市 大久保 眞澄

読経済むと急に活気が出る法事

本気なのにご冗談をと笑われる

ミサイルでおイタをしてはいけません

18きつぶ八十路きつぶと名を変える

能天気シニア特権だと思っ

軍歌より演歌の似合う国に住む

大阪市 谷口 義

積乱雲いつも背負ったおばあさん

長生きに遊び心がいらいますなあ

妹が歳だ歳だと言ひ出した

仁義切つてから柘榴は弾け出す

私の半分はとけている夏

筋書き通りだったのは昼寝だけ

大阪市 古今堂 蕉子

美味佳肴求めていては痩せません

百済観音どこから見ても現代っ子

リニューアルしたい臓器が二つ三つ

気になりますお尻ポッケの長財布

思えば主婦残業代に無縁なり

沸点の低い私はすぐ噴火

榎原市 居谷 真理子

まっすぐに伸びよとそれがご遺言

やわらかい声だ一病持つ人の

青空が壁に見える日淋しい日

逆境にじつくり洗う足の裏

ひらがなはいつもしつとり濡れている

ソフト帽だった 昭和の父だった

米子市 竹村 紀の治

お供えにご無沙汰の詫び乗せておく

ブルトップ引く力まだ残ってる

目が覚めてそれから今日の時間割り

木を植えた人にやさしい風が吹く

水割りと湯割りがほくを人質に

色々あったが今は酒だけに

三田市 上垣 キヨミ

生きてさえ居れば慈愛の風が吹く

たわいない話で暮れる長電話

お財布に連絡先とお薬と

年金日までと泥舟こいでいる

母親のように慕える姉がいる

頼られて頼って励む老姉妹

松山市 栗田 忠士

喉ぼとけあたりで止めておく我慢

美しく老いたい顔よりも心

潮時だと思ふ迷うのはやめる

破れ傘繕っている傘寿坂

茶番劇見れば見るほど腹が立つ

ミサイルへ防空壕が間に合わぬ

捨てなくて良かった孫に着てもらおう

丁寧語ただゆつくりと喋るだけ

捨て石にされても役は果たします

反骨を貫き妥協許さない

嫁に娘に心から詫び介護され

反論を一步下って考える

八王子市 川名 洋子

わたくしの鎧脱がしてゆくあなた

熱帯夜だけじゃないのよ寝れぬ夜

償いの積もりじゃ無いと肩を揉む

梅雨明けに梅も私も土用干し

落ち込んだ時は一日眠り姫

夏休み平和と思ふ子等の声

鳥取市 吉田 弘子

心地よい微風だきつと夫だろ

超老老介護想像よりも苦にならず

大仕事終えた気もする一人膳

二十四時自由期待の程でない

その度に夫だぶらせ日が暮れる

未来より遠い思い出眠らせぬ

松江市 松本 文子

今日も泳ぐぞ一レーン予約して
踊りながら三途の川を渡ろうね

ふるさとの空よ翼が欲しいなあ
とうとう出た四角い西瓜どんな味
時々真面目になつて句を作る
ベートーベンと一緒に夜の歯を磨く

羽曳野市 安芸田 泰子

風鈴の無口が続く炎暑尚
薄くなつた命大事に猛暑越す
雨男所によりに濡れてくる
孫が来て災難だつた庭の蟬
散らかした部屋で自分を取り戻す
一病とつき合い切れず鬱続く

奈良県 渡 辺 富子

シャワー全開今日のやる気がほとばしる
来し方をしみじみ語る孟蘭盆会
念入れて明日見る眼鏡拭いている
老い忘れにっこり夢と手をつなぐ
喜怒哀楽煮詰めまあるくなる夫婦
目を閉じてはつきりと見る嘘まこと

枚方市 丹後屋 肇

猛暑日に一息貰う百日紅
戦傷が疼く改憲赦さない
カンカン照りゴーヤの簾効いている

気取つても赤字財政次々世代
延命治療医師が家族に問い糺す
鍵握る証人みんな認知症

羽曳野市 徳山 みつこ

口述筆記に百五歳のエキス
「やすらぎの郷」になごんで独りきり
一日を長く思ったことがない
どこの国の総理かわたくしも言いたい
ザワザワワ戦は今も終わらない
美しい顔だ無償の汗まみれ

大阪市 榎本 日の出

貧乏が育ててくれた子は真面目
風邪引きを知らないまんま齢を取り
毎晩を飲めたらいいね下戸ぼつり
一波乱ありそだなーと猫の髭
ごめんなさい素直に言えぬ日のつらさ
駅弁を買いに大阪駅にゆく

長岡京市 山田 葉子

躰不足犬も子供もマイペース
すぐ走れる身軽なひととペアを組む
母と義母の裏も表も見た強み
食洗機使わない日が続いてる
定年後つらつら長い道程だ
元氣出るオレンジ色を着てしまふ

東かがわ市 川崎 ひかり

目立たぬが要所要所に亡夫の釘
ゴキブリが私の出方じつと見る
込み入った話パスですこの猛暑
一人食今日も手抜き冷ややつこ
若冲のトサカの赤に立ち眩む

松山市 古手川 光

紙面画面へほやいて暮らす老一人
置かれた場所で咲いていますと屋根の草
私も生涯現役ですと蟬
霞ヶ関永田町には勝手呆け
言い訳が不得手大臣にはなれぬ

松山市 宮尾 みのり

萎えそうな時に友人から電話
曼珠沙華君が恋しくなるのです
永代供養少年に枷はめられず
しがらみがあつてあの世もややこしい
盆供養寺とシビアな話する

大洲市 中居 善信

波乗りの上手い男もずっこける
反戦反核叫びつづけて八月忌
反核へ煙たがられて無視されて
もう少し押しが足りない反戦歌
戒名に柳一字は欲しいもの

西予市 黒田 茂代

触れましたかマシユマロのあのやさしさに
わたくしの日常鶴鴿の尻尾
未完の句ばかりが懐に溜まる
来んでいい老いが足から這い上がる
母の歳まで生きた充分だと思ふ

高知県 小澤 幸泉

傷ついた祈り届かぬ原爆忌
八月の海に怒りを捨て切れず
終戦日ふたたび戦呼び戻す
よさこいの彩に染まって酔いしれる
独り酒結構これも楽しいね

唐津市 坂本 蜂朗

金婚の妻生長が止まらない
じゃじゃ馬の自覚が皆に好まれる
回る寿司霧吹きかけてみましょうか
虐待と言わずに耐えていた昭和
白内症仏の後光かと思ふ

唐津市 山口 高明

外面の良い宰相で困りもの
潤沢な予算原発交付金
論客の舌滑らかに理想論
禁煙のパパがライター隠しもつ
獣医より無医村無くす方が先

阿蘇の宵夕蒼凜と震災後

無冠の帝王 気楽に飲む自由

恋のメモこころの奥の本棚へ

一丁上がり人生早くまとめたい

入道雲見れば心は十のまま

熊本市 杉野羅天

ゆつくりと猛暑を過ごす命です

冷牛乳朝の活動援助する

花睡蓮四日目には会えなんだ

草むしり油断するなど百足出る

バトン渡す相手が見えぬ頑張るか

熊本市 岩切康子

東京でスカイツリーの影を踏む

どの国の子供もいたずらが好きだ

結婚指輪の隙間が広くなる

靴紐を解いて走り出した妻

くぐりやすそうだマツクの看板だ

沖繩県 森山文切

子の酌で自慢話の空回り

誉め言葉貰って酒が欲しくなる

花咲けば疼いた傷も忘れられ

欠点を個性と言えば触りなし

少年を男にさせた常夜灯

札幌市 小沢淳

耳底に神の声する八・一五

尖った空気ユーモアで中和

ロボットに人情論を説いたとて

ハグをしてお互いさまの加齢臭

閻魔さまとの問答集を編む余生

札幌市 三浦強一

わたくしは喪服の似合う妻らしい

披露宴なるほど待ったなしである

雑学の片棒担ぐ五七五

ダム底にわたしの半生眠らせる

花嫁の父はいつでも初舞台

弘前市 岡本花匠

母逝きて八十余年我も老い

淡々と生きて笑楽卒寿坂

卯と午と苦楽をともに六十五年

鯡ヶ沢の焼きイカ求め夏味覚

倅せの極致いただく旬の味

弘前市 今愁女

甲子園暑い八月加速する

八十路とてショートパンツの暑い夏

冷奴が常食になる暑い夏

ねぶた祭り里帰り子ら昼寝さす

ねぶた笛も哀調帯びて秋立つ日

弘前市 須郷井蛙

五七五入れて本文短くし
手をかけた畑見事恩返し
父ちゃんの休み便利屋しています
マンホール蓋まで観光しています
屋根裏のルームはわが家の美術館

弘前市 高橋洋子

脳みその解毒と思う深眠り
シニアにはシニアサイズの夢がある
叶うなら訪ねてみたい黄泉の国
年齢相応夢があるから頑張れる
幸せはそよ風のようにやって来る

弘前市 福士慕情

葉の裏で空蟬ツメを立てている
夜明け前セミの合唱永平寺
廃屋のドラマを惜しむ蟬時雨
捕虫網セミにおしっこかけられる
ねぶた笛蟬も聞いている夏の宵

青森県 松山芳生

古本屋の棚に知りたい海がある
おだてられ老人力を見抜かれる
絶対多数に待ったがかからない
等身大の穴が一番やすらげる
号泣はそこそ凍としてる喪主

塩竈市 木田比呂朗

赤い羽根には矢張り白いエプロン
紺碧の空に負けないシャツを選ぶ
再検の結果に背筋しゃんとなり
ブレ金無視する年金生活者
晩学と言ってもスマホにパソコン

男鹿市 伊藤のぶよし

どんよりの空にボレロが終われない
照る日曇る日反骨やと古希の坂
胡瓜ポリポリ生き生きと夏の音
タイムカプセル昭和の貌でご対面
本閉じれば涙の落ちる音ポトリ

さいたま市 星野育子

教育論独り歩きをする神話
正解の無い質問が多過ぎる
負け試合タラレバがつい口に出る
時間制限出来た家の晩酌
外食は割り勘だけのお付合い

東京都 川本真理子

わからぬながら等圧線の話聞く
それぞれの穴でそれぞれ策を練る
九十の老母それでも渦に立つ
調律はよそう素敵に狂ってる
人生の終わりに雲を読んでいる

東京都 まえで とよこ

ひよろひよるとふうせんかづらの実がゆれる
停電のよう ふつと忘れる今のこと

誕生日いくつになってもあかごはん

河内音頭二上山のふもとから

みささぎの道 世界遺産になりますよう

富山市 島 ひかる

サクランボ娘婿から届く幸

直筆の便り栽培主が見え

地図帳で紅秀峰の里探す

月山と対話作業の背を伸ばし

山椒の青虫そつとして置こう

可見市 板山 まみ子

終活をしてもせずとも来る終り

できるだけ子孝行して終りたい

被爆者の声は聞けない核の傘

焼かれたら涙流すか初サンマ

火あぶりは覚悟しているイワシの目

犬山市 金子 美千代

菜園を華やかにするミニトマト

百均の衝動買いだ楽しまん

ライバルといつか言わせてもらいたい

何時に食べてもいい一人のごはん

いい人をやめても悪女にはなれず

犬山市 関本 かつ子

生かされているから今朝もいい目覚め
ゆったりとした昔のラブソング

駆け付けてさりげなく去るポランティア

軒かくリズムに安堵してる妻

鎮魂と平和打ち上げ大花火

愛知県 早川 遯行

ポケットにワンコインありコップ酒

札束を見れば誰でも気が変わり

八十歳だけど電車に座れない

お喋りが好き病院の待ち時間

酒が出て断る理由何もない

京都市 清水 英旺

原爆忌また語り部が無念の死

濃密な古刹の朝の森林浴

ソフトクリーム舐める老女の稚児の顔

国民を欺して誰が得をする

少し前まで寛容の人多くいた

京都市 藤井 文代

言い切ったら必ず背には風が来る

先々への話題喜寿のティータム

矛先を逆転させる接続詞

からつぽにするまで食べる缶の菓子

そもそもは別れ際手を握るから

京都市 榎本宏子

祖母の口ぐせ神さまが見たはるからぬ
しくじりが人を大きくまるくする

三つ以上憶えられない夏の脳

秋の海テトラポッドにある孤独

産まれたての赤ちゃん久しぶり抱っこ

京都市 三宅満子

熱中症注意テロップ余計暑い

避難袋重すぎ足が進まない

告白はソフトクリーム溶けぬ間に

来世では猫に生まれるつもりです

七億円当たった夢で寒くなる

大阪市 井丸昌紀

捨てられぬ一冊書き込みと手垢

我がままなヒト科地球が倍返し

地獄で仏 仏はなぜかほくそ笑む

自分史に挟む葉が見つからず

立ち泳ぎ得意になった日から鬱

大阪市 内田志津子

シャボン玉ウツを飛ばしてくれませうか

田植歌祈りたくなる国訛

飼い犬にカード握られ打つ手なし

背を向けた故郷いまでも暖かい

職辞して本気で反旗翻す

大阪市 宇都満知子

仕事を終う心残りとお安堵感

バンクした自転車押して炎天下

転んだら心配かけて笑われて

自ずから家事分担のいま二人

夜店の金魚うちの家族に仲間入り

大阪市 江島谷勝弘

三歳児が背中を搔いてくれました

回転がにぶるヘソクリ底をつく

土くさいトマトなかなか口に来ず

一日二千元ほしいお小遣い

納豆が好きなわりには粘りない

大阪市 榎本舞夢

暑中見舞一枚二枚減っていく

今日会えば次の約束して別れ

まだ行けるラヂオ体操参加する

誘われて娘と好きな旅に出る

遺影用と記念写真を撮っている

大阪市 大川桃花

朝起きたら探し物するおばあさん

ブラタモリ温故知新の旅をする

全没でも平気な顔で澄ましとく

そんな話庶民様には通じない

またひとつ水槽増える目高の子

大阪市 大 治 重 信

抱き合つて危険な橋を渡りゆく
たこやきを大阪弁で食っている
国会の中継放送夏暑し
人生の余白ですよと葉のむ
久しぶり丸く挨拶里帰り

大阪市 奥 村 五 月

飛ぶように諭吉蹴ちらす競馬場
夏休み爺は宿題孫プール
土用には輸入品でもまず鰻
知らぬ間に美人が消えて長寿国
強国の中国に無い青い空

大阪市 笠 嶋 惠 美

神仏になぜか会いたい奈良へ行く
片付ける気持さわやか湧いて来る
宝塚娘と一緒に優雅な日
ミシン買う説明良くてアイロンも
手拭展職人の技うならせる

大阪市 熊 代 菜 月

連休を後期高齢もてあまし
白酒に頬赤らめる孫の春
エンピツをけずって今日も思案顔
塔誌から元気な友の声がる
朝顔に今朝も早くに起こされる

大阪市 近 藤 正

言いわけはとぼけた顔がよく似合う
ロボットがそつとデブリに近づいた
リスベクト力あわせる秘訣です
なるほどと禁止条約かみしめる
浪速っ子二度目のギャグは聞く気ない

大阪市 坂 裕 之

少しずつやればいいのに抱え込む
次に会うまでに体調戻さねば
決まったら早く実行して楽に
人はみな勝手なことを言うらしい
朗らかで好き勝手する人元氣

大阪市 田 浦 實

布袋さんの笑顔貫いに万福寺
いつ逝くか分からないから髭を剃る
明日のこと知らぬが仏八十路です
強がりもめつきり消えて老い佳境
世界中自分ファースト跋扈する

大阪市 田 中 ゆ み 子

常識は持つてるつもり恋は恋
幸せだ叱ってくれる人が居る
この暑さ生命線確かめる
ごきぶりとだけは真剣勝負する
今生きているということ大欠伸

大阪市 津村 志華子

ひまわりも眠り里路は萩すすき
自問自答ひとりぐらしにある掟
悲しみを癒してくれるレモンティー
とまどいは想定外と言う長寿
コンビニのおにぎりですむ昼ごはん

大阪市 寺井 弘子

病棟の互いに庇い合う絆
旅ひとりのんびり風の音刻む
山の日に山の遭難記事を読む
金を出す話を夏の怪談に
いつだって頼りになつてくれる友

大阪市 寺本 実

人生の道半ばだと傘寿言う
特売へ走るパワーは落ちてない
耳搔きをされてるうちに骨抜かれ
欠点を重ねてみると俺になる
台風に結局頼るカラのダム

大阪市 栃尾 奏子

降参もしないし引き分けも御免
ハンカチを出して女は手品師に
この指にとまりなさいと甘い息
私のチョイスで箱船は埋めた
満帆の女は風を待っている

大阪市 原田 すみ子

ペデイキュアも夏の女の見せ所
朝顔に起こされ今日が動き出す
到底空気にはなれない夫婦で
当り前よりお蔭様から気をもらう
酒すすむ肴は毎日作らず

大阪市 平井 美智子

豹柄のおばちゃんが居たシャンゼリゼ
一張羅でお一人様のフルコース
油断してしまふ甘めの玉子焼
判定はアウトすこしホツとする
気の抜けた心に辛子マヨネーズ

大阪市 平賀 国和

人生に最初からある運不運
祈りの夏あの戦争を忘れまい
地獄見た日本世界の和を願う
孟蘭盆会友の墓にも手を合わせ
兄弟会テーマは家の仕舞い方

大阪市 藤田 武人

一枚の写真が語る終戦日
一枚の沢庵ちびり冷やで飲む
人は何故見えない線に縛られる
晩婚のパバのかけっこ腕回す
やがて秋蟬コオロギの二重奏

大阪市 藤原千恵子

よっしゃよっしゃ空の返事は調子いい
一人居はよく働いてよくサボる
句集一冊一気に読んで転た寝し
禁止区域入り自撮りが目に余る
ラベンダー畠の香りお土産に

大阪市 升成好

一途さに惚れ一途さを持って余す
見た目ほどたやすくはない黙秘権
味方ではないなお世辞が多すぎる
思いやり足すとまあいい輪が描ける
同郷と知って崩れる標準語

大阪市 山本加お里

コンテナにヒアリと名乗る無法者
句会出るあの雰囲気が一好み
もの忘れ何やってんの独りごと
気持ちいいつもすっぴん顔洗う
星が降るふるさと今も待っている

大阪市 吉内タカ子

仏壇にビールお摘み話しても
思い切りショートカットして七回忌
元氣かね持つべき友の電話声
口下手も笑顔で通しこれからも
人生はいつでも遣る気出して見る

大阪市 若本安代

玉の汗きつと明日の虹になる
もう一本恋愛線を書いてみる
気付かぬにライバルとなる趣味の道
それなりにこだわり持つて今日明日
一呼吸おこう真実見えてくる

堺市 奥時雄

川柳も歌も上手なずるい人
川柳もうまい美人は許せませす
出た頃は下手に思えた裕次郎
接待の歌はヨイショで切り抜ける
歌わないけど座持ちには自信ある

堺市 柿花和夫

ぬき足さし足軍靴の響きすぐそこに
お決まりの教授のジョーク宙に浮く
復活の試歩を支える三分粥
大雨の夜のスナック独り占め
逆上がり出来た青空落ちてきた

堺市 加島由一

朝顔を数えなおしてひとつ増え
台風も長寿迷惑かけている
親不孝の家系引き継ぐ孫の眉
迎え火の向こうに人のいる気配
凄いつて字を見て妻と笑い合う

堺市源田 八千代

夏場には造花に限る墓の花
標札は亡夫の名前掛けている
鍛えてるびんびんころり逝きたくて
男手は近所の主人お借りする
蝉去つて虫の音集くやつと秋

堺市齋藤 さくら

暑いなあ こんにははより先に出る
里帰りそのうち孫は来なくなる
あつと言う間に過ぎる里帰り
爺ちゃんの将棋の相手してくれる
ありがとう御座居ましたと爺ちゃんに

堺市坂上 淳司

七十二年前も猛暑の八・一五
被曝国が核廃絶にサインせず
この星を壊す積りか北と米
地球を壊す核弄す北の狂気
核捨てて膝を交えよ北と米

堺市遠山 唯教

息抜きがたまには欲しい古時計
つつがなくいく幸せがこわいです
8月の生まれまたくる終戦忌
百五歳にやさしさと勇氣をもらう
さきに逝く義弟と飲むの誰だろう

堺市内藤 憲彦

鬼コーチ素顔に戻る金メダル
折り鶴が化けてはならぬ赤紙に
猛暑日の散歩コースはポチが決め
うっかりと箸落としたら救急車
孫2歳テニスか将棋選ばせる

堺市矢倉 五月

診察を待つ本一冊とお茶持つて
流れのままに泳ぐ勇氣を襲めてやろ
雨の日の不意の電話が元氣くれ
仏へも冷やしたビールまだ残暑
振り向いて下さいシミある絆でも

池田市栗田 久子

飽食の今敗戦の日を思う
生命の重さ原爆忌は巡る
終戦日夾竹桃は語らない
墓参り心やさしくなつていく
満たされて夕餉に一杯のビール

和泉市横山 捷也

病状は現状維持と言う安堵
深呼吸してから聞いたよい返事
怒るのはよそうあどけない顔だ
僕A型老人会の会計だ
取り扱い注意の頃もあった妻

茨木市 藤井正雄

失敗を素知らぬ顔の思いやり
小遣をくれる形で出る懐炉
飲み頃と梅酒の瓶の底が言う
校長も市長も来てる甲子園
止り木の独酌悩み溶け切れず

茨木市 島田誠一

思い出の歌で時間を巻き戻す
ポランティア瓦礫に落とす汗光る
大記録秘話に挫折と奮起の日
押す引くの力かけて和を保つ
大阪人一人入って座が和む

貝塚市 石田ひろ子

歳かなあ当り前にも感謝して
幸せはその日その日の短くて
百均が手軽に老いを誘い出す
おたがいの錠剤数え嫁姑
後期高齢恐いものないうまい飯

河内長野市 大島ともこ

季節巡るように移ろう幸不幸
当たり前の事が出来てる幸せ度
てにをはからやり直したい時もある
冷水と笑えまだ音はあげられぬ
波長の差埋めてはちばち夫婦です

河内長野市 梶原弘光

ふわっとした民意に食った肩すかし
路線価は住めば都を織り込まず
結納を若いカップルビ打てず
同郷と聞き緊張の糸弛む
セミが鳴く目覚まし時計3個分

河内長野市 木見谷孝代

お食い初め皿に盛られた親ごころ
家事育児特別手当ママへ出す
朝顔のしほまぬうちに筆をとる
赤い糸結い直して老いの坂
通学路見守り隊の声やさし

河内長野市 黒岩靖博

帰省すると孫の知らせに頬弛む
妻倒れ愛燦々の男飯
老いて尚糖尿なのに止めぬ酒
介護付ホームに興味わき出した
リニアカー乗るまで生きてやる気骨

河内長野市 谷久美子

うまい物は何時も二人で半分こ
皿数を増やし息子の帰省待つ
おもしろく生きて閻魔に媚を売る
極楽へ弥陀の膝へと敷くレール
今更に路線かえずに暮らす老い

河内長野市 辻村 ヒロ

怒るから言わないと子が先手打つ

天国へ配達頼むラブレター

まだ十年平均寿命あるらしい

判断力二拍子遅くまだ迷う

幾つでも恥をかくのが生きること

河内長野市 藤塚 克三

家で呑むか屋台に寄るか迷う酒

ストレスを屋台の椅子に置いてくる

生き方を変える節目の退院日

四捨五入したら暮らしは楽になる

老い二人綻び結って鶴と亀

河内長野市 村上 直樹

お下げ髪夕焼雲よ遠い夏

増えることない年金を刻む老い

プラス思考ストレスさえも無二の友

寂聴師にふれて渴きを癒す日々

悠久の輪廻転生愛と憎

河内長野市 山室 光弘

むき出しの原爆ドーム蟬時雨

非の打ち所無い妻で濡れ落葉

賞味期限切れて焼きもち無関係

ノアの箱舟捜す八十路は前を向く

演じ切ったおもしろい夫婦悔いはなし

岸和田市 岩佐 ダン吉

道ひとつ大勢などは気にしない

手きびしいあの日の言葉今もある

人間を磨く逆風なんだろう

都合よく老いを連発されますね

空模様ばかり気にしている男

岸和田市 宮野 みつ江

亡き姑の教え通りに盆支度

御精進よりも好物用意して

一生分涙を流し今笑顔

明日から三日賑やかになる仏間

ゴーヤ蔓あの世へ届く程昇る

岸和田市 雪本 珠子

昨夜見た夢の続きをキープする

笑い声聞こえてきそう娘の遺影

理由あって笑うことない日が続く

大好きの声を消し去る波の音

ハルカスでちよつと息抜きシヨッピンダ

四條畷市 吉岡 修

目が合った火花が散った目で斬った

タイガース様々ですね風船屋

幅利かすほどの貫禄には欠ける

喝采を浴びて花火の消えてゆく

先生の子も塾カバン駈けてゆく

吹田市 太田 昭

敗戦を終戦とした負け惜しみ
領いた人の視線にのせられる
恙ない今日も二人の飯を盛る
友が逝く逢う約束を抱いたまま
妻の寝息やつと私の子守歌

吹田市 木下 敏子

気持ちいい朝の空気を今日も吸う
にこにこ笑顔の友が寄つて来る
晩学の頭ゆっくり揉み解す
此の歳になつて素敵な友が出来
のんびりと散歩の友と立ち話

吹田市 須磨 活恵

有難い味方掃除機洗濯機
よく動く手足おおきに撫でさする
川柳の虜になつて指折つて
狭い視野マンネリズムになる私
勘ちがいはボケたかなと思ひ

吹田市 野下 之男

強盗も大統領のマスクかけ
雨の神日本のどこが好きですか
名人も人工知能ほめている
特養の妻の写真をはる日誌
恥ずかしい話がもとで世に出てる

高槻市 井上 照子

バラ百本棘はとつてありますか
年金に頼つて生きる有りがたく
酔いません いただきますよ少しだけ
曲がった背今更文句言うたとて
クラーがきき過ぎたかな出るクシャミ

高槻市 指宿 千枝子

ゴミ出して散歩たのしむのも日課
老犬に会えぬ淋しい散歩道
墓参り元気をくれる蝉時雨
買い込んで猛暑に耐える夏ごもり
食べるだけ食べて何が物足りぬ

高槻市 片山 かずお

写メールの笑顔にほっこりとしてる
定時にメール交わして確かめる元気
愛されて日課のように来るメール
メールでは物足りないとい会いに来る
娘からのメールに柄もなく絵文字

高槻市 島田 千鶴子

外出をためらっている老いの夏
磨き上げた窓に手形の置土産
御破算で初めに戻るのも勇氣
万歩計ハードル下げてから鬱に
プチ家出駅まで行つて気が済んだ

高槻市 初代 正彦

家族にもさらり教える盆飾り
猛暑こそ似合うゴーヤの深い皺
菜園のトマト茄子もみな家族
台風五号熱い句会を避けたのか
トップ記事パンダお産という日本

高槻市 杉本 義昭

生涯現役意志を通した一〇五歳
夏真つ盛り真つ白なシャツを着る
妻のお出掛けあれよあれよと美人眉
カップ麺するずる希望捨ててない
きびしいのは私を裁く影法師

高槻市 富田 美義

あれこれと主婦に指図の電子音
悩み無い人は話題を直ぐ変える
世界一誇る長寿もお荷物に
麦茶飲み血圧下げて定検日
誇りまで捨てて免許を返上す

高槻市 富田 保子

テイータイム私一人の歌に酔う
一寸した気配り光る主婦の城
デイズニ一の土産話で夜も更け
カラオケの味を覚えて宴が好き
帰りたい故郷があり花が待つ

高槻市 原 洋志

金魚すくい兄がちよっかい出しにくる
病む母に窓広く開け大文字
B29我が人生の括弧書き
コンテナに便乗ヒアリ世界旅
あれこれと思い出させるふかし芋

高槻市 松岡 篤

肥え過ぎに責任持たぬバイキング
これもエコ避暑に家族で図書館へ
青でGO黄色でやつと渡り終え
挨拶の一音までもマニユアル化
新任地先ず居酒屋を教えられ

高槻市 安田 忠子

子供の頃犬に吠えられトラウマに
幸せだなとつくづく思う昨日今日
この暑さ日がな一日寝て暮らす
浴衣姿の素敵なベアに振り返る
丁寧な言葉づかいに畏まる

豊中市 上出 修

ブレーキを忘れてしまふ絶頂期
S M A Pのあつと驚くさようなら
君アイドルわかっているかな孫二歳
働き方教えましょうかなマケモノ
モノトーン水平線に青と藍

最期まで愛を注いだ百五歳

カタカナ語を省いた粹なご挨拶
ぬるま湯の職場を変えた型破り
メ切が迫るとペンはよく走る
おはようを言えば妻とも気は晴れる

豊中市 藤井則彦

迎え火を焚いて今年も里の盆

盆供養母のまぼろし追っている
海の日も山の日もあり家に居る
せめてひと時涼しい風の吹く木陰
大好きなみずゞの詩集携えて

豊中市 松尾美智代

各停にてんとう虫も客となる

ふる里の山彦ほくの旧い友
地下街に迷いかうか喜寿過ぎる
夏の風にレモンはじける幼稚園
九条の危機に黙っていない蟻

豊中市 水野黒兎

生きているまだ塗り足らぬ白い地図

ときめきは頑張った自分へ褒美
身の丈に合った人生の楽しさ
飄飄と天寿を生きる米を研ぐ
臉を閉じて過去思い出す戦の火

富田林市 片岡智恵子

向日葵の健気しつかり固い実を

真心を尽くして蔵の扉を開ける
盆の道ひたすら亡夫が見舞い来る
古里の秋は確かだ木に空に
目の前に迫るチャンス掴み取る

富田林市 関よしみ

主役にはなれず終いの多面体

有りのまま見せて実った恋もある
ライバルにしたい話の合うた人
ときめきのまま終わりたい認知症
またあした それ切りだったハーモニカ

富田林市 中井アキ

手のひらの海がわたしを試してる

汗涙豊かに実る通過点
美辞麗句ちりばめ本心に遠い
掴んだのは等身大の実が一つ
美しく老いたし慎ましく生きて

富田林市 中村 恵

孫が来て一人暮らしに花が咲く

独居して追いかけられる家事炊事
独り身に友が来てくれ感謝状
フオークソング遠い青春思い出す
経を読み妻への思い取り戻す

富田林市 肥山一文

富田林市 山野寿之

寝屋川市 森 茜

父の日を祝ってくれる血の絆
野良の汗梅雨の狭間の青い空

寄り道をして人生に温い友

茶柱の今朝を喜び合う二人

にこやかな触診安堵する患者

寝屋川市 伊達郁夫

西瓜食うがばり故郷の夢を食う

子の視線合わずと蝶も蛾もいる

片隅で拍手だけならしてやれる

七夕を揺らすと夏が落ちてくる

歩かねばまだ歩かねば枯れていく

寝屋川市 富山ルイ子

熱中症にならぬだろうか炎天下

猛暑日が続く大阪住み難い

寒暖の差ありお茶の木植えている

クーラーをつけてない家多い里

認知症とおどろいた友おない年

寝屋川市 平松かすみ

視力障害迎ええ火は見えますか

里芋の葉っぱの露で遊んだよ

揚羽蝶毎日訪問してくれる

内緒です冷えピタ張っているところ

思いつきを消すアルバムの二三枚

ジャン・バルジャンむせび泣く銀皿の慈悲
表通りをゆったり猫の歩く街

人間の顔する水車小屋の猫

看病の娘をすまなくも疲れさせ

老いさまを娘にとつくりと見せている

羽曳野市 宇都宮 ちづる

お寺より錦市場と先斗町

京土産両手に旅の話咲く

孫達のお陰で埋まるカレンダー

おかげ横丁孫の気を引き伊勢参り

天王寺発はるかで京都行の贅

羽曳野市 中川 ひろ介

もう聞けぬ父母の八月十五日

敗戦から学ぶ平和のメッセージ

不戦の誓いこのマンネリの大切さ

戦争の傷跡今も消えてない

戦争のむごさを知らぬ平和ボケ

羽曳野市 永田 章 司

乾杯はやっぱりビール様になる

傘寿の日過ぎし人生振り返る

窓際で反体制の刃研ぐ

都市砂漠人の情けの温さ知る

一強になると独善イエスマン

羽曳野市 仲谷 真

暑いので打ち水をして涼をよぶ
戦争を二度としないと誓う日々
日航機御巢鷹山を忘れない
内閣の人事を変えてパツとせず
大会の新同人の出席す

羽曳野市 藤原 大子

自信過剰見えないものを多くする
年寄りの自覚忘れて溺れかけ
蝉時雨小鳥は遠慮気味に鳴き
信念を持った頑固に憧れる
そこそことほどほどにして恙無く

羽曳野市 三好 専平

ヒアリにも共謀罪を適用し
戦争で心を病んだヴァイオリン
戦争で知った小さな恋の味
戦争で逝ったあの子のジャンケンポン
一回戦コールド負けの潔さ

羽曳野市 吉村 久仁雄

強さ優しさ僕を鍛えた負けの数
許せない過去が笑顔で寄ってくる
世に背くたびに背筋が伸びてくる
夢をくつきり見せてくれます拡大鏡
信念に背いて今日を楽にする

東大阪市 北村 賢子

居るだけで二人イライラする猛暑
着飾って心は虚飾せず生きる
そこそこの人生この先も生きる
裏むけの蝉表にしたら生きていた
この時世今日を楽しく生きましよう

東大阪市 佐々木 満作

子の未来どうなることか思う日日
紆余曲折よくぞここまで生き伸びた
最近海馬の回路途切れがち
寡黙でも強い男に憧れる
プライドを捨てると視野が広くなる

枚方市 海老池 洋

干し上げられた老軀を戻す生ビール
平和日本を脅かすミサイルテロヒアリ
生きてると洗濯物を外に干す
老いぼれて半分残すかき水
だんだんと粘りきかなくなる老後

枚方市 小林 わこ

空白の日記寂しい日が続く
炎天下予約検診仕方ない
若い日の苦労話を友となら
ひとり棲み二人いそうな笑い声
今はただハッピーエンド願うだけ

枚方市 寺川弘一

一番出来ぬことが一番したいこと
子規が詠み雅になつた鐘の音
つくづくと生命線を見つめる日
神さまが書いたシナリオ推敲出来ぬ
千羽鶴飛び立つ時はきつと来る

枚方市 二宮山久

自信ある男が描く未来地図
幸せをかみしめ歩む夫婦旅
幸せを感じる午後の自然風
この暑さのものでもないボランティア
盆近しおニユーンファアが孫が待つ

枚方市 二宮紫鳳

ウォーキング特効薬と胸をはる
髪を切り暑さへ挑むリフレッシュ
海が好きひまわりが好き夏生まれ
朝顔が隣の距離を近くする
万歩計大活躍のダイエツト

枚方市 藤村亜成

どうせなら大きな嘘をつきたまえ
スタイルを貫く私であるために
ああ空気が美味いくぎりのついた朝
夕陽に同化し一色に染まる
点と点結び合わせてきた生活

枚方市 山口弘委智

借景に映える夕日の置き土産
立て板に遮断機ほしい妻の口
人生の深みを覗く句の文化
すきあらば老いが弱みを覗いてる
一杯のコーヒー和む夕涼み

藤井寺市 太田扶美代

父の日の亡父へ供えているコーヒー
夾竹桃今年の夏はひとしおに
残り時間抱きしめててもつまらない
わたくしの思惑どおり上機嫌
小さい鬱抱いて妹と小さい旅

藤井寺市 鴨谷瑠美子

炎天下少しこの世を忘れたい
水色になるまで水を流そうか
魂に着せる衣服を買いに行く
秋という急を要するものばかり
からからと落葉のように終の日は

藤井寺市 鈴木いさお

大群の蟻にもそれぞれの個性
くさやになる前は美形の鯨でした
半分は寝酒にまわすワンカップ
苦にもされず褒められもせず七十五
分岐点左を選ぶ癖がある

佛様も暑いでしょうねお盆です
藤井寺市 高田美代子

甲子園に曾孫の様な子等の汗

五〇キロ競歩の脚にあこがれて

これ以上無理は出来ないなと悟る

米寿来て美人薄命とは言えず

藤井寺市 田付絹枝

嫁姑逆転させたIT化

高騰で諦めましたくぎ煮さま

出番だよ何処へ隠れたマイナンパー

貼り葉何処に貼ろうか予定表

献眼の亡夫は何処かで見える花火

藤井寺市 増井ヨシ枝

亡夫へとキュウリの馬とナスの牛

若いわねまだ十八と大笑い

地藏盆自由にお菓子くれた日も

子等自立老いばかりなり隣組

お向かいの三歳児私のことを姓で呼ぶ

藤井寺市 吉田喜代子

野菜作り話つきない楽し友

水分補給ぬか漬共にかぶり付く

カラスの声悪魔のように聞こえる日

踵から歩くと背筋伸びている

身勝手ね台風此方に来ないでね

外出着買って五年も吊ったまま
藤井寺市 若松雅枝

諦めていた細いズボンがやつと穿け

浴衣解きパジャマに仕立て良い調子

伝統行事受け継ぐ子らの心意気

相継いで友二人逝く盆の月

箕面市 大浦初音

墓参り親族の無事知るよすが

下り坂しつかり大地踏みしめる

楽しんで帰れば友の訃報まつ

お供えの花にしのはる友の顔

犬猫に教えてもらう風の道

箕面市 酒井紀華

暑くても暑いと言わぬゲーム漬け

この暑さカラスはどこで涼むのか

地を這うて軽い命の蟬の殻

ローカル線走る電車は山の音

そこそこに生きるこの世は迷路あり

箕面市 出口セツ子

夏やせをせずにも何でも美味しい舌

本物かな鳴門わかめを出す旅館

賑やかに皆で集う食が好き

海馬から失敗だけを消しておく

元気無い時は無理してでも笑う

箕面市 広島 巴子

盆間近亡母夢に出てあれこれと
菓子西瓜買って先祖と子供待つ
夏休み短縮の孫ベソをかく
冷房が効きすぎ今夜鍋にする
夏バテに向日葵バツと気を貰う

八尾市 高杉 千歩

何時だって今幸せと信じ生き
久闊を埋める電話に愚痴ばかり
物忘れいやまだまだと卒寿すぎ
地震予知手も足も出ずただ禱る
ばあちゃんメールさぞかし煩さかろ

八尾市 寺川 はじむ

華やかなネオンが星を消す都会
無農薬安堵の胡瓜そり返り
「道頓堀」が「外人街」に変わるらし
やれやれとまだまだ競う喜寿の坂
毒っばいメール賑わう世界地図

八尾市 宮崎 シマ子

好きなのは論吉に一葉英世さん
すれ違う女が恐い夜の道
ヘルパーさんだけに見せてる足の皸
一病に守られこの夏のり越えた
暑いなど言うてはおれぬ盆行事

八尾市 村上 ミツ子

この暑さ一句なかなか浮かばない
もの忘れ大事なことはかり忘れ
水ごくりごつくん命よみがえる
下手な嘘上手な嘘に勝つことも
すっぱいみかん美味しい時もあったのに

八尾市 山根 妙子

つばくろの命いとしの口移し
久々に漱石開き読む こころ
夏休み天皇様もごゆるりと
盆支度過去帳練って塔婆書く
虹掴むような五枚の宝くじ

大阪府 米澤 淑子

八月の思い原爆資料館
肉食に変えても進む物忘れ
おいしいね言える相手がいての幸
痛いところあるのは生きている証
いい眠りこむらがえりに起こされる

神戸市 上田 和宏

傘寿やでやっとな大人になったかな
捨てたのにまた一杯になる欲気
残尿なし今日も元気で過ごせそう
好好爺呆ける手前のことらしい
鉢植えの温州ミカン実が一つ

神戸市 奥澤 洋次郎

コロコロと笑い明るい輪をつくる

八月の空熱中症と台風と

見えているもう三幕目ない舞台

丁寧に生きよと盆の月冴える

美しいもの消えてゆく遠火花

神戸市 富永 恭子

墓掃除済ませそうめん妹と

桃の香が汗ふきとばす収穫日

比べるとしあわせ逃げていくんだね

義母さんが教えてくれた干しずいき

爪に火をともした義母の宅配便

神戸市 能勢 利子

心残りが無いよう生きる生きてやる

夫より先に逝けぬとジム通い

ありがとうと言えないままに友が逝く

純金と知らずにあげた形見分け

真っ青な空を見に来る中国人

神戸市 細川 花門

シャワー浴びビールを飲んでから昼寝

欠伸して体の空気入れ替える

母子草甘えた頃がなつかしい

盆供養ところは過去へ行きたがる

投げました 打ちました 負けました 夏

神戸市 松井 文香

雑談で心の癒える長電話

度々の励ます電話ありがとう

自分より深く祈った娘の手術

気付いたら笑っていない四ヶ月

太陽にはじける笑顔もらいたい

神戸市 山口 光久

はち切れる笑顔行き交うキャン普村

嘘すこし混ぜた話が艶を出す

ポリシーがないから敵に愛される

頑固だが孫の笑顔にかなわない

遮断機がたまに休めと指図する

神戸市 山口 美穂

八月の祈り戦争しませんと

名句迷句指折ったけど夢だった

夢の中の不思議の謎が解けません

夏なればこそその素麺喉を越し

アイスがあるの早々話切りあげる

明石市 糀谷 和郎

瞬きの間も失せる持ち時間

生きてればいずれ上がりのくるゲーム

帆は風に人は情けに背を押され

まだまだと絞れば知恵の出るタオル

念のため結び目ひとつづつ整える

尼崎市 市坪 武臣

仲間でもみんなかたちの違う耳
納豆もオクラも食べて医者通い
ハラハラもドキドキもせぬ君と僕
時として妻の料理もほめてやり
急がねば坂の向こうに陽は沈む

芦屋市 黒田 能子

物言いがついて諍い止めました
急いでも一緒のんびりいきましよう
やさしくされて暖かくなつていく
お互いの個性尊重して暮らす
ありのままの親の背中も見せておく

尼崎市 永田 紀恵

場の空気読めない人の大くしゃみ
通院と句会のための服ばかり
ロケットの交通整理要る宇宙
老いらくの恋遺言状を書き変える
若者よスマホを置いて空を見よ

尼崎市 藤井 宏造

病人へ嘘しか言えぬ時もある
一人では行く気のしないバイキング
手をつなぐ味方のような顔をして
賛美歌が聞こえる日曜のチャペル
美人よりお茶目な女の方が好き

尼崎市 藤田 雪菜

明日の絵に海の青を装いたい
夏負けにうちのアロエは勝っている
群青へ蝶もトンボもいる故郷
盆彼岸みんな会いたい人ばかり
早朝の野球で親子汗まみれ

尼崎市 山田 耕治

捨てる捨てない母とまた喧嘩する
子の悲鳴届かず校長の弔辞
気配りの下戸が仲間にくれる
開会式寝転んでみて叱られる
不夜城という文明の成れの果て

加西市 金川 宣子

年一度障子に穴をあけ帰り
窓越しに覗く花火で祭り終え
ガラガラボン無心で挑み二等賞
酷暑にはクーラーテレビ外も出ず
孫帰る手足伸ばして深呼吸

川西市 大坪 一徳

戦争が変えた人生あと僅か
北の核ボタンを押さぬ保証無し
引揚げの苦勞語らず母は逝き
叱るより誉めて育てよ子も俺も
拜んでも待ったは効かぬネット囲碁

川西市 山口 不動

ひさしぶり梅田へ出る日ときめいて

デパ地下の雑踏にいる安堵感

夏休み僕のソファーに孫が居る

内視鏡綺麗でしたと神の声

白鵬もフェデラーもエライなあ

篠山市 北澤 稠 民

懸命に生きれば風が弱くなる

恩返しせめて彼岸の墓参り

とりあえず家族の顔で食卓に

この一杯心やすらぐエネルギー

食欲の秋に備えて今我慢

篠山市 酒井 健 二

遠雷に遠い恩人思い出す

老残と言うにはやたら目が走る

一線を越えぬ越えたと政治家が

戦争を知らぬ世代も死んでいく

せめてものズボンに折り目付けて会う

篠山市 酒井 真 由

北の地のクラーク像は君に似る 祝・日川協理専任・小島蘭幸主幹

金魚ひらひらまずはひと風呂浴びてから

そっぽを向いています五歳の意味表示

振り向いて欲しくて飛ばす紙つぶて

天と地の方程式がまだ解けぬ

三田市 足立 つな子

もう一度ギア入れなおし遣る気出す

鮮やかに若くいたいと欲の皮

女子会のおしゃべり弾むツーリズム

どんよりと曇っていても日に焼ける

乱世の英雄でない自爆テロ

三田市 石原 歳 子

三日目を眺めて明日の事思う

近頃はカラスの声も聞かれぬ

雑草の中で昼顔美しい

この頃は平和の使者の鳩も見ず

気にかかる野鳥の食べる物が無い

三田市 上田 ひとみ

全力でやってきたではないか君

佳い話聞かせてもらおうバスの席

笑顔にはたっぷり笑顔返します

この胸で眠ってくれてありがとう

ロスタイムほんやりしてもいいかしら

三田市 尾崎 一子

暑い朝孫と黙禱原爆忌

あつくても三食食べる深海魚

月あかり畑を荒らす野の獣

豪雨災害心が痛む冷やっこ

三世代揃い先祖の盆参り

三田市 北野 哲男

盆帰省父の甚平着せられる

広島忌長袖の友また想う

変人がだんだん減って味気ない

ちよくちよくと我を忘れる癖が出る

郡山天地無用の金魚の荷

三田市 久保田 千代

掴みたい夢に向って背伸びする

振り返り振り返りつつ丸くなる

誤解とく時も与えず逝った人

紅引いてつまりは女取り戻す

蓄ほころぶ人の思いもそれぞれに

三田市 多田 雅尚

ピロリ菌呼び名に反し悪さする

エアコンを消せば料金パツと出る

瑞風の客だけ入れる松下村塾

ガラ携をスマホに変えて悩む日々

是是非非をぶれず通した父の背

三田市 谷口 修平

暇と金たつぷり出来て寝たつ切り

火の車操る妻のテクニク

余震など恐れはしない救助犬

忘れたい事はリアルに思い出す

雑草の矜持連作など無縁

三田市 野口 晶子

石臼で粉々にする重い過去

丁寧に生きておりますロスタイム

言い訳を転がしているあかい月

桃狩りもついたお得なバス遍路

爺と姥シツプ貼りあうたまの愛

三田市 福田 好文

高速度出来て疎遠になる故郷

言い訳は一呼吸おく処世術

決めたけど守りませんの休肝日

勘違いしてラッキーな万馬券

長男が逝って生家にガタが来る

三田市 堀 正和

孫二人引き連れ夏の甲子園

テレビ欄見ながら決めるスケジュール

爺ちゃんのテレビが二階まで聞こえ

食べこぼし遂に孫にも叱られる

ひらかなが似合う歳にとりました

高砂市 松尾 柳右子

裏庭で咲く花々の底ぢから

一人居で作句ざんまい蝉しぐれ

テレビ消し脳活性の昼下り

唄好きが集い暑さを吹き飛ばす

カラオケが出来るデイの日楽しみに

宝塚市 田中章子

ライバルもお歳を召して氷解け
お祭へ孫の御端折り伸ばす幸
悔しさがバネになるってあるんだな
人工知能未完の曲も仕上げます
天国へ片道切符買いました

西宮市 秋元てる

血眼で仰げば見えぬ青い空
賞味期限切れているのに自覚なく
当面は安心老母の食べっぷり
死んだふり上手過ぎると叱られた
迷ってるうちに半袖もう要らぬ

西宮市 緒方美津子

担当がない言訳より卑怯
そういえば私も飴を持って
何とかなる母の度胸は日本一
関空に降りると力抜けている
いつの事やら線量計の消えるのは

西宮市 亀岡哲子

ロボットに戦争教えてはならぬ
握り返す力の残る手を握る
新入社勤め上げる気さらに無し
ピクルスより沢庵所望する朝餉
祖母の知恵スマホに負けている茶漬け

西宮市 福島弘子

後期高齢実感ないのに娘がずばり
市民プール遊ぶ小カッパ避けながら
女子会の隣はごめん出直すか
おもてなし自販機までありがたいとう
ゴーヤのカーテン見事な実のりおまけつき

西脇市 七反田順子

孫二人昆虫歴史夢を追う
一目惚れそれは小猫の物語
ガラ携で大手を振って現在地
テレパシー夏野菜からいただいた
滝壺で修行している新社員

姫路市 古川奮水

更新だ免許やすやす返さない
旅心湧けば旧友誘うくせ
味付けは祖母のノートを覗いたか
ト口箱の隅から蛸の足のびる
花火なら混み合う道も風物詩

南あわじ市 萩原狸月

晩婚の子のおめでたへ守り札
パパと呼ぶ父に拳骨髭がない
CMに洗脳されて買うサプリ
ブランドのマーク大きいから売れる
あの人にどんな事情か扉の中

奈良市 阿部 紀子

うろたえる手術の結果解るまで
名を呼ばれ医師の顔みて安堵する
点滴がご飯に変わり有難い
窓から見る太閤さんの御蔭です
華やく夜空平和を祈る大花火

奈良市 加門 萌子

台風は律義必ずやって来る
山水のきれいな所魔がひそむ
自然の脅威人間は弱い
平穏を本気で祈る時が来た
思い返せば平成続いた歲月

奈良市 高橋 敬子

略語にカタカナ見出し読むにも時間いる
地獄絵図手本にされたこの浮き世
鮎釣人ひと付き合いの距離教え
映画館音と冷えとに攻められる
誘われて小銭だけ持ち展示会

奈良市 辻内 げんえい

団塊は前へ前へと生きてきた
ベビーよちよち爺はトボトボいい勝負
おばあさん叫ばずもつと淑やかに
タオルケット置いとくだけの夏の夜
対処済みと言われたけれど見て回る

奈良市 山本 昌代

一年の無病を祈り梅を干す
頑張り貴方の笑みがくれました
ブランコに乗ると記憶がパノラマに
その服が似合うと孫のVサイン
プランターきゅうり買わずに済みました

奈良市 米田 恭昌

完走の泣き虫拍手浴びている
美人と僕もう怪しまれませぬ齡
メールまで無口な男は五六文字
お似合いの二人と言われ凡夫婦
快晴の子報傘持つ雨男

生駒市 飛永 ふりこ

やんわりの棘のようでも粘っこい
送り火の遙か横顔まだ疼く
わたくしの脆さ地団駄踏む猛暑
朝顔を支え引き立てハートの葉
父母たちをとともじゃないが越えられぬ

香芝市 大内 朝子

どうしてもあの日を偲ぶ蟬時雨
我が思い明けっ広げに出来る友
紆余曲折笑いばなしになる轍
勧誘へ墓地と婚活日替りで
生きてんのたがいに案じ合う電話

香芝市 山下純子

片想い天まで届け明日は晴れ
どうしても母の肉じゃがには負ける
孫九人ただだ平和祈ってる
ほどほどのぜい肉が優しさになる
人恋し普通列車の旅に出る

桜井市 安土理恵

こころ病んで性善説をくつがえす
何ゆえに人を愛した信じたか
ははを恋う闇にほんのり白桔梗
手探りの旅の途中の一行詩
疲れたね灯り消してもいいですか

奈良県 安福和夫

知能犯指紋認識には勝てず
五右衛門が嗤う姑息な詐欺行為
なにくそと力んで今はドジばかり
とほとぼも計ってくれる万歩計
フィットネス続けることが大前提

奈良県 谷川憲

夜露吸い育った野菜にご挨拶
白鵬の孤高の記録金字塔
瘦せたというCMモデル太られず
虎の子の端株でも値が気にかかる
銘木かどうか伐るまで分からない

和歌山市 磯部義雄

血の滲む努力で掴むワンチャンス
軽装の登山を風が戒める
無農薬表示信じて買う野菜
酷暑でも蟻の行列途絶えない
夏肥り老いて益々すすむ食

和歌山市 上田紀子

神様の死角で手抜き考える
誠実に生きる水にも味がある
出すぎずに威張らず丸く今日も無事
生かされて命大事を考える
雑草と悟ってからは生き易い

和歌山市 喜田准一

かき氷腹の底まで冷やしたい
イエスマン揃え組織の硬直化
安倍総理庶民そろそろ飽きが来る
この猛暑家を探して右左
徒歩5分それが大義となつて齡

和歌山市 楠見章子

海鳴りへはまゆう耳を澄ませてる
笹舟は海へ向かっている野望
一夜干しの鰯眼に海を抱いている
資格一杯取って宝の持ちぐさ
納屋のたらい子の行水を覚えてる

和歌山市 坂部 紀久子

単純な頭になってきた暑さ
クーラーに向かぬ隙間だらけの家
私の体この頃私に牙を向く
腰曲げて歩いてる影誰ですか
盆踊り花火テレビの中で見る

和歌山市 武本 碧

体温を上げてまごころ突っ走る
有酸素運動背なを押すタオル
かげひなたなくて人生すり切れる
親友の檄が心の穴埋める
収穫の秋へ案山子の一張羅

和歌山市 玉置 当代

夏休み子供と長い日が続く
山谷を越えてきました夫婦箸
梅干して今日も猛暑とにらめっこ
行動範囲狭くなったと嘆く杖
伸びきったシャツとヨタヨタくらす夏

和歌山市 土屋 起世子

百日紅やさしく咲いて熱帯夜
快復の兆し言うこと憎らしい
心地よい疲労で旨くなる夕餉
坂道を下る力を残してる
欲だけは残っていますチラシ見る

和歌山市 古久保 和子

ちよつぱり青春ソーダ水のさくらんぼ
花に水私はビール下さいな
抜け穴を掘っても続く熱帯夜
ずぶ濡れになれば妙案出るもんだ
売れ残りの更地に虫のコンサート

和歌山市 堀 富美子

凡人でいいマスコミを踊らせぬ
ストレスを吐きに来たのに抱え込む
歩かねば生きた化石になる怖さ
夏バテも食い気喋りが寄せ付けぬ
定年の子を休ませぬせち辛さ

和歌山市 松原 寿子

躓いてひとつ得たものに掌に
太刀打ちは出来ぬ笑顔で躲そうか
振り子ひたすら家族がいても居なくても
響かない声かみしめて拭く涙
相槌を打つ人もなく先を読む

岩出市 藤原 ほのか

山頂より望む景色に諭される
ピンチにはいつも聞こえる応援歌
ピンチこそ母の一言身に沁みる
新しい国を信じてのつてみる
二人なら不協和音もこえていく

海南省 小谷小雪

憧れの銘酒が届く休肝日

まることを肯定されて好きになる

入道雲誰か気付いていたかしら

平常のリズム狂うと肩がこる

ここ一番に遮断機が降りてくる

海南省 堂上泰女

山仲間切磋琢磨の君が逝く

初盆を兄の好物買って待つ

ポイステをしたい肩書売る名刺

長いコースを選ぶ曇天のスニーカー

子と会話イニシアチブを競い合い

紀の川市 宇野幹子

他所ゆきの顔が微笑むコンパクト

落し蓋その一生も悪くない

後期高齢また濁音が増えてゆく

葉桜の中へ逃げこむラブゲーム

イヤリング指鉄砲の的になる

紀の川市 北山絹子

ユニークな顔が周りを和ませる

ふところに愛の欠片を抱いている

風向きが変り夫が米を研ぐ

豆の蔓伸びて童話の中にいる

愛情の欠片を抱いてまだ独り

紀の川市 楠原富香

満ち足りた笑顔に会えた介護の日

航海を終えた二人の水いらす

倦怠期つくり笑いで乗り越える

どん底でも夢の欠片を放さない

譲っても捨てても知恵は無量大

紀の川市 山東日出男

遠目には平和に見える青い星

レインボーカラーを順に言えますか

二人なら小玉スイカで丁度いい

幼子のポッケの中は謎だらけ

シロナガスクジラも育つ広い海

紀の川市 辻内次根

雲の峰もくもく風鈴が鳴った

幸せはカンチュウハイの五百ミリ

スクリーンミュージックは失恋の歴史

認知症の記事はこまめにチェックする

朝いちばん歩けば蜘蛛の巣に掛かる

田辺市 岡本昇

生き方がお顔に出てる好々爺

辛いとき頑張るよりも諦める

点滴は気休めと言う医師が居る

名所旧跡はやり演歌のコマーシャル

足の裏が記憶しているこの暑さ

橋本市 石田隆彦

国民のレッドカードも読めぬ人
被災地は希望と汗でよみがえる

新聞で毎朝探す和む記事

老人の出番あり古式の神事

長い長い今も人気のサザエさん

鳥取市 池澤大鯨

ぢいちゃんの似顔絵展に俺の顔

絵ですかねえ書ですかこれは芸術だ

スケッチはスケッチのまま未完なり

抽象画何でもいいんだ受けとめる

似ていない似顔絵なのに俺だとさ

鳥取市 奥田由美

呼び捨てにする嫁もくる盆行事

じっくりと見るから増やすシミ小皺

階段の国道上る好奇心

一杯の美味しいビールで偏頭痛

雑草が元気に育つ留守の庭

鳥取市 加藤茶人

波風が立つと絆創膏を貼り

寝て起きて昨日の事が出来ぬ老い

補助装備車に付けて喜寿米寿

マニフェスト アベノミクスもすでに死語

自己嫌悪隠せば隠すほど目立ち

鳥取市 岸本宏章

三食に昼寝と趣味の川柳と

子を叱るときは自分を先ず叱る

机の下に潜る余裕のない地震

今の世にスマホを持たぬ僕がいる

テレビで見る花火が腹に響かない

鳥取市 岸本孝子

国会の答弁詐欺師並である

戦争はいやだとみんな叫ぼうよ

趣味仲間飲むとき歳は同じ年

金魚掬い意地になるから掬えない

星取県にきれいな星を見に来てよ

鳥取市 倉益一瑤

プライドを捨てた自由な靴である

作り笑いそんな器用をもてあます

しあわせのキップ落としたまま走る

ほめられて仮面が外せなくなった

只今修理中ベタベタと貼る湿布

鳥取市 坂本とも湖

写メールで出逢い別れも写メールだ

閻魔でも出逢えば会釈する私

核のない世界を覗く万華鏡

奈落から蛙のエール届かない

風鈴が孤独なわたしたと見抜く

鳥取市 田中 天翔

お浚いができてきているねと言われたい
巧くなった言って貰って巧くなる
マズローはよくぞ申した欲求説
取り敢えず手を揃えたい群舞です
言い訳は出来ぬ足腰皆痛い

鳥取市 棚田 大

占いの通りにやるも逆になる
肝いりを肝に銘じて生きて行く
ノンアルを飲んでおしゃべりうまくなり
本腰と喝を入れるも腰痛め
猛暑日もたるむ心に喝入れる

鳥取市 谷口 回春子

爺婆の時代遅れは今が旬
祟りかも行事するたび雨が降る
流行遅れ時が変わればハイセンス
欲しいもののハードル下げてゲットする
ほどほどに振る舞い面子安堵する

鳥取市 永原 昌鼓

気持ちいい挨拶目元笑ってる
出来ぬ事増えてつくづく老いを知る
一つあるプライド今も捨てられず
独りだとしみじみ思う夕まぐれ
痛いところ抱えて今日も無事暮れる

鳥取市 中村 金祥

トランプのカード切る手が震えだす
呆けぬよう刺激求めて人と会う
趣味が合う人に自分をさらけ出す
定年へスタンダードで今を生き
土砂降りへノアの箱舟まだ出来ぬ

鳥取市 夏目 一粹

腹時計あれば人間生きられる
悩むだけ悩んだ末はワンカップ
里帰り食べ過ぎました父母の愛
大空の画面は無限夢を描く
嘘言えぬホントも言えぬ貝になる

鳥取市 平尾 菜美

仏間への無沙汰先祖に相すまぬ
満満のやる気早身繕い
ハーモニー心こころと響き合い
今日もまた両立めざす仕事趣味
趣味の庭とうとう垣根払い除け

鳥取市 福西 茶子

寝て起きる度にポトポト余命表
諭吉一枚夢を買おうか米買うか
傷ついて泣いて健やかにもなった
オイと呼ばれて聞こえぬ振りをした
序列2でフカフカ椅子に座れない

鳥取市 前田 楓花

友達のままでいようと赤トンボ

過疎化にて暮じまいする事にした

ミーハーで握手した手は洗わない

思い出を繋ぎ合わせてキルト展

ふく風が稲穂の波に乗ってくる

鳥取市 山下 凱柳

女城主堂々我が家闊歩する

隠蔽の度が過ぎないか安倍総理

一強政治辛口批判目もくれず

趣味三昧豊かな老後生きる日々

折れそうな心支えてくれた妻

倉吉市 猪川 由美子

プライドと我が物差しで生きてきた

派手やミス稲田氏やっと退場だ

愛よりも塩カネ必須人間だ

騒々しい世生さるのにエネルギー要る

眞子さま儀発表タイミング迷う

倉吉市 山中 康子

子をあやす笑顔たしかめてる鏡

どん底を知っているからしつこいの

息子夫婦娘夫婦を見比べる

尻に敷く父さん立てて仰ぎなさい

最期まで抱かねばならぬこの命

米子市 後藤 宏之

色ごとがさらりとと言える年の数

健診が少し休めのサインです

活躍の場を探して二千元

あああったこんどはあれが見えませんが

渋いお茶体にいいと一気飲み

米子市 後藤 美恵子

存在の目減り挽回するお盆

親の墓前張る肩肘がほぐされる

夏草に温床苗が立ち向かう

どっち着る気分で決めるリバーシブル

列島を囲む汚染に花狂う

米子市 中原 章子

傷つけず失礼ならぬ嘘もある

熱中症猛暑は休むことしない

無事着いたそれだけでよいありがとう

袋から花火出すことなく終わる

頭の中ときどき掃除しておこう

米子市 成田 雨奇

多忙です瞬発力が勝負です

ウナギなぞ喰わなくなつて夏元氣

隠し事威厳を保つ一つの手

痒いのは気のせいなのだ痒くない

二百まで生きていないと片付かぬ

米子市 吉田陽子

スランプになんか甘えていられない
平均点みたいに古稀を越えました
ブルトップ手ごわくなったこと内緒
千円カット試そうか止めようか
くらは水面わたしは護岸ゆらゆらり

鳥取県 石谷美恵子

信じよう海の深さと空の青
まだまだ元気居場所はいつも台所
白髪から想像つかぬ若い声
肩幅の広い男へ娘を託す
手向かえる相手ではない器の差

鳥取県 斉尾くにこ

上下なく地球はまるいシャボン玉
寝めことばへ変換のできる耳
聴こえている声に出さないガンバレが
やさしさはときどき無くす傘みたい
明るい人は明るくして人でした

鳥取県 竹信照彦

スーパーで妻は買い物避暑をする
予約時間ピタリで嬉し通院日
血圧を下げて冷たいビール飲む
歯垢除去先ず髭剃った顔を見せ
猛暑日は抵抗せずに溶けている

鳥取県 西谷悦子

忘却の海少しづつ深くなり
生命線フラフラとして生きている
紆余曲折慣れっこになり腹を決め
延命とまではゆかぬが透析に
夫置き逝ってしまうは可愛そう

鳥取県 松川行男

外股で歩いて帰ろう熊除けに
来客でやさしく変わる母を見た
月末は父の帰りを待つお膳
つけまつけ母がつけてる大笑い
仰向けに金魚は先に寝ています

鳥取県 山下節子

向う傷戦い終えて誇らしい
ATMいまだ使えず窓口へ
銀行は年金入る日だけ行く
うれしかった初めて預金口座持つ
道祖神いつも野花が手向けられ

松江市 石橋芳山

正論が人格までも食べていく
商店街チャンポン麵の具だくさん
自販機が斜め横断して困る
わたしだけ海鮮丼の具になれず
つぶ餡のままが本物だと思う

松江市 小川 注湖

一人っ子お話はずむお人形

過疎の里嫁さん迎え大騒ぎ

議員さんIQどこへ捨ててきた

今日の汗拭いたタオルで明日も拭く

好きですと言ったことない同じ屋根

松江市 藤井 寿代

センス良く生きて今中島みゆき

直角に曲がるうさぎは不眠症

約束はもうしないのんびり暮らす

へらへらと月を跨いで難破船

純金のメガネは全てお見通し

出雲市 伊藤 玲子

何処に居るのズーとあなたは流れ星

白緋の亡夫に逢いたい遠花火

愛しさを風に乘せませす受け取って

太陽の死角で咲いた月下美人

ソーマン流しみんなおいでよ風物詩

出雲市 岸 桂子

ゼンマイが緩んでわたくしらしくなる

歳月や渡れぬ橋が多くなる

思いあぐんでケセラセラと片付ける

生老病死神に約束して生まれ

断捨離へ想い出の品ばかりある

出雲市 小白金 房子

盆踊り先祖敬う大きな輪

豆腐一丁夫婦で崩す夏の汗

婦省娘の疲れをいやす古畳

千木高く冷気授かる神の庭

早起きは神と対話の朝を掃く

出雲市 多久和 敬子

あの角を曲がったところにある鬼門

ストレスが遊びの中にさつと溶け

センスいい友の仕種はすぐ忘れ

ストレスもほんわか包むバスタオル

勘のいい人の隣の椅子に掛け

雲南市 菅田 かつ子

世話やきが起きて来ないと気にかかる

やと来たのに先着へ間に合わず

生き生きとおしゃれの似合う九十歳

アスファルト足の裏よりくる暑さ

友達が来ると元気なおじいさん

雲南市 松本 昌

小奇麗な身の振るまいに親思う

特高を知らぬ現代共謀罪

天変地異続いて政界激動す

零細な企業につらい人件費

星光るその一つで良し希望持ち

島根県 伊藤 寿美

八月の仏壇を拭く亡夫の忌
五輪音頭の街過労死のニュース聞く
川を上るとボクの生まれた郷がある
好きなことしたと最後は言うつもり
植山行きの鞆に入れる「曾野綾子」

島根県 松本 はるみ

幾十年経つとも忘れぬ戦の日
その刻の世情を語る人も減り
おそるるは平和に慣れた今の風
命ひとつ消えて静かな揚げ花火
逆もまた真なり仏おわします

岡山市 工藤 千代子

笑った貌で向日葵は枯れている
競争も優劣もない夏の空
五人前が二人前になったレシビ
争いは右手に見えてまいます
何故何故何故忘れる力あればなあ

岡山市 丹下 凱夫

月見草待つ人も訪う人もなく
猛暑でも気力でカラス鳴いている
朗報のように立秋やってくる
墓掃除もうすぐ世話になります
盆の道ちちははに逢い子にも逢う

岡山市 藤成 操江

大器晩成まだ実がならぬ私の木
旅先で見知らぬ人とする足湯
迷うたら一日置いて出す答
体形が崩れてからのダイエット
廃校の歴史の中の一人です

岡山市 前田 恵美子

六十キロ生った梅の木お礼肥
本物の主婦になるよと梅漬ける
雑草の中に宝のある畑
留守番をするより靴は外が好き
留守番の夫にセブンのカード置く

笠岡市 藤井 智史

サッカー混せてわたしが消えました
神様に戦力外を言い渡す
胃もたれの愛は幸せかもしれぬ
ギトギトな愛を洗剤にて落とす
じゅうじゅうとおいしい愛を召し上がれ

岡山県 池田 たか子

贅知らぬ母に仏間のゆり香る
遠花火空爆の夜の音になる
湯加減を聞いた昭和の火吹き竹
朝ドラの原風景に戻れない
饒舌に頷く首が痛くなる

岡山県 高岡茂子

「老いのケジメ」解っているが出来ぬまま
盆踊りロック仕込みの足さばき
朝の五時雑草との戦いはじまる
家にいた八人目の敵朝ドラ
静かにして蝉よテレビが聞こえない

岡山県 田中 恵

鍬洗うかすかに届く遠火花
背番号に祈りがこめてある針目
蚊に刺され脳味噌までも痒くなる
生活の急所握っているタオル
背なにくる温い視線や合歡の花

岡山県 紫 しめの

あちこちにボクの着ぐるみ置いてある
本心は妻が原稿書いてから
こだわりを黙って見てる人と居る
昼メロのクライマックス猫欠伸
外は雨 猫の帰りを待っている

岡山県 山 縣 のぶ子

パラソルも慌てふためくゲリラ雨
子等が来て家中夏に衣替え
ママの口ストップ利かぬ機関銃
方便の嘘もウンだと猫わらう
百歳の恩師パワーを漲らす

広島市 岸 本 清

五七五ひねりひねって脳刺撃
この暑さ力舞吼カープが吹き飛ばす
物忘れしても晩酌忘れない
与野党に欲しいがっぷり四つ相撲
タオルより加計で知られた今治市

竹原市 石 原 淑 子

核ミサイル頭の上を飛びゆくか
離岸流流されるのも一つの手
酷暑です凜と桔梗の心意気
熱帯夜もいつしか虫の声を聴く
倅せの種を少女の懐に

竹原市 岩 本 笑 子

無となつて祈る八月六日来る
年毎にヒロシマ暑き影法師
台風通過妻まん中に座る
待合室小さな社交場だろう
ど真ん中の夏に鈴虫の鳴く

三原市 鴨 田 昭 紀

初舞台らしいゴツゴツした演技
肩書きが邪魔して穴が覗けない
八合目辺りで生き方を変える
信用が出来ない油断せぬ男
核なき世界祈っても祈っても

(平田実男さんの句は46頁にあります)

川柳塔の

川柳讃歌

⑬

上方芸能評論家 木津川 計

芦屋市へ引つ越しました 便りくる

大浦 初音

所変わつての自慢は「京都の水、大阪の色町」だった。だから坂田藤十郎は元禄十年、江戸の役者中村七三郎に楽屋見舞を届けた。添状に「加茂川の水一壺進上仕り候」。藤山寛美もある歌舞伎役者の楽屋に届け物をした。届けたのは大阪の色町の美しい芸者で、その袷に「楽屋見舞い」とあった。初音さんに届いたのは芦屋市への引つ越し通知だった。「京都で学び大阪で働き芦屋に住む」人生目標を果たした人物からの達成宣言だった。

りっしんべん付けて人間らしくなる

小谷 小雪

ヒロポン中毒でミヤコ蝶々は入院していた戦後があった。その病院の隣が刑務所だった。服役者たちが彼女を指さし「人間、あんなつたらおしまいや」と言ってるのを聞いて、ヒロポンをやめる決心をしたと自傳に書いてい

る。正司歌江は幻覚症状に苦しみ、ミス・ワカナは中毒死した。だから蝶々はりっしんべんで立ち直った。即ち、末路の悲「惨」を「悟」り、後「悔」して「懺悔」したのである。小雪さん、貴女にはその必要はありません。

百歳より今日一日を切に生く

田浦 實

佐藤愛子ばりに言うなら「九十歳 何がめでたい」である。卒寿ではあるが、卒は終ることだから卒業と云い、意識を失って倒れるから卒倒と言った。だから卒寿はめでたいこととが終るのである。文字通り「何がめでたい」である。永六輔の「大往生」がいう。「九十を越えてから考えるようになったんだけどね。「長寿」って言うでしょう。寝たきり老人が多くなるだけでしょう。「寿」なんてものじゃないよねえ」。實さん、切に生きる事です。

支援金一番小さな子の箱に

若本 安代

主君の子の首を打たねばならなくなった松王丸は身代わりに我が子小太郎の首を武部源藏に打たせたのである。小太郎の健気な最期を聞いた松王丸は「でかしおりました。利口な奴、立派な奴、けなげな八つや九つで親に代つて見送り、お役に立つは孝行者」、笑おうとして涙にむせび、声をあげて泣く。小さ

な子の健気な様子は人の胸を打つ。支援金を求めて小さな子が街頭に立つ。安代さん、よくその子に入れてやりました。僕も入れます。人生が重くて沈む時もある

前田 楓花

「自分の葬式は必要ですか？」と朝日のbe面がアンケートした。「はい」44%、「いいえ」56%だった。「いいえ」の理由1位は「ひっそりと終わりたい」7位に「参列者がいそがない」。最終8位は「見送ってほしい人がいない」と続く。友人も人付き合いもなく孤独に生きている人が少なからずいるのだ。僕もそうで、参列者は15人ぐらいではないかと思うと「人生が重くて沈む」。楓花さん、貴女が沈むのは体重増のときぐらいでしょう。

あの人の胸には鍵穴が二つ

森山 盛桜

「鍵」——大谷崎晩年の話題作である。妻への性的欲望を毎日赤裸々に書く日記を抽出に隠して鍵をかける。その鍵をわざと落としたり置き忘れて妻に読ませる夫。妻も夫への性的不満を日記に書いて隠すが、夫が読んでるのを知っている。盛桜さん、あの人には知られてもよい鍵穴が一つと知られたくない秘密の鍵穴がもう一つあります。昔人氣だった融紅鸞なら言います。「あんさん別れなはれ」

自選集

小島蘭幸

笑った泣いた大往生の義父でした
義父の眼よ瓢箪の絵の籠の眼よ
褒章の義父とつぶれるまで飲んだ
ランコーさんと呼ぶご機嫌な義父でした
木の精になつて帰つて来い義父よ

都倉求芽

消去法に席卷された脳隙間
盆休暇脳に届けるのも忘れ
過去帳にせめてお詫びの盆の花
盆のバス停杖持つ人ばかり
夏の陽へまだ輪は欠けぬ草いきれ

土橋螢

乱世を見送っている曼珠沙華
若者に年金の荷を重くする
夕顔が咲くまで待つてくれますか
丸描いて四角を書いて介護され
アツと言う間に九十歳になる

西出楓葉

肅肅と近づいてくるエンディング
出来るならお腹に戻したいわが子
結局は暇な一日持て余す
シミと皺ほうれい線もわが歴史
開かずの間そつと覗いてみる夜更け

仁部四郎

お月様私の影は詩人です
付度の影法案に透けて見え
午後三時シャッター街に野良の影
出世して影に背骨ができてきた
惜しまれて影も残さず腹を切り

前たもつ

神様に示され両眼手術する
巡視するナースの影に眼を瞑る
眼帯ごし眺め絶景スカイビル
余生明るく生きよと視力与えられ
両眼開け眺める主治医若く見え

三宅保州

七輪で秋刀魚を焼いているグルメ
秒単位の黙祷で君との訣れ
音ほども乾いてくれぬ乾燥機
お下がりを着てみたかったひとりっ子
百万本のバラも虹にはおよばない

宮西弥生

神の掌にすがる八十代を生きる
ペンダコの数だけ若い傷の数
かりそめの握手にどきどきと響く
桐一葉落ちたら女は忙ぎ足
しあわせに近くて遠い山の寺

村上玄也

がんと酒を飲めたら楽しから
がんと飲めるお人は頼もしい
がんと飲めてた頃が懐かしい
がんと飲みまくってる夢を見た
天国へ行けばがんとやるつもり

御意のままに

八木千代

生かされて菌を植えた数 抜いた数
天高き秋に備えてとりあえず
橋架けてもらう修繕してもらう
嗽しろ開けろ閉じろと御意のまま
あたりまえだが抜かれたあとには穴になる

山本希久子

眺めています裁くかたちに落ちる滝
八十路のルール自分に甘くしてならぬ
無防備の外出太陽に負けました
針の先ほどの悪意も持たぬ薔薇
続編の続編あたり我が命

両川洋々

人情脆い鬼が他人と思えない
文豪の苦惱ベン拵知り尽くす
落城を見た石垣が黙り込む
鬼と仏が和解を合意したワルツ
火炙りの刑も承知で君に惚れ

板尾岳人

4 B が折れてしまった神無月
松茸がたべたくなつて食べました
森伊蔵飲んで陀羅尼助のみました
お母さん元気ですか父さんも
暑いので水をください甘い水

川上大輪

蓮根も竹輪も穴は指定席
股のぞき何してると言われても
人生はみんな主役で脇役で
落書の好きなDNAである
喉仏の先は魔界になっている

木本朱夏

畳敷ついた喪服でお巾い
通り雨だった別れは突然に
覚悟ならまだまだ遠い先のこと
もう若くないから写真撮らないで
脳天に喝 コーヒーはブラックで

第162回 大阪川柳の会

日時 10月4日(水) 午後1時開場・午後2時締切
 会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
 宿題と選者(各題2句・席題なし)
 △「磨く」川人 良種 △「差」天根 夢草
 △「パニック」島田 誠一 △「椅」子 森中恵美子
 会費 1000円 欠席投句 10月3日まで 会員に限る
 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706
 本田智彦宛

世界一姉の小梅と夏を越す
 他人様に任ずに限る家終い
 ビーチでは大胆すぎるサングラス
 つるめない唄を忘れたカナリアと
 早起きの蟬に日課をしきられる

津
守
柳
伸

「森伊蔵」先ず神棚に差し上げる
 長生きの褒美毎晩うまい酒
 アニサキス殺す焼酎ストレート
 女狐も財布も消えて二日酔い
 検査値が酒をやめると言っている

新
家
完
司

紫陽花の藍に見蕩れている暮色
 博物館を出ると未来へ続く道
 月見草に道を訪ねて行く通夜
 ちよつと手を入れると生きて来る庭木
 一隅をひたすら照らす火の祈り

斉
藤
亮

第6回 さんだ川柳大会

開催日 10月17日(火)
 場所 キッピーモール6F (JR三田駅前)
 兼題 (席題なし・各題2句・欠席投句拝辞)
 ★「百」 長井俊昭 選
 ★「自慢」 富永恭子 選
 ★「うっかり」 山田耕治 選
 ★「許す」 上田ひとみ 選
 ★「スマホ」 長浜美籠 選
 ★「自由吟」 堀正 選
 会費 1500円(お土産付き)
 12:00 開場 受付開始
 13:00 出句締切
 ☆お話し「川柳さんだ200回の歩み」
 北野哲男
 14:00 披講開始 15:45 表彰
 16:00 閉会
 16:30 懇親会(先着50名 会費3000円)
 主催 三田市川柳協会
 連絡先 堀正和 TEL 079-559-1255
 田中章子 TEL 079-720-8931



(つづき)

入院で一際子の愛妻の愛
 退院の日を引き寄せるリハビリー
 悪いことしないが昼の月のよう
 盛大な拍手うながす発起人
 天下り先に居ました元上司

宇
部
市
平
田
実
男

木津川計という温かさ 佐野 しば

他人にはどうでも良いことだが、私は木津川計のファンです。どのくらい好きかと言うと、木津川計の名前をニヤニヤ眺めながらコーヒートの五、六杯はいけると思う。

川柳を始めた頃、川マガに「人生としての川柳」の連載を見つけて嬉しがっていたら、直に終わってしまっただ。

諦めきれなくて他を探したら、川柳塔に「川柳讃歌」を連載中と分かった。以降、この一頁が読みたくて、購読を続けている。

時には「川柳塔」の他の頁も読む。

例えば二〇一五年の特集「麻生路郎没後五〇年―柳多留から二五〇年川柳の過去・現在・未来を俯瞰する」には、六名の川柳家が寄稿していたが、江畑哲男代表の「レアリズムの復権」は、感動して読んだ。のちに愛媛の方も、賛意を寄せている。ところで木津川計氏、肩書は上方芸能評論家とあるが、私の存じ上げているのは川柳の解説者、批評家、もっと言えば応援団長の部分です。で、氏のどこが良いかと問われれば、ま、寅さんのマネをするようですが、木津川計を読むと（ああ、生まれて来て良かった）という、優しい気持ちになれるのです。

〔とつつかしの窓〕より転載

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

にんげんが人間らしく生きられず
念仏のかわりに聴いている演歌
大器晩成 駅の階段あがりかね
年金のいのちに暑い夏だった
ゆるせない人にも妻や友がおり
また会えてすこし元気になってくる
鳥獣戯画いまもいじめは変わらない
大正生れ怠けることもままならず
新聞の隅まで読んでいる余生
レーニンの像逆転の空を見る
ハリハリ鯨を探すキタミナミ
土建屋の社長に頼むねこの砂
もう誰も何も言わない消費税
長生きをして金箔の酒に酔い
楽あれば苦あり久しくつづく楽
釈尼妙寂ことしも母の忌を迎え
ころまで貧しくなつてどうします
約束をつぎつぎとする余命表



川上大輪選

堺市 小林 若芽

しあわせな余生が何故か落ち着かぬ
なんだって言える仲にもあるマル秘
遠い日がまた甦る蟬時雨

愛されている錯覚で生きられる

伸びきったゴムにも残る使命感
ギクシヤクと地球が廻る音がする

うなずきのひとつ一つにある想い

和歌山市 北原 昭枝

耳慣れた小言を軽く聞き流す
思いやりつかず離れずふたりいる

穴いくつ繕ってきた縁の下
石橋を軽くたたいて黄昏れる

あの人を月と待ってる影法師

河内長野市 原 熊一知津子

道化師の哀しいほどのおどけぶり

五線譜から飛びだしてゆく好奇心
避け続け山がドンドン高くなる

肌合いがあわずそっぽを向く言葉

温室の甘い暮らしへ堕ちていく
別れの子感雨脚が強くなる

那覇市 前川 真

いい日だな影まで今日は弾み出す
青空に向けてハードル上げてみる

庭先で無心の靴に履き替える

本質を見たいと眼鏡洗ってる

頼りがいある人の背に付箋貼る
片付けも古手帖開け途中下車

西予市 西田 美恵子

吐いて吸う体の毒が抜けるまで

流れに任すか反対側に泳ごうか
亡母さんかと思う火の音水の音

貧乏性でこの休日を持て余し
頭に巻くと俄然タオルもやる気出す

少女から女になった日のブルー

妻よりも時には妹 秋の風

府中市 田 辺 和 子

酒の当てだけが目当ての夫の食

厭きもせず夏の定番胡瓜揉み

アウトにセーフ昼寝の枕聞いている

手懐けて二兎の楽しみ飼ってみる

恐ろしや生命線がここまでも

三田市 九 村 義 徳

逆境に耐えた心の力こぶ

大病が二人の絆強くした

この鍵でこころの扉開きますか

もてなしの心が地球かけ巡る

色褪せた心に響くわらべ唄

知らんぶり天下一品老いの技

米子市 野 川 宣 子

病床の父はもしもに怯えてた

夜の部に持ち歌一つ選って出る

努力には神も仏も味方する

手は打った奇跡信じて寝て待とう

後列を歩くと聞けるいいニュース

何処にでも行列乱すボスがいる

米子市 伊 塚 美 枝 子

聞き放題セミのコース無料です

静かですラジオ体操盆休み

思いきり畑で汗かくダイエツト

炎天下ゆれる稲穂も暑かろう

この歳になつても迷う別れ道

雑草もその時々花咲かす

瀬戸内市 東 横 ますみ

苦も楽も見せてセピアになる写真

二つ目の尻尾が妥協許さない

静と動二つの舌を使いわけ

一本の線に仏も鬼も棲む

まるい線しかくい線もあって人

うっかりと踏んでしまった鬼の影

寝屋川市 岡 本 勲

ぬるいお茶無言ですする古い二人

無欲だと言いつつ実はジャンボ買う

仕返しはぬるいビールにぬるい風呂

点滅をしてから長い老いの道

他人ならすぐに目につく矛盾点

会議後の居酒屋で出るいい答え

広島市 田 桑 恵 子

広島がヒロシマになる8・6

灼熱の天と地と人 原爆忌

原爆忌あの日も空は青かった

今日もまた笑って終える平和な日

仏壇に庭の小菊を一番に

エンディングノート買ったがそのまんま

松山市 郷田みや

温度差があってもギュッと手を握る

締切りに絡んだ紐が外せない

脇役のつもりいつでもグーを出す

涙と汗いっしょに拭う原爆忌

大根の乱切り乱れないリズム

松山市 柳田かおる

柔らかなことばに油断してしまふ

万物の祈りで朝がやってくる

臨機応変とても身軽い紙コップ

スロークライフちさい嵐に乱される

ハーブ演奏影もアートになっている

今治市 渡邊伊津志

無器用に勝る明るさ持っている

子の辞書に義理という字が薄くなり

長生きの秘訣笑顔と思いやり

飾らない言葉が好きでウマが合う

幸せは意外な場所に落ちてている

大洲市 花岡順子

ドジ踏んでピエロに度胸ついてきた

二三日ならば魅力のある田舎

一葉も論吉も長居せぬ財布

究極のおまけ余生をまだ走り

黄泉の世界へ誘うように経の音

高知市 三谷松太郎

愛欲を笑ってチヨウチヨひらひらと

夢ちぎり風にまかせて撒いてきた

あの女も惚けたんだって千切れ雲

おお親父陳腐ながらも有り難う

火が降ろと槍が降ろうと明日は明日

福岡県 本田さくら

おむかひの猫はわが家がお気に入りに

木も花も人も暑さで喘いでる

亀の歩幅わたしゆつくりついて行く

脳ドック認知症ではなかったよ

夜の雨生き返ってる庭の花

唐津市 岩崎實

何しても当たり前だと評価され

真実の破片どこかに落ちている

問題が顔を揃えてはかどらず

付き添いにすべてまかせて患者です

九十で歩くけいこに励んでる

佐賀県 真島久美子

A4とB5の違いほどの幸

子に聞かす話いくつか落とす枝

ダメージがひよんなどこから顔を出す

これもまたホットサンドに挟む夏

欠けたのは集中力とお月様

沖繩県 島村 つばき

脳トレで買ったパズルは寝たつきり

白無垢へ父は血圧二〇〇越え

痛み止め心に効かず神頼み

別腹を探してそつとイチゴパフェ

腹八分ちよつと足りずに迷い箸

シドニー 坂上 のり子

初盆へ外灯つけて道しるべ

心の友が一人欠けまた一人欠け

知らん顔してゐるが耳が動いてる

気にかかるちよつと近寄り難い人

テロもない昔のような旅したい

札幌市 斉藤 宏子

夏さかり生命を燃やす北の花

刑務所の池に静かな蓮の群

茄子の馬父母来てる盆の朝

この世よりあの世の友がなつかしく

生きる道さがし迷つた青春譜

弘前市 高森 一 吞

羽根が折れ屋台で吸る夜鳴きそば

西海岸ジュジュツと夕日落ちてゆく

二合半酒と貴女があれば良い

どの愚痴も防腐剤でも入れておく

義理欠いた年に二度目の墓参り

横浜市 巖田 かず枝

テポドンは何人分の食事代

会食で皆の笑顔がごちそうに

冷房の部屋に夫と孫と犬

溜め息をつくからくじが当たらない

飲み会の世話役だけはまめな人

横浜市 川島 良子

介護から学ぶわたしの人生譜

「希望」という文字で最後のページ

貧相な生き方他人のアラ探し

夏休み孫と方程式を解く

ばあばとプリクラ笑い転げた夏日記

豊橋市 西郷 紀美代

また戻る癖になつて忘れる物

飲み込んだ不満の束を解く酒

乳牛の気持ちかわかるデカイ胸

猫舌と知らずに入れた熱いお茶

常勤を辞むパートにない休み

豊橋市 藤田 千休

両足が拒否権つかうウォーキング

タイヤにも格差があつた偏摩耗

つちの子が見つかるまでのファンタジー

風見鶏いまだ右とも左とも

肩書きの消えた名刺が知る世間

大阪市 柴 本 ばつは

赤くあかく秋の真実曼殊沙華
里はアト秋百色の実りです
吾亦紅けつして嘘の吐けぬ色
この夏は頑張りました案山子さん
柿も鈴生り運動会だ家中で

大阪市 高 杉 力

怒ってる音で茶碗を洗ってる
右派だろが左派であろうが大ジヨツキ
返信の速度で分かるラブラブ度
居酒屋の男よく似た顔となる
父の句を読み返してる盆休み

大阪市 森 廣 子

猛暑にも強かに咲く百日紅
流れ星時々嫉妬してしまふ
二人の恋を満月までが覗き込む
とばっちり浴びて文句が言えぬまま
八十枚も鱗重ねてまだ迷う

大阪市 横 山 里 子

丁寧な医者診察葉増え
ざる二枚さらりと老婆食べて行き
河内音頭手足勝手に踊り出す
ひとときの平和楽しむ遠花火
老いづいて傾いて行く楽な方

大阪市 吉 田 知 之

万年筆何時のまにやら使わない
クラス会次天国で会いましょう
失言をチャンスに変える反対派
叱るのは優しさよりもむつかしい
久作りで心の糧を貰ってる

堺市 近 藤 治 子

初恋のなつかしい人みごと古い
ハイタツチなにかうれしさ満ちてくる
収集日猫や烏の知恵に負け
旅鞆心はすでに空の上
明日会える思うと今夜ねむれない

堺市 松 永 庄 三

AIよ川柳はまだ作れまい
まず血圧計って今日のプラン立て
お散歩のポチがご縁で友ができ
妻の後しぶしぶカート押してます
心地よいうたた寝妻はなぜ起こす

池田市 上 山 堅 坊

へんてこな名前キラキラネームとは
鎮守の森心を洗う深呼吸
社会保障右往左往は困ります
居酒屋の女性一人に和む席
深酒を避けて楽しむ老いの酒

泉大津市 助川和美

独り居に門限のない月の道

身の危険覚悟で妻に口ごたえ

顔に皺あるけど脳に皺がない

旅途中写真ばかりを撮っている

しあわせはほどほどがよい冷奴

河内長野市 穂口正子

あれこれと心はすぐにささくれる

色色に染めて私に分からない

おみくじの吉凶さげて撓う枝

悪知恵が一杯浮かぶ飲めるなら

スーパーが過疎化の町を見捨てそう

河内長野市 渡邊修

耳遠く連絡網はSMで

品格が落ちに落ちてるチルドレン

老人会あちらこちらでスマホ見る

坊さんが終活値段ネット配

密入のアリに目凝らす港町

高槻市 三谷白黒

孫達は婆ちゃん学校卒業し

病院でいつもの順で待っている

耳元で寝てはダメだと蚊の声が

おはようは先に言うのが気持ちよい

この齡で鍛えるつもりがアダになり

豊中市 荒木郁子

満天の星を期待のバスタワー

不老不死謳い文句の温泉へ

手品ミス笑いを誘うボランティア

スマホへの踏ん切りつかぬ重い腰

マルかじりトマトに元氣貰う朝

豊中市 貝塚正子

つくづくとつくづくと見る我が容姿

神前で祈ればあとは運まかせ

雰囲気で買わせてしまう叩き売り

しつけ糸抜いて晴れ着が胸を張る

好々爺孫に魂抜き取られ

富田林市 小出修三

目隠しと耳栓のいる仮眠室

鳩笛の奏者に母の影かさね

筋トレに脳トレ忙し高齢者

投げキッスされて賞状裏返る

客室に子猫飼ってる若夫婦

八尾市 前田紀雄

何よりも妻の笑顔が救いです

冷めたスープに赤い糸絡み付く

こんな人つくづく嫌になる政治

二日酔いコーンスープが胃に馴染む

口先は丁寧中身は変わらない

大阪府 小 栢 こずえ

少しづつ世間とずれていく輪
くすり飲み今日一日を頼んでる
儉約が美德の頃に戻りたい
誕生日来るのがこわい齢になり
昼寝して午後の気力を充電す

大阪府 神 野 千恵子

カルシウム不足のような服を着て
AIが喜怒哀楽に惑わされ
目を瞑る心と会話するために
ビッグバン茶の間にもある小宇宙
公私混同先ずはトップが実践し

大阪府 畑 中 節 子

詩よめば余生にゆとり静かなり
庭の木は伸びて私は低くなる
名札つけ束ねた野菜道の駅
匂いまで辛い顔する夏大根
午後の照り葉うらにまわるカタツムリ

神戸市 近 藤 勝 正

痛いところ毎に変わる今日は首
寂しいな帰省するたびまた一人
スマホ持ちなんだか若い心地する
老人もマンガを読んでいいですか
痴呆だがビール冷やすの忘れない

神戸市 田 本 古 鈴

お酒でも呑んでみようか人恋し
つまらなき世になくさめの揚げ花火
さほど差はないやもしれぬ虫と我
バラにトゲ人に七色癖があり
どうなるか見えぬ未来に乾杯す

尼崎市 清 水 久美子

猛暑日に残暑見舞が5通来る
山の日到老父母と立つ天保山
届け出も無しに大脳盆休み
桁ひとつお代見落とす床涼み
おめでたかビール腹かと賭けている

伊丹市 延 寿 庵 野 鶴

眠られぬ夜の継ぎ目に飲むワイン
海のある町で火蟻がよく笑う
それらしい貌して観てるピカソ展
油断したすきにふわふわ逃げる夢
魂をゆするみすゞの詩と対峙

伊丹市 平 井 富 夫

介護食ビール1本付けてくれ
恋終わるこれから嘘はつきません
褒め上手耳をかしてる聞き上手
いい夢だ続き見るため二度寝する
婆ちゃんね家電が喋る時代です

加西市 山端 なつみ

和歌山市 倉橋 悦子

口開けて診察台のトドになる

歯科医師の腹が頭を押してくる

この腹じゃ虫歯ありそな歯医者さん

歯科医師はマスクで隠すエンマ顔

歯を二本抜かれ私の顔変わる

三田市 東内 美智子

居れば世話居らねば不安一人居は

くしゃくしゃのハンカチどこで泣いてるの

仏前に朝夕しゃべる独り言

AIも出来ぬか死の目覚ますこと

只一つ私が後でよかったか

三田市 松本 ゆかり

ささやかにご当地花火闇に咲く

裸んぼ追ってはたいいた天瓜粉

この暑さ寡黙であった父思う

歯痒いが体は理屈で動かない

このしゃれに無反応とは歯痒いね

宝塚市 丸山 孔一

トイプーを抱いて笑顔のお爺さん

二センチを跨いで五ミリに蹴躓く

妻が問うそれもそうだど何故言えぬ

どうですか まあまあですと古い友

百億個誰が数えた乳酸菌

嘘つくと愛らしい瞳が散歩する

夕暮れが輝く花が咲くように

川柳行脚柳友が逝く風は秋

必要とされて動いて空元氣

乗り切った猛暑残暑が迎え撃つ

鳥取市 田賀 八千代

旧姓に戻る押印重すぎる

旧姓の頃は素直ないい女

アプローチしても無視する古女房

手向かっても君の手の内から出れぬ

ろくすっぽ稼がず亭主面するな

鳥取市 山野 すみれ

適当に暮らしているが嫁姑

アイデアは手のひらに乗る玉子から

傷口は2アウトから広がった

明日もあるような気がしてゴロ寝する

必要とされてこんないい笑顔

倉吉市 田中 けいこ

面倒な料理をさける危ないな

どうすればやる気が起きる昼寝する

何もかもやらねばならぬ膝痛む

歩こう会勿論行くがあと怖い

問題だ小さい子外で遊ばない

倉吉市 中村 毅

駅前タクシーついにいなくなり

廃線と豪華列車の不釣り合い

真夏日の読経早口ではないか

親の為付けた手摺りを子が使う

見栄張って食べてみようか時価のネタ

倉吉市 堀 かずこ

年金が待ち遠しいよ財布見る

くやしさを心にかくし笑み浮かべ

食べすぎでボタン外して息を吐く

悩むまいあすはいい日になるからね

ささやかな暮らしだけど陽はそそぐ

倉吉市 若松 由紀子

三面鏡日々の老化に気が付かず

凶星です返す言葉が見付からぬ

老人の浪費年金範囲内

老い独り心の穴はケータイで

人生の引き算残りあと僅か

米子市 川本 美津子

焼き鳥が落ちてきそうなの暑さ

家建てた燕はローン済んだかな

腹時計確かな猫がやって来た

梅雨明けを誰に聞いたか蝉が鳴く

飢餓の子にグルメだなんて言えないよ

米子市 黒田 紀美江

ガン検診乳房を急にエステする

ゼロ歳児今から探す保育園

断捨離をせかす耳鳴り止まらない

急げよと連呼の度にしわが増え

学校だけ行った教師に教えられ

米子市 雑賀 美和子

今日もまた辞書を片手に五七五

ブレ金にあやかろうにも職がない

弔慰金命は金に代えられぬ

乱高下株ではないよ血圧だ

アレッポの子らに平和を届けたい

米子市 戸田 真理子

亡母の味真似してみてもまだ遠い

しゃべりたくないが勝手に口動く

この暑さに残酷すぎる休肝日

猛暑続き気持ちぶれそな休肝日

きゅうりまで反抗するかよく曲がり

米子市 永井 三津子

夏休み孫のお守りは戦なり

じゃじゃ馬も子を持つ母の顔となり

おめでたとかいおなかに勘違い

盆休み本家の嫁が眠れない

読む楽しさ産むは苦しい句の深さ

鳥取県 門村幸子

夏色の肌に仕上がるウォーキング
元気ならなにもあわてることはない
こしょうの葉炊く匂いして父思う
老いの味わかり初めて身に沁みる
いまさらに自分の歳に目を見張る

鳥取県 下田茂登子

退院は出来たが施設送られた
不安という恐い病気に取りつかれ
医者には見えぬ不安があつて施設です
施設から癒されている不安症
死にかけて命拾つてくれた医師

雲南市 永見安子

足音の元気な人はかっこ良く
病んでみて自分の年を思い知り
玄関に元氣印の旗を立て
おいしさを知ったか猿が今日も来る
雨の音聞いてうとうと久しぶり

瀬戸内市 宮宅比佐恵

この暑さ義理も人情もお許しを
花活けて花の心になる私
負けて勝つこれも私の生きる道
古傷は私の生きて来た証し
久し振り会えば私は忘れられ

広島県 日谷寛

心まで笑つて今日が夕焼ける
待っているひとがいるからまたあした
セカンドラブ虹を指して飛んでいる
変わらない絆で今日を書きとめる
だまし絵のたましのようなラブゲーム

尾道市 小畑宣之

有り余る遺産で苦労してみたい
寅さんにそっくりだねとほめてやる
夢に見る母の姿は割烹着
気も口も荒いが芯はお人好し
寝る前に今夜の夢を予約する

府中市 岸田武

シルバーの草刈り隊は遅しい
安売りの意味三日ほどして気付く
許される程度を孫は知っている
あれは夢忘れるつもり飲んでいる
良く出来た抹茶碗だが重いなあ

宇部市 高山清子

逆光になると野心がすけて見え
曾孫に合う伸びてもない爪を切る
枯れている脳に刺激のカタカナ語
嫁の愚痴笑顔で聞いて皿洗う
長生きをほめ高齢保険値上げする

松山市 近藤修二

札幌市 富永恵子

マイナンバー隠したつもり忘れてる
オフレコと確認してもすぐバレる

勝負飯私の好きな飯を食べ

別れ際ホロリと未練ある泪

ビヤガーデン西日気にして飲むジョッキ
大胆な夢を載せてる風の海
赤い靴童話の国に可愛い子
ボケの実がたわわになると知った里

北九州市 小松紀子

白河市 鈴木たけし

不信感記憶にないとくり返す

八月かア時の流れが早すぎる

とっさの機転きかぬがくやくしくて

好きなことだけして生きるこれからは

沖縄県 あら さくら

タブレット指であやつる二歳の子

迷ったら花占いで決めてみる

夫婦だね主語がなくても通じ合う

渋滞の車の脇を行くトンボ

留守電に知らない人のメッセージ
洗濯指数見ながら梅雨の家事予定
徘徊はしないでとても追いつけぬ
卵かけご飯食べたくなるある日

上尾市 中村伸子

声揃う蟬の合唱楽譜なし

夏野菜シャワーあびると空見上げ

旅の宿眠れず夜明けバス寝する

五歳児の暑中見舞に元気でる

沖縄県 禱 ももと

真夏日のサラリ薄手が心地良い

昇る日にバラのつぼみがさんざめく

飛んで来た笑顔と孫と通知表

踏んばってモデル歩きがいいリズム

沖縄県 宮 すみれ

眠らない京城をぶらりほろ酔いで

夜台並ぶ南山闊歩サンダルで

短命の血筋余命を推し測る

露天風呂バラの花弁星笑う

パソコンを習いに行つて葉書書く
子の不在夫婦の会話まるでゼロ
蒸し暑く犬まで床で夜を明かす
体調は野菜料理で復活し

東京都 高岡弥生

横浜市 長 島 亜希子

補強修理すればわたしもまだいける

選挙前立派な方に見えたけど

長年の友だが齢は聞いてない

来年の予約しちゃって平気かな

佐渡市 高 野 不 二

まんが見て笑ってるから呆けてない

ビールならつき合いますとまだ止めぬ

口だけはまだ達者でも歩けない

人並の答が多いアンケート

静岡市 渡 辺 芳 子

全世界仲良くなる日待っている

今日一日何をしようかまず化粧

何起る解らないまま今生きる

この命川の流れのまままで生き

名古屋市 山 本 三樹夫

友達と阿吽の呼吸旅に出る

両足を世論が縛り動けない

思考力素直な言葉出てこない

ゆっくりとゆっくり歩き目指す駅

江南市 脇 田 雅 美

すぐ笑う陽気な声に人が寄る

趣味多彩現役よりも忙しい

妻入院私と息子ハブニング

自立心邪魔になります助け舟

鈴鹿市 小 河 柳 女

蓮の花落ちる人気のはかなさよ

浮雲もきつと下界をにやにやと

嗅覚で迷路を抜けて陽を拝む

幸せだなあ おいしいものを食べるとき

京都市 櫻 崎 篤 子

台風が済んで安心テレビ消す

土手越えて蛍行きたいとこが有る

台風のため日本が崩れてる

梅雨明けを待たず今年の蝉が鳴き

大阪市 磯 島 福貴子

夏往くかトーンダウンの蝉しぐれ

七十五まだまだ未熟修業の途

しゃぼん玉虹をつつんでフワフワと

原爆忌今も瞳にきのこ雲

大阪市 小 野 雅 美

右向いて左向いても睨まれる

決断の遅さやっぱり母譲り

背けども背けども母差し出す手

丁寧語駆使して本音炙り出す

大阪市 田 中 廣 子

疲れはて眠りが浅い旅の宿

手をつなぎ温泉めぐる老いの旅

富士登山苦しかったの思い出す

待合いでどうぞどうぞと譲り合い

大阪市 中島 栄子

誘われて夫の写真と城崎へ
もう一度パパと一緒に暮らしたい
夏休み孫の昼食婆頼り
八十路とて頼りにされば踏んばれる

大阪市 樋口 眞

絶景の病室だけど不自由だ
炎天下配達心から感謝
父逝った歳まで二年いけるはず
暮じまい法要これで見納めに

大阪市 前川 善之

暑い夏涼を求めて地下街へ
日本刀武器にはあらず美術品
清流に涼しさ見せる白い花
夕立で空に描いた紅の橋

大阪市 松田 聰

台風がきつかけになり仲直り
加害者は保険任せで知らんぶり
久々の満月見入り動けない
どしゃぶりの中を駆けゆく人もいる

堺市 梅木 澄空

おばちゃんのタンクトップは見えてないよ
お腹グー笑い起こつて座が和み
すつきりはボディースーツの力添え
本気なら止めはしないしケチつけぬ

堺市 羽田野 洋介

いつまでも装い競うクラス会
タオルぐらいまあだ自分で絞れるよ
ノーコメント余計なことはもう言わぬ
浅知恵と悪知恵だけは負けないが

堺市 大和 峯二

若手棋士民に希望をプレゼント
国政に急を要する人づくり
長生きをしたいがさせぬこの政治
片隅で咲いていたいと日々努力

池田市 太田 省三

押し花へどんと重ねる広辞苑
酒豪から格下げされた退院後
新築の家に再び古時計
太い字で書く履歴書の特技欄

河内長野市 中島 一彌

宗達が風雷神を喚ける
絆創膏蝉鳴き止んで剥がす夏
蝉しぐれ誰が指揮者かピタリ止む
食卓に朝採り野菜の並ぶ贅

河内長野市 森田 旅人

セミの声猛暑にネジを巻いている
元結を切られて蝶になる女
寂しくて阿修羅の顔をまねてみる
会話なくスマホに頼るゾンビたち

吹田市 岩口 のぞみ

蝉時雨目覚まし代わり大合唱

浴衣着て金魚釣らずに彼を釣る

熱中症もつたいないは目をつぶり

夏休み渋滞避けてうちに居る

豊中市 荒巻 夢

AIよ平和の解を出してくれ

ごめんあそばせ今も牙持つ八十代

孫の婚負けじとバアバめかしこみ

初浴衣外股でゆく娘たち

豊中市 木藤 こみつ

服を着て泳ぐ練習するプール

安静にしてもちちゃんとお腹すく

安物のかつらかつらとすぐわかる

大仏様かなりイケメンだと思ふ

豊中市 源田 啓生

猫じゃらし抜けど切れども同じ場所

田舎道行けば昔に戻るか

飢えと言う記憶通じぬ日本人

ネットなる怪しき玩具深い闇

箕面市 寺井 柳童

ちびっ子に独占された将棋盤

知らん間にしゃべらされてる聞き上手

向日葵も頂垂れてるこの猛暑

帰省する足を奪った猛台風

箕面市 中山 春代

表から裏から迫る蝉しぐれ

赤い服白髪になって若返る

らくらくと書けた漢字に背かれる

よそ見している間も落ちる砂時計

羽曳野市 磯本 洋一

青空に核なきことを祈る日々

予定ありキャンセルをして夏昼寝

休耕田役目を終えて案山子寝る

目覚めない土竜叩きの永田町

羽曳野市 安本 美喜

秋野菜レシビ見ながら居眠りし

金時人參長老のよな髭を付け

残暑見舞麴のあまざけどつと来て

洗濯物笑つてる間によく乾く

枚方市 坂本 ミヨノ

白寿まで楽しく過ごす日々の歌

夏の汗香水付けて逢いに行く

暇と金あるのにのボヤク泣き笑い

夏バテを賑やかに飲み吹き飛ばす

八尾市 田邊 浩三

酔ってないボケていないは要注意

戦争中伏せて守ったこの命

北のため伏せの練習またするの

初孫を初めて叱るこの平手

八尾市 山川 寧

忘婦洞お尻並べて太平洋
那智の滝もう登れない喜寿の坂
カオケで一杯飲んで憂さ晴らし
家族では内部告発功なさず

川西市 日野岡 和之
老いし身の夢を繋げてバスツアー
早朝の冷気澆刺散步道

口だけは医者より達者退院日
出来不出来実りは問わぬ玉の汗

大阪府 高木 道子

施餓鬼会の読経に添える蟬時雨
暑いネと挨拶として恙無し
朝顔が虚空で暫し思案する
どこ行くの一寸気取ったサングラス

篠山市 永井 かほる

国会は常にならしが吹いている
後ろ見ず前だけ向いて生きてきた
いい方に取っておさめる腹の虫
ひとり言野菜の出来を待ち侘びる

大阪府 中内 孚彦

篠山市 長谷川 善輔

青い恋白いブラウス膨らんで
無人駅カタカタカタと扉開く
喪中はがき愛憎は消えている
国民の声はそもそも何処にある

神戸市 輿水 弘

窓開けて私の空気入れ替える
祖先は猿俺見て孫がいつも言う
腹の虫妻の前ではいい子ぶり
深読みがいつも外れて愚痴の山

篠山市 藤井 美智子

人生の嵐も越えて喜寿に居る
思ったらすぐにメモして老い確か
突然の病魔が兄をつれて逝く
飲みっぷりお酒愛した兄惚ぶ

神戸市 山根 弘華

三田市 幸田 厚子

無口だが個性しっかり光りだす
遅咲きの愛の蕾もほころんで
川柳で私の個性みがきます
暑さ負けペンがなかなか走らない

わが家では妻の一括右ならえ
テレビ欄狭い行にもマツコ居る
自分流記念日つくり浴びる酒
四辺形私の居場所どこの角

三田市 馬場 貴美江

熱帯夜朝蟬しぐれ昼炎暑
四季の国慈しみつつ老いの坂
星まつり逢いには来ない亡き夫よ
触診なしPCみつめる若い医者

宝塚市 太田 としお

天候不順きつと神様怒つてる
驕りだな感謝の二文字消えている
信じます神も仏もいらつしやる
不都合な所はみんな認知症

宝塚市 岸田 万彩

しつかりとボケて憂き世がパラダイス
後悔はせぬが脳波は乱れてる
ややこしい話世間へ黙秘権
時々は働き蜂の頃の夢

西宮市 福田 正彦

日傘にも水浴びさせる猛暑かな
立つ鳥が残した波紋人の世も
陽炎にゆらめく景色沸湯す
青春を燃やして跳ねる甲子園

姫路市 中野 忠

盆前に先祖の墓の色直し
元氣かいその一言で十分だ
理解度を試し安心認知症
衣食住足りてたりないもの多い

三木市 山口 久子

セント坂十年登り有難う
この暑さつまった脳の大掃除
九十年ふり返りまま良しとする
夕日背にひ孫の手借り散歩する

奈良市 尾畑 なを江

むずかしい程々という計り方
このごろは何するのにも手間がいる
午前二時ほんとの私動き出す
八月忌セミも命の限りなく

和歌山市 鍋嶋 澄子

君の口心を乱す空の雲
シドニーの街でお昼寝草の上
やって来た移動スーパ―高齢化
新緑の木もれ陽浴びる登山道

和歌山市 福呂 秀子

背伸びして時に思案の風入れる
慌てては料理メモして日の目見ず
まだ出来るちよつとスローな独楽鼠
健康に今度はお酢とメモ慌て

岩出市 村中 悦男

包丁を研げば調理もしたくなり
銀行に活気が集う年金日
坐り直せば楷書で文が書けました
電気代忘れて猛暑避けている

和歌山県 森 下 よりこ

暑いのもも言いたくないひとりと
曲がった腰真つ直ぐ伸びるいいベッド
暑いけど今日の予定を一つずつ
いつのまにか老いて手相が変わっている

鳥取市 上山 一平

オス蟬のソプラノに酔う夏木立
大砂丘足に擦り寄りこそばゆい
うし蛙ますます夜を暑くする
遠くから眺める丸い海が好き

鳥取市 大前 安子

古里の好きな景色は変わらない
故郷は必要だったものばかり
ゆっくりとだからだけの意味考える
気持ちだからだらひらがなだけの手紙書く

鳥取市 津村 律子

ありがとう言葉で五文字伝えよう
クーラーも目眩を起こす続猛暑
熱帯夜枕かかえて右左
台風五号風より水の怖さ知る

倉吉市 大羽 雄大

年金の枠に収まる遊びする
旨そうに魚食べてる魚好き
着てみたい赤と黒とのストライプ
ラジオ体操の流れぬ夏休み

倉吉市 岡崎 美知江

ほろほろとやさしい嘘に溺れそう
あなたとは呼ばずあなたと呼んでいた
嫌だったあなたの軒なつかしい
オレオレに騙されまいとネジをまく

倉吉市 田中 紀美恵

お人好し呑んでいないが払います
払いますよけちな人ほど口だけだ
悲しさともやもや捨てに遠い旅
ごつてりと心に愛を植えてゆく

倉吉市 宮田 風露

熱帯夜二時間寝れば目が覚める
人の振り見れば直せることなのに
嫁姑時には割れて膿を出す
雨の日はこんなになんかなくて良い

境港市 中井 虎尾

すれ違う日傘美人が香残す
渋滞の先頭なんとパトカーだ
文さんは北に恋して無視をされ
久々に親子で話しゃアンタダレ

米子市 生田 和之

時どきは財布の在り処確かめる
甲子園へ豪雨を縫ってやる予選
体調を朝の行事で確かめる
わたくしも家電も喘ぐ夏の宵

米子市 池田美穂

還暦の教え子よりも若い喜寿

容赦なく実家断捨離する娘

メールなら泣かずに話出来そうだ

背負っている荷も軽くなるクラス会

米子市 田村周子

ひよっこの主題歌聞こえ胸はずむ

気分よく歌が出るよな家が良い

呆けぬようもしものために料理する

面白い愉快な人はもてている

鳥取県 飯野菖子

賢さに親も顔負け三歳児

頑張ろう命絞って生きている

兄弟が団子のように仲が良い

0点も能力伸ばす強みです

鳥取県 児玉規雄

この顔に責任持てと言われても

免許証の顔写真あれ僕でない

フィクサーと顔役世間の裏表

人は皆寝れば地蔵の顔になる

鳥取県 橋本整

何事も天に任せて終の章

向き合って妻の遺影に小言いう

親切をお節介というふらちもの

戦友の呆け聞き吾が身ふり返る

松江市 相見柳歩

ハイセンス自分だけでも思いたい

おにごっこスマホの影もない時代

マスコミがまた適当なこと言つて

満星のチャンス肩こりひどくなり

松江市 中筋弘充

義母のおむつスベアー持つて行くホーム

水が来ぬ放棄地覚悟する田んぼ

ふるさとの川を覚えていた蚩

好きな人の肩に手を置く癖がある

松江市 山根邦代

二度寝して向かいの窓に笑われる

痛いところ寄り合える友がいる

嬉しさを自慢したくて弾む声

この足にヒール履かせた事がない

出雲市 黒目ひでお

呼応するすべてに感謝夢を追う

七十路坂やとと治つて下り坂

世直しの願い静かに燃えている

左脳いえ時のたつのもゆつくりと

玉野市 片岡富子

終活のノート良い事ばかり書く

心地良いスタレに蟬も止まつてる

にわか雨行くか戻るか迷い道

先ずおはぎゆつくりお盆準備する

岡山県 大杉敏夫

猪追えば必ず出会う石地藏
夏ばての犬が木陰でするをする
居酒屋へ律儀に犬が付いて来る
猪を逃がして犬がソツポ向く

広島市 松尾信彦

老いの影躲し余生の面白さ
方言の減った日本が世知辛い
清貧に生きて集まる輪ゴムかな
晩学で修正してゐる生兵法

竹原市 若年幸子

ライバルの力最近目を瞪る
母娘だから会話の火花火傷せぬ
温暖化日本侵略外来種
柔らかな文字涼風を乗せて来る

竹原市 土井輝恵

快方へ向かえば化粧したくなり
あんなにも悩み苦しみ何だった
計算になかった八十路目の前に
九十六嫌な人とは付き合わず

竹原市 六田半徳

午睡してこれからのこと考える
辞書をひく天眼鏡は手の許へ
カラオケを健康保持に再開し
少年期切りキズ残す肥後守

三原市 笹重耕三

蒼天へ割り込んでくる夏の雲
核兵器の放棄に理屈など要らぬ
ヒロシマの声を聴かない核の傘
路郎碑のまつりへ景気付ける蟬

三次市 伊藤寿子

三婆会一年ぶりの浮く心
お互いの小じわは笑みで隠しあう
心だけ若い三人続く会
川柳に今日も感謝の日を送る

山口市 青木隆子

ウォーキング二の足を踏む暑い朝
連日の猛暑私は土竜の子
我が人生日記五冊の汗と夢
母の愛忘れて文句口走る

岩国市 上村夢香

一周忌遺影の笑顔染みてくる
一票は自己責任で守り抜く
夜は明けるまだ煩惱は鎮座する
真実を知りたい想いただ募る

下松市 有海静枝

根が伸びる狭い硝子の瓶にささ
代償を求めぬ世話に軋む肩
寂しいか聞かれて返答に困る
言い勝ってさて対策を考える

新川柳鑑賞 (68)

麻生 路郎

新聞が補筆したよな遺族の辞

(法泉子)

「主人も満足でしょう」とか、「この子どもたちを立派に育ててゆくのが、これからのわたしのつとめです」とか、何とか、かとか、未亡人の言葉が型の如く報道されている。悲しい出来事の中でも常に遺族として、寸分の隙もない言葉が綴られているので、たぶん記者の補筆したものであろうとにらんだのである。補筆どころか、記者の作文の場合も多いのである。

スムーズにやっつたと葬儀委員長

(一 瓢)

厳肅な告別式が滞りなく終わったのを見て、「大変でしたでしょう」
「スムーズにやっつたよ」

と、いかにも、こんなことには馴れているよと云わんばかりに事務的に答えられたので、スムーズという言葉にユーモアを感じたの

である。

俗名をとどめて薬瓶しらずか

(不 二)

薬石効なくという訳である。まだそこには薬瓶がしずかに卓の上に残っている。しかも薬瓶には在りし日を物語るかのように俗名が読まれるのである。

人生の終焉が、斯うした静かさで迫って来ることは堪え難い淋しさである。

ビジネスのように会葬すませて来

(文 月)

世の中で多少知られている人は今日は何んとか会社の社長の告別式がある。と三日にあげず会葬する。利害関係の濃淡はあつても別に悲しい訳ではない。俵を走らせて型の如くに葬儀場へゆき型の如くに焼香をすませて帰る。まあ、これですんだという程度であるのを「ビジネスのように」と観たのである。

嘘ついて帰れば嘘が届いてた

(花代子)

大して嘘をつかなくてもよいことでも嘘をつく人間がいるものだ。悪質な嘘は別として、嘘をつく習性の人間は、何んの気なしにヒョイと嘘をつくものらしい。この句は嘘をついて帰ったところが、その嘘がもう届

いていたと云うのであるから大した嘘ではないらしい。嘘がバレても平気でいるような感じがこの句からうけとれるからである。なかなか面白いネライの句である。

菜の花の中の工場は閉めてあり

(菜 一)

ところは場末か、郊外であろう。田圃の中にボツンと工場が建っている。工場の周囲は菜の花の真つ盛りで、いかにも春らしくのんびりとした平和な風景であるが工場の煙突からは煙りも出ていない。工場の門は閉ざされたままで人影さえもささないことを思えば、そこには平和どころか中小工業の惨めさが眼に迫って来るのである。穏やかな表現で、しかも鋭い観察がこの句のいのちである。

立呑みでソースのついた名刺くれ

(豆 秋)

庶民的な立呑みで、呑むほどにだんだん口が軽くなる。

ツイ隣りの男とも口を利く。

コイツ話せるなアと思うとソロソロ名刺の交換がはじまる。それは平凡な情景に過ぎないが、この句のヤマは中七の「ソースのついた」である。もう既にだいたいまわっていることがうかがえて面白い。

平成二十九年 路郎賞

路郎賞準優秀作第一席

青森県 松山 芳生

奈良市



大久保 眞澄

あと一步で悪女になれるとこだった

味方ではないなニコニコ笑い過ぎ

腰だけ私もソフトクリームも

おばあさんですと背中中に書いてある

少しなら跳べる私も鶏も

とてつもないビッグな賞が舞い降りて来て、どうしよう、エライことになった、と狼狽えています。

柳 歴

柳歴七年、自分ではひよこのつもりでしたが、まだ卵よ、との大先輩の声に、まだまだ精進せねば

平成二十二年

と思っておりました。「身に余る」という言葉通り、

川柳塔 誌友

「身に余つ」ています。いつまでも皆様に「身に余つ

平成二十三年

てるね」と言われぬように努めるしかない、と改めて心に言い聞かせました。見張っていて下さい。

川柳塔賞受賞
平成二十四年
川柳塔同人

選考委員の皆様、先生、諸先輩方、優しいお友達、

現在

翠洋会会員

本当にありがとうございます。

川柳塔なら会員

ゼロ番線から蝶一匹が発つ

縄文の欠片が語りかけてくる

路郎賞準優秀作第二席

高槻市 原 洋志

あの鐘を鳴らした時がピークとは

夕焼けを集めてサンマ焼いている

あいまいに終わった秋を掃き寄せる

年の瀬に心の奥もすす払い

原画には戻れぬ被災地の涙

松山市

箕面市 中山 春代



柳田 かおる

折れたエンピツ出直せばいいじゃない
曲り角ふと夕焼けに会えそうな
幸せって窓辺に花を咲かせてる
愚かさを笑うもうひとりの私
続編は色鉛筆で描いている

迷ったら明るい方へ行ってみる
芋虫になった気分の方の五十肩
残り物ならべ一人のバイキング
ひらがなの子にひらがなで返事書く
セーターの毛玉を春の陽が笑う

川柳塔賞準優秀作第二席

伊丹市 延寿庵 野 鶴

この度は、川柳塔賞をいただきまして、ありがとうございます。
大海を見たくて、川柳塔に入会させて頂きました。これからも、自分らしい句を作りたいと思います。
今後ともよろしくお願いいたします。
本当にありがとうございます。

柳 歴

平成 八年 NHK川柳講座受講
平成 九年 川柳まつやま入会
平成二十八年 川柳塔誌友

人間の裏まで見えぬレントゲン
どん底でこころの向きを変えてみる
生きるためしつかり虹を食べている
風車くるりと風の置き手紙
加熱してみよう答えが変わるかも

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数 132名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点

(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸		4						3	1	5			2		
新家 完司			3			5	1		2				4		
小沢 淳	4				5		1				3			2	
福士 慕情			3					2			5		4		1
江見 見清			3	1	5		2								4
川端 一步			2				4	5		1			3		
古今堂蕉子			2	1				4					3		5
米澤 俣子					1	2		5				3		4	
古久保和子		1	2	3					5		4				
山田 耕治			5			4	2	1		3					
石橋 芳山			3	1					5		2		4		
黒田 茂代				2						3	5	4	1		
両川 洋々		4	2						1		5	3			
計	4	9	25	8	11	11	10	20	14	12	24	10	21	6	10
	村田博	栃尾奏子	大久保眞澄	伊達郁夫	富永恭子	島田千鶴子	楠見章子	吉村久仁雄	稲見則彦	太田扶美代	松山芳生	栗田忠士	原洋志	藤井則彦	井丸昌紀

川柳塔賞得点表 (応募総数 59名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点
(表の数字は得点)

作家 選者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸					1			4		2		3		5	
新家 完司		1	2	3	4					5					
小沢 淳		3					2	4		5					1
福士 慕情					4		3	5		2					1
江見 見清	3			2					4			1		5	
川端 一步		3						2		4	1			5	
古今堂蕉子			4				3	1		2		5			
米澤 俣子	2	3			5			1		4					
古久保和子		3			2		4	5		1					
山田 耕治				4			3			2		5	1		
石橋 芳山					1	2		4		5	3				
黒田 茂代		4						5	2			1		3	
両川 洋々		5					1	4				2			3
計	5	22	6	9	16	3	16	35	6	32	4	17	1	18	5
	川島良子	延寿庵野鶴	森廣子	岡本勲	前川真	中村伸子	木田比呂朗	柳田かおる	小河柳女	中山春代	大前安子	田中ゆみ子	中村毅	郷田みや	花岡順子

受賞作品

堺市 内藤 憲彦

こども達ごらんよあれが真珠湾

先生はもう恐くないクラス会

ああ言えばこう言う病氣完治せず

下戸だけどマイク握ればプレスリー

ふる里はインドネシアと言うウナギ

評 内藤憲彦：やさしく述べてはいるが痛烈な反戦歌となつている「こども達」。そして、「先生は」「ああ言えば」「下戸だけ」のユーモアなど。発想は自在であり表現は巧み。

山岡富美子：忘れることや病院で待たされることなど、日常のありふれた状況を哲学的に分析していて面白い。

矢倉五月：「タイプでは」「恋人ごっこ」など、異性に対するスタンスが絶妙。「落ちぶれた」は自嘲プラス風刺。

市坪武臣：自分の体調を正直に述べた「大丈夫」「走れたら」は実感句の良さと力を示した好例。

(新家 完司・記)

準賞作品

河内長野市 山岡 富美子

忘れるというお手軽な自然治療

大病院忍耐力をまず試す

花散つてからの素顔で勝負する

堺市 矢倉 五月

タイプではないので今もお友達

恋人ごっこしましょ電飾御堂筋

落ちぶれたついにサプりに手を出した

尼崎市 市坪 武臣

大丈夫ヨイシヨと言うと立てるから

走れたら今出たバスに乗れたのに

反省会枝道に逸れ飲み会に



内藤 憲彦

ご指導を頂いています先生や先輩の皆様にご心から感謝を申し上げます。ちよつとだけ妻にも感謝。定年後すぐ川柳を始めて十年目。栄ある賞を頂き、喜び一杯とブレッシャーを感じています。「軽味」「滑稽味」を心掛けていますもの「穿ち」のある句がなかなかできず反省ばかりしております。受賞を機に、尚一層の精進を致したく存じます。本当にありがとうございます。

柳 歴
 平成二十年 松寿会(バナソニック)入会
 平成二十二年 川柳塔社 誌友
 平成二十三年 川柳塔社 同人
 平成二十六年 川柳塔さかい 入会

平成二十九年度 檸檬賞

受賞作品

枚方市 海老池 洋

人間を監視カメラは信じない

評 受賞句 市井に監視カメラの何と多いこと、付度なしに役目を果たすカメラは人間の記憶や証言よりも正確さを自負しています。脱帽、準賞、升成さんの句は青少年の心意気を余すところなく表現され私の心に響きました。小沢さんの句には将来を託す若者へのチャレンジ精神の鼓舞激励と期待を見ました。一年間沢山の佳什を読ませて頂き感謝感謝。

(北野 哲男)

評 受賞された皆様おめでとうございます。年間七、五〇〇近いご投句の中からわずか五句の入賞です。どの句も味わい深く、それぞれ異なった色彩を放ち、さすがと唸らせる作品ばかりです。洋さんの句の人間不信の隠し味にドキッ、好さんの句には青春の苦悩が漂い、淳さんの作品は若人へのエール。候補の二句は、視点のあたたかさと情感の豊かさを思わせる素敵な作品でした。

(安土 理恵)



海老池 洋

思いもよらぬ受賞のお知らせ誠に恐縮に存じます。故薫風先生・天笑先生・蘭幸先生をはじめご指導を頂きました諸先生方・先輩の方々のお蔭と厚くお礼申し上げます。これを機に更なる人間陶冶の句作り に励んでまいります。どうか今後とも宜しくお願ひ 申し上げます。

柳 歴

平成三年 NHKカルチャー受講
平成五年 川柳塔同人
平成九年 一路賞受賞
平成十二年 路郎賞準優秀作一席受賞

準賞作品

大阪市 升成 好

ポケットに渦巻く青いアンビシヤス

札幌市 小沢 淳

少年よ沖でクジラを釣つてみよ

候補作品

河内長野市 中島 一 彌

炊き出しのサイズまちまち握り飯

大阪市 長高 俊 雄

ほたるいか富山の海はファンタジー

受 賞 作 品

青 森 県 松 山 芳 生

日 め ぐ り を 一 気 に は が す 再 起 の 日

評 本賞の芳生さんの句、例えば長い入院の後、久し振りに我が家に帰ってあすへの再起を期す祈りと決意の「一気にはがす」が力強く印象的。

準賞の敏子さんの句、何か実行しようとの固い決意を「靴を光らせる」と表現して巧み。同じく準賞の美義さんの句、ことなかれ主義の世の風潮を嘆き、「躰が乾いてる」と卓抜な表現で批判している。

評 本賞の芳生さんの句、その言語空間から、喜びがはねかえってくるような句です。再起の日までの一日一日の大切さもうかがえる。

敏子さんの句、夢と輝きが何気なく詠んである。平凡なようでも思いが伝わってきます。

美義さんの句、誰とのいさかい、どんな躰と思いのふくらみ句であるが躰が乾く今を素直に詠んでいる。(政岡日枝子)



松 山 芳 生

八十の節目に栄ある一路賞受賞の一報。素直に夢のような喜びに浸っております。諺に「継続は力なり」、正にこつこつ石を積んだ恩恵と思っております。急遽塔まつりに四回目の参加と致しました。全国の柳友にお逢いできる楽しみと、そして新しい風に触れて賞に恥じぬよう新しいスタートに致したいと思っております。最後に選に当たられました選者の皆様へ感謝申し上げます。

柳 歴
 平成十六年 川柳始める
 平成二十年 川柳塔誌友
 平成二十一年 川柳塔同人
 平成二十五年 各地柳壇賞候補
 平成二十七年 愛染帖準賞

準 賞 作 品

トライする明日履く靴光らせる

木下 敏子

いさかいを恐れ躰が乾いてる

富田 美義

候 補 作 品

挑戦者になろう拍手をもらうまで

丸山 健三

アスファルトジャングル睨むカメラの目

三浦 強一

三日目は伸ばした羽も草臥れる

坂本 蜂朗

受賞作品

寝屋川市 籠島 恵子

時折の木洩れ日だつて生きる糧

評 厳しくて暗いことの多い世の中、時に木洩れ日のようなうつつらとした明かりにさえ希望を見出して、前向きに生きようという強い意欲が示されている。準賞一句目はほどほどで満足して止めたことへの後悔、誰にもありがちな心の機微を突いた句。二句目は何が悲しいのか、泣いているところを他人に知られたいくない少女の気持ちが見事に描写されている。(村上 玄也)

評 いつも優しさ溢れる句を作っておられる。厚い雲に覆われた空、哀しみの雨が止み、うつつら陽の射すひとときに人は救われるのだ。頑張つて生きておられる姿に感動した。各地柳壇を毎月熟読し、多くの心打たれる句に出逢い、川柳と生きる幸せを思う。

(松本 文字)



籠島 恵子

一報をいただきながら、喜びのエンジンがなかなか掛かりません。その内、賞になった句のとおり、木洩れ日どころか太陽があつたのだと、ドキドキしてきました。道草ばかりの川柳でしたがこれも私流と、思っていた今日この頃、また精進の道にいざなわれた気がしております。

本当に有り難うございました。

柳 歴

平成八年 川柳塔同人

平成十五年 川柳文學

コロキユウム会員

準賞作品

ほどほどで止めていつでも悔いている 片山かずお

シャワーの音娘は泣いているらしい 安土 理恵

候補作品

ゲラ刷りの生命線に朱を入れる 大久保眞澄

トンネルをいくつも抜けてきた命 山本希久子

地球儀ぐるりイブモンタンに逢いに行く 山崎 武彦

消しゴムが思案のあとを知っている 山口 美穂

受賞者の皆さまおめでとう

小島 蘭 幸

平成29年度の六賞を受賞される皆さま、おめでとうございます。

猛暑の中、今年も8月12日に、川柳塔社事務所で第一次選考会を開催しました。第一次選考委員6名が、それぞれ路郎賞、川柳塔賞の応募作品の中から秀句、佳句をチェック、その中から私が最終の15名を選んで第二次選考の皆さまにお願い致しました。

路郎賞の大久保眞澄さんは、かつて川柳塔賞も受賞されている実力者です。準賞の松山芳生さんも毎月川柳塔へ佳句を發表されている好作家です。

川柳塔賞の柳田かおるさんは、今年今治の川柳大会で一緒に共選をさせていただいた好作家です。準賞の中山春代さん、延寿庵野鶴さん、今後の活躍が楽しみです。愛染帖賞の内藤憲彦さん、[♪]樓賞の海老池洋さん、一路賞の松山芳生さん、各地柳壇賞の籠島忠子さんおめでとうございます。

今回の六賞は、男性作家の活躍が目立ちました。中でも松山芳生さんは、路郎賞準賞と一路賞のダブル受賞に輝きました。

路郎賞、川柳塔賞の応募は、一年間の作品の中から5句を自選する良い機会だと思えます。多くの皆さまの参加をお待ちしています。

一賞選考経緯

西出 楓 楽

8月12日10時、川柳塔本社へ蘭幸主幹、完司理事長、大輪副主幹、朱夏・遠野副理事長、私の6名が集合、29年度2賞の1次選考が始まった。

路郎賞132名、川柳塔賞59名からの「1年間の句を評価してもらおう」という覇気と熱気がひしひしと伝わってくる。選考のこの作業は、これまでに「川柳塔」に發表された佳句を再読するという楽しみでもある。

作品の名前を隠し6名が、5句全て佳句と評価したものにマークをし、数の多い中から蘭幸主幹に候補作品を15名に絞ってもらった。この作業は昼の休憩をはさんで午後3時頃終了。全国から選ばれた11名と、蘭幸主幹と完司理事長に2次選が委ねられた。

試行錯誤の上辿りついた選考方法であり、公明正大で同人・誌友の皆さまにはそれなりの評価を得ていると自負している。が、いかにせん在籍者数に比較して、応募人員が少ない事が残念でならない。投句結果の点数がもし低かったら、と案じる人があるやに仄聞するが、ノミネートされることに大いに意義があるのだから、どんどん応募して欲しい。

二賞候補者在住地

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
路郎賞	三田市	大阪市	奈良市	寝屋川市	神戸市	高槻市	和歌山市	羽曳野市	弘前市	藤井寺市	青森県	松山市	高槻市	豊中市	大阪市
川柳塔賞	横浜市	伊丹市	大阪市	寝屋川市	那覇市	上尾市	塩竈市	松山市	鈴鹿市	箕面市	鳥取市	大阪市	倉吉市	松山市	大洲市

英語 de Senryu⑦〇

麻生路郎句集 『旅人』

英訳 吉村 侑久代 Kim Horne

三人が酔へば三人らしくなり

three people

getting drunk

each with their own character

手の染まりそうなのすびの紫よ

eggplants

dye my hands

purple

people 人 *get drunk* 酔っばらう *each* 各自 *own character* 自分の性格
eggplant 茄子 *dye* 染まる 染める *hand* 手 *purple* 紫

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句⑩ 英国在住のブルガリア俳人

イリヤナ・ストヤノバ (Iliyana Stoyanova)

イリヤナ・ストヤノバからブルガリア語で書かれた句集 " *Островитянско хайку* " 『しまじんはいく』(2010) を贈られたとき、英語の翻訳が付いていればいいのにと思いました。ブルガリア語で書かれた表題とともに『しまじんはいく』と日本語の表題も付いていて、写真、切り絵を駆使した美しい句集です。ブルガリア出身の彼女は現在、英国に暮らしています。この句集がブルガリア語で書かれているのは、母国ブルガリアの俳人に島国英国の四季を紹介する目的があったと思われます。彼女は神学の学位を持ち、英国俳句協会理事をはじめ短歌協会の役員も兼ねています。英訳があればと彼女に依頼したところ、『しまじんはいく』から数句の英訳を送ってきました。拙訳を付けてみました。

wild snowdrops and/ the scent of wet leaves/ spring sneaks in

(野生のスノードロップと湿った葉の匂い忍び寄る春)

the smell of barbecue/ and timid drops of rain/ it's summer

(BBQ の匂いと忍びやかな雨だれ いまは夏)

swans and clouds/ swimming in the lake/ dusk

(夕暮や白鳥と雲泳ぐ湖)

the snowman is weeping/ a kiss from/ February sun

(如月の陽にキスされて泣きべその雪だるま)

誹風柳多留一二篇研究 52

天三礼2

清 賛。やはり母親を連れての嫁でしよう。

437 ぬかだつて方丈さま八御宿かゑ

石川 わからない。ぬかだつては、尊大にかまえる（『日本国語大辞典』）ことだそうである。方丈が偉そうに、ご在宅かと聞いた。あるいは有力な檀家か誰かが寺の下男あたりをつかまえて偉そうに、方丈様はご在宅か、と聞いた。

小栗 「方丈さまは御宿かへ」が、偉そうな態度の人の台詞と思う。有力な檀家でも良いが、しかるべき関係の後家か。

清 同右。「しかるべき関係の後家」で面白くなる。「ぬかだつて」は、本句の場合、馴れ馴れしい態度で、とても解釈すればいいか。

438 紗のかや八三人とねるものでなし

石川 紗は軽くて薄い織物。上等な紗の蚊帳などというものは、家で子供と一緒に寝たりするような所帯じみたところで用いるものではない。

434 指ぬきをいしやが帰るときがす也

石川 縫い物をしているとき、お医者様が病人の往診に来、あわてて指貫きをはずして対応したが、帰ったあと、どこに置いたのか指貫きがない。小さな物である、よくあること。

清 日常茶飯を詠んだ句、それだけでしようネ。

435 国家老へんへこへんを先ッおさへ

石川 国元から出府してきた国家老、噂に違わぬ藩邸の奢侈怠惰を取り締まるべく、まず、妾を退けた。三味線の音「ペ

石川道子・小栗清吾
細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫
清 博美

んべこべん」でお妾を示し、取り締まりの手初めはこれである。

来たさを引さいちうへ国家老

拾二32

清 賛。

436 母がつかないともらい人だらけ也

石川 素直で明るく、そのうえ美人といふいい娘である。あんな娘ならお嫁に貰いたいと誰もが思うが、難は母親付き。娘を貰うと母がくつついて来る、と二の

足を踏む向きが多い。あるいは、くつついて来なくても、あの母親と一生付き合うのは難しいということもあるうか。母その気あるて娘にきずかつき

紗の蚊屋の中てふて、敷もたれ

—小便組

明七智4

清 賛。

439 座定ッて若イもの呑ミはじめ

石川 妓楼にあつてお女郎と客のあいだをいろいろ取り持つのが若い者である。

「解釈と鑑賞・川柳吉原風俗絵図」(至文堂)にこの句が採られ、「初会の客に対しては、遣り手に従つてかけひきの衝に当たるのであるが、馴染客となつてからは、いつさい若い者だけの職掌となる」。また

「おいらんと初会の客の間にあつて、座の設定、配膳の世話、盃ごとの取り持ちをしたり、雑用をつとめたりしながら、自らも杯を押しただいて、云々」とあり、初会かそれ以降か、いずれにしても、客が上がり双方が落ち着いたところで、若者もお流れを頂戴する。

若イもの少シしさつてついでのみ

三三〇

清 賛。

440 むごい事二人リハ死ンて一人リにげ

石川 死んだのは咸陽宮で始皇帝を殺そうとした刺客、燕の荊軻と秦の舞陽。二人は始皇帝を捕らえ殺そうとしたが、華陽夫人の琴に酔いしれている間に逃げられ、逆に殺された。

老人にげ二人りはしんだむごひ事

天三天1

伊吹 賛。一般句のようにも思うのです。

山田 礎賛。中国史伝(三)「呉越軍談」にも取られています。

清 同。

441 あの伯母御二度死んだよと蔵でいひ

石川 質草を持って来て、伯母が死んだのでこれこれの金がぜひ必要だと言つてかき口説いているのが聞こえる。蔵では丁稚あたりが、あの人の伯母さんこれで死ぬの二回目だ、と話している。

くどいてもなびかぬやつハ質屋也

安二満2

小栗 賛。そういうことですか。

伊吹 賛。でもなぜ伯母なんでしょうか？

山田 賛。何故でしょうね。

清 勘当されている息子ならん。伯母を

悪用。

442 七月が小でおはりのいそかしさ

小栗 七月が小の月(二十九日)に当たるので、大の月(三〇日)より一日少ないため、お針(娼家の裁縫女)が忙しいというのであるが、八月一日の八朔の紋日に遊女が着る白無垢を縫うのに忙しいということとを、斯く表現したまでの句。

清 賛。 おつな廓七月下旬雪催ひ 一六一23

443 目があるとゑゝ女だとしれた事

小栗 「もし目が見えればいい女だ」と分り切つたことを言っているというのである。瞽女にお世辞を言つて、ちよつかいを出そうとしている場面であろうか。

目があると女房にするとござをほめ

一一21

能イツぶれやうさとござハほめられる

九11

伊吹 賛。目が見えないから苦労しているのに。

清 賛。

愛染帖

新家 完司選

(投句285名)

岡山市 丹下 凱夫
虫食いでいいのキャベツもにんげんも

(評)虫が食うということは農業に侵されていないということ。傷を受け易いということ。はビユアな心を失っていないということ。

三田市 足立つな子
食べられるうちにと鰻二度たへる

(評)鰻丼が一万円以上にならないうちに……。健康で美味しく食べられるうちに……。二度ぐらいで満足せず飽きるまで食べておこう。

大阪市 平賀 国和
異国語の絵馬で賑わう法善寺

(評)若だらけの水掛不動で有名な法善寺。外国人観光客には不思議な空間に違いない。さて、異国語で何を書いているのだろう。

東京都 川本真理子
お祝いに軽く呪いをかけておく

(評)「くたばっちゃまえ!アーメン」の歌詞は教会から苦情が寄せられたが、これはもっと軽いヤキモチとユーモアを混ぜたジャブ。

神戸市 山口 光久
口下手なセールスマンに買わされる

(評)ペラペラと押れ切った人ならお断り。だが、気弱に口ごもられると応援したくなる。これ、ひよっとしたら高等作戦か?

鳥取県 斉尾くにこ
議題から脱線をして活気づく

(評)面白くもない議事で退屈していたところにタイミンクの良い話題。ワイワイ寛いだムードに議長も苦笑して、暫時休憩の有様。

堺市 加島 由一
断捨離で三つに絞る片想い

(評)片想いは相手に迷惑をかけることもないので10人でも大丈夫だが、句会場でキョロキョロもみつともない。3人程がベストか。

豊中市 木藤こみつ
回転寿司の速度秒速4センチ

(評)10秒で40センチ進むコンベア。隣人の領域に手を伸ばさぬよう10秒以内に決断してゲットする必要あり。微妙且つ適切な速度。

河内長野市 梶原 弘光
夏が好き但し36度以下

(評)歳を重ねると寒がりになり「夏の方が好き」という人が多くなる。だが、それも猛暑日の35度まで。体温以上になると危険!

岡山県 田中 恵
虫刺されヘクソカズラを塗っておく

(評)葉や茎が臭いので「屁糞葛」という気

の毒な名前を付けられた蔓。しもやけやアカギレに効くが、虫刺されにも有効のよう。

米子市 中原 章子
猛暑日に電波時計が狂いだす

八王子市 川名 洋子
暑気払い何度したやらこの猛暑

寝屋川市 伊達 郁夫
扇風機回し風鈴遊ばせる

岡山市 藤成 操江
子定表猛暑続きでほぼ白紙

鳥取県 門村 幸子
「ああしんど」夏の口癖自戒する

三田市 久保田千代
また父と一杯呑める盆が来る

羽曳野市 宇都宮ちづる
十分で終わる僧侶の盆参り

枚方市 海老池 洋
老いはれてただ見るだけの盆踊り

田辺市 岡本 昇
元兵士不動の姿勢終戦日

岡山県 山縣のぶ子
ひまわりが啜うガソリンエンブテイー

大阪市 笠嶋 惠美
熱中症と老いとボケとが手をつなぎ

河内長野市 森田 旅人
孫が来る猛暑もなんのそのの妻

羽曳野市 徳山みつこ
幽霊とゆつくり涼む美術館

松戸市 山下 明子
夏祭り騙されに行く夜店の灯

高槻市 原 洋志
年寄りを子供に戻す祭り笛

沖繩県 あらさくら
夏祭り金魚掬った恋もした

東大阪市 北村 賢子
台風一過まだ空蟬のしつかりと

寝屋川市 富山ルイ子
五本植えて九百採れたミニトマト

鳥取市 岸本 宏章
原発の電気で凌ぐ熱帯夜

海南市 小谷 小雪
大声で笑う人には惚けがない

河内長野市 村上 直樹
豪華ランチ干物一枚半分こ

佐賀県 真島久美子
粘ったらいずれ揃って茶寿皇寿

三田市 福田 好文
長寿税いままに国庫が攻めてくる

豊中市 松尾美智代
売れ残りではありません選り好み

この暑さマラソンやるか三年後
ドローン撒く農業浴びて虫が逝く

干した蒲団クーラーかけて冷やして
西瓜丸ごと悲鳴をあげる冷蔵庫

三田市 尾崎 一子
炎天も医者と句会は外さない

大阪市 古今堂蕉子
暑いの句会には行く何でやる

豊中市 水野 黒兔
川柳という奥深い森の中

弘前市 福士 慕情
晩学の趣味を支えている仲間

枚方市 山口弘委智
人人に無限のヒント句の素材

豊中市 藤井 則彦
必という筆順にふと迷う羽目

神戸市 近藤 勝正
しくじりは五七五にし忘れます

和歌山市 松原 寿子
10Bのような性格欲しくなる

橿原市 居谷真理子
仏には甘え神にはいい子ぶる

唐津市 仁部 四郎
くじ引きで貧乏神になりました

和歌山県 森下よりこ
逆恨みしていいですか処方箋

三田市 堀 正和
新薬のモルモットです余生です

町内に同姓同名が三人
一人暮らしの緊張感が呆け予防

プチ整形性格まででは変わらない
病院で何度も呼名させられる

鳥取市 福西 茶子
ゴロゴロと生きて空気も米も食う

藤井寺市 太田扶美代
食べすぎ飲み過ぎ幸せ過ぎたろう

青森県 松山 芳生
ときめきは綿毛に乗って行つたきり

京都市 清水 英旺
胸がキュン 忘れかけてたエモーション

八尾市 宮崎シマ子
人生は風邪を引いたり治つたり

那覇市 前川 真
うんちくを小骨はずして聞いている

桜井市 安土 理恵
無理しない時代おくれのままがいい

弘前市 高瀬 霜石
近ごろのヤバイ！はヤバイ分らない

鳥取市 前田 楓花
姥百合とは何とセンスの無い名前

伊丹市 延寿庵野鶴
張り合つた空気が割れるシヤボン玉

岡山県 紫 しめの
DNA米つきバツタかおじぎ草

沖繩県 森山 文切
イペリコもアグーも豚は豚である

青森市 守田 啓子
うみねこだったことは記憶にございませぬ

松江市 石橋 芳山
定年の合い鍵首枷を外す

富田林市 山野 寿之

地下街の試食に欲しい缶ビール

下松市 有海 静枝

減りません供えてあげた好きな酒

三原市 笹重 耕三

米の汁も麦の汁も要る真夏

鳥取市 山野すみれ

品のある暮らしたくて呑むお酒

堺市 坂上 淳司

好きな酒断てば建ったか家二軒

三田市 村田 博

ビール飲むグラス何度もよく洗う

尼崎市 永田 紀恵

二次会は没句はやきの縄のれん

羽曳野市 中川ひろ介

焼酎ロック氷つるんと解けたこと

鳥取市 岸本 孝子

少しだけ飲む酒だから吟醸酒

府中市 岸田 武

蟒蛇のような御仁と飲んで来た

広島市 岸本 清

大方は健忘症の酒仲間

高槻市 松岡 篤

愚痴も聞き悪口も聞くバーの壁

奈良市 米田 恭昌

たっぷりと唄って下戸はもとをとる

札幌市 三浦 強一

休肝日味も素っ気もないこの世

鳥取市 奥田 由美

白寿来る姑に連れ添うクラス会

堺市 羽田野洋介

ほんやりした記憶目覚めるクラス会

米子市 後藤美恵子

奇麗ねと白髪褒め合うクラス会

堺市 奥 時雄

いそいそと行き幻滅のクラス会

貝塚市 石田ひろ子

ふくらはぎ庇って赤いスニーカー

尼崎市 清水久美子

あと5キロ痩せたら見てねへそルック

大阪市 江島谷勝弘

さわどいな6・8の尿酸値

山口市 青木 隆子

妹は疾うに私の姉のよう

三原市 鴨田 昭紀

百万人の中でも判る妻の声

八尾市 村上ミツ子

いつだって梯子の下は騒がしい

米子市 竹村紀の治

健康の本読み過ぎて不眠症

堺市 矢倉 五月

年相応の服は試着などしない

紀の川市 辻内 次根

規格って便利それぞれ蓋が合う

大阪市 谷口 義

良かったと思う父には暮があつて

弘前市 稲見 則彦

似顔絵は丸にチョンチョンなんです

堺市 内藤 憲彦

孫の名をいつも復習しています

鳥取県 石谷恵美子

夫を看るつきつき花の季も過ぎて

奈良市 大久保眞澄

毒舌が過ぎて自家中毒起こす

河内長野市 渡邊 修

ロカビリーの同期の友が星になる

三田市 上田ひとみ

手伝いはしない指示だけの役目

神戸市 奥澤洋次郎

ないやろか金金聞かず済む居場所

倉吉市 岡崎美知江

声張って元氣印を誇張する

宇部市 平田 実男

境界の杭ストレスを溜めている

大阪市 田浦 實

一円玉レジで落として難儀する

豊橋市 西郷紀美代

故郷に帰りたいよねヒアリたち

三田市 多田 雅尚

朝ドラとやすらぎの郷見て昼寝

倉吉市 中村 毅

買わなくても買ってもらうは当たらない

香芝市 大内 朝子

こてこてに塗った化粧がひ割れる

熊本市 杉野 羅天

ピンポイントでやってきた嫌な役
海南市 堂上 泰女

ラッキーな雨よ病院空いてるな
唐津市 坂本 蜂朗

トンネルを出たら道路が消えていた
岩国市 上村 夢香

メガホンを叩き本音を撒き散らす
池田市 太田 省三

泣かされた父の座椅子に眠る母
箕面市 中山 春代

愛用の入眠剤は文庫本
高槻市 片山かずお

妻の後ろに立って用事待っている
和歌山市 古久保和子

だんだんと手強くなったビンの蓋
大阪市 藤田 武人

無人駅ベンチは何時も同じ顔
岡山市 永見 心咲

目分量それが一番良いお味
羽曳野市 吉村久仁雄

犬老いて僕と歩調が合う散歩
八尾市 高杉 千歩

バスポート七十五歳できれている
倉吉市 大羽 雄大

説教にメガネを拭いてばかりいる
大阪市 梶尾 奏子

息継ぎが出来ない不器用な夫

寝屋川市 平松かずみ

ママチャリで走る泥坊スタイルで
豊橋市 藤田 千休

影法師妻より長いお付き合ひ
加西市 山端なつみ

花オクラレシビをつけてご近所へ
鳥取県 竹信 照彦

孫が野球部だけで身近な甲子園
宝塚市 太田としお

空回りしてるみたいなタイガース
堺市 遠山 唯教

走る泳ぐアスリーターは若いなあ
高槻市 初代 正彦

強烈な記憶ボルトのラストラン
神戸市 松井 文香

嫉妬されほくそ笑みますまだオンナ
大阪市 高杉 力

親友じゃないが いいねの友多し
松山市 柳田かおる

芸術のようにスマホを滑る指
大阪市 坂 裕之

任期まで勤め上げたい這つてでも
大阪市 宇都満知子

電車賃調べもせずにイコカでピツ
米子市 成田 雨奇

気をつけることは敷居をまたぐ時
瀬戸内市 宮宅比佐恵

花火寄付 線香花火ほのですが

明石市 糞谷 和郎

自分のは薄いと思う面の皮
河内長野市 原熊知津子

食う寝る遊ぶこれが私の仕事です
河内長野市 黒岩 靖博

安い旅ひどい日程詰め込んで
箕面市 出口セツ子

隠しごとすると卑しい顔になる
大阪市 井丸 昌紀

毛は生えてないけどどこまでが頭
西予市 黒田 茂代

うさぎ跳びこんなにかんくなった足
高槻市 富田 美義

誇り未だ高いが低い血の巡り
鳥取市 倉益 一瑤

雲つかむ話真面目に聞いてやる
藤井寺市 若松 雅枝

一儲けする気で貸して逃げられる
大阪市 樋口 眞

配達にハンコとお茶を用意する
和歌山市 上田 紀子

宇宙では問題児だろうこの地球
堺市 梅木 澄空

川の字で眉間にシワがくつきりと
河内長野市 大島ともこ

玉手箱出てきておくれ不老不死
鳥取県 橋本 整

生きてゆく意欲めらめら九十歳

共選欄

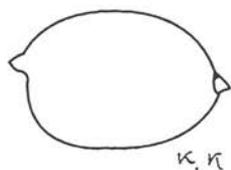
檸

椽

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 356名)



「図星」山口光久選

あの二人図星だったねゴールデン
 図星だな顔にそうだと書いてある
 カルチャーに美女が来てから無欠席
 さりげない会話で図星突いてくる
 作り笑いの裏に紛れている図星
 口下手の一言急所突いている
 逃げ道を少し残して図星突く
 出会うなり少し太ったねと言われ
 朝帰り図星衝かれて大慌て
 図星だら顔には嘘とでているよ
 丁寧な文字で図星をつく手紙
 図星でも落ち着きはらう老獮さ
 図星だが知らない振りだとほけとく
 痛いところ突かれ本音がこぼれ出る
 図星にはのらりくらりの処世術

神戸市	松井	文香
藤井寺市	若松	雅枝
川西市	山口	不動
横浜市	菊地	政勝
明石市	梶谷	和郎
鳥取市	岸本	宏章
大洲市	花岡	順子
大阪市	高杉	力
川西市	金川	宣子
鳥取市	山下	凱柳
大阪市	内田志津子	
尼崎市	藤井	宏造
奈良市	辻内げんえい	
堺市	村上	玄也
大阪市	津村	柳伸

「図星」斉尾くにこ選

一手目は図星に打つと決めている
 妻が言う句会飲み会三次会
 父ちゃんのヘソクリきつとボチの小屋
 盛り付けの一つ失敬君だらう
 肩揉まれソコソコソコと声あげる
 お祝いには物よりお金しましょうか
 逃げ道を図星で塞がれた あわわ
 密輸入図星押さえるレントゲン
 爺ちゃんには貧乏やからケチやねん
 ケチな人言われてケチになってゆき
 図星指され急に記憶が失われ
 先生の言葉ごとんと胸に落つ
 失言の裏に図星が付いていた
 図星だよ僕の宇宙を壊したの
 正直な人だ図星と目が語る

大阪府	藤田	武人
大阪市	川端	一步
大阪府	山東日出男	
三田市	幸田	厚子
河内長野市	中島	一彌
高槻市	松岡	篤
富田林市	中村	恵
高槻市	初代	正彦
大阪市	江島谷勝弘	
大阪市	榎本日の出	
大阪市	樋口	眞
富田林市	片岡智恵子	
唐津市	仁部	四郎
弘前市	高森	一吞
三原市	鴨田	昭紀

母の目は子等の挙動を見逃さぬ
 本当の事言ったのが凶星とは
 ずる休み母の凶星にうろたえる
 口はノー顔色ハイと言う凶星
 凶星でしょ夫に証拠つきつける
 人様の急所を突いて得意がる
 あら顔に書いてあるわと妻凶星
 質問が凶星突いてもとばけてる
 言い訳に喉が渴いてくる凶星
 一聞けば十まで凶星母の勘
 凶星だな汗をたらだらかきだした
 密輸入凶星押さえるレントゲン
 突き刺さる言葉に身動きもならず
 ライバルに凶星つかれてから不眠
 冗談が凶星で空気重くなる
 聞こえない振りで凶星をやり過ごす
 凶星にもビクともしない深い嫉
 やんわりと凶星はずして責めてくる
 凶星だな不倫疑惑の慌てよう
 冷や汗がじわりじわりと出る凶星
 心配をかけない嘘を見抜く母
 悪友に凶星を指され立ち直る
 顔色で判るあなたが犯人ね

和歌山市 堀 富美子
 京都市 榎本 宏子
 岡山県 池田たか子
 南あわじ市 萩原 狸月
 三次市 伊藤 寿子
 榎原市 居谷真理子
 神戸市 上田 和宏
 四条畷市 吉岡 修
 和歌山市 古久保和子
 和歌山市 上田 紀子
 豊中市 木藤こみつ
 高槻市 初代 正彦
 松江市 石橋 芳山
 奈良市 山本 昌代
 堺市 近藤 治子
 大洲市 中居 善信
 堺市 奥 時雄
 西予市 西田美恵子
 和歌山県 森下よりこ
 岡山県 紫 しめの
 鳥取市 夏目 一粹
 堺市 柿花 和夫
 神戸市 細川 花門

傷つかぬように急所へ矢がささる
 仲間うちの会議凶星は蚊帳の外
 行き先を当てる一緒に立ち飲み屋
 負けるでと言いつつファンの高い声
 金メダル君のものだと思つてた
 命取る酒取る医者が凶星突く
 いきなりの凶星ホームズじゃないのに
 的を射た野次に思わず絶句する
 澄んだ瞳の何故が急所を突いてくる
 独り居の寂しさ詐欺は突いてくる
 老い独り凶星をついた後妻業
 黒ぬりにされた凶星である部分
 悪友は懐温いこと見抜く
 激昂のぼろり失言本音です
 ただ少し凶星の横を突いただけ
 冗談で話したことが凶星突く
 余談だと言つて凶星を突いてくる
 勘の良い部下に凶星をまた指され
 上司から凶星を指され沸くファイト
 友人のズバリ一言生きかえる
 裏のない背広正論ばかり吐く
 ライバルが凶星をさして来る真意
 金運はないと呟く占い師

和歌山市 北原 昭枝
 明石市 糀谷 和郎
 堺市 加島 由一
 池田市 太田 省三
 鳥取県 児玉 規雄
 鳥取県 加藤 茶人
 大阪府 原田すみ子
 横浜市 菊地 政勝
 尾道市 大本 和子
 堺市 澤井 敏治
 河内長野市 樋口 正子
 豊中市 木藤こみつ
 三田市 北野 哲男
 下松市 有海 静枝
 那覇市 前川 真
 神戸市 奥澤洋次郎
 紀の川市 宇野 幹子
 尾道市 小畑 宣之
 泉大津市 助川 和美
 堺市 内藤 憲彦
 弘前市 斉藤 荔
 熊本市 杉野 羅天
 大阪市 平井美智子

凶星だな小鼻ビクビクよく動く
カマかけてみると顔色変えはった

鳥取市 倉益 一瑤
松原市 森松まつお

凶星でしよ妻の嗅覚犬以上

京都市 清水 英旺

凶星です僕らいつせん越えました

奈良県 長谷川崇明

凶星だねその口元があわててる

和歌山市 北原 昭枝

凶星です胸は早鐘顔真っ赤

鳥取市 田中 天翔

子の顔にイジメを見抜く母の勘

三田市 上垣キヨミ

凶星だと素直に言えば楽になる

鳥取市 福西 茶子

凶星突かれそれからあとの無言劇

大阪市 升成 好

やんわりと凶星を突いた京訛り

鳥根県 伊藤 寿美

凶星だね泳ぐその目が答えてる

高槻市 島田千鶴子

オブラートに包む言葉でつく凶星

枚方市 海老池 洋

凶星つく最後のカード持つ余裕

札幌市 小沢 淳

にっこりと甘い言葉でできた凶星

羽曳野市 徳山みつこ

里帰り母に言われたお腹の子

弘前市 福士 慕情

引きつった凶星の顔を見ておれぬ

豊橋市 西郷紀美代

爽やかな笑顔で壺を突いてくる

大阪市 平井美智子

聞くまでもないと表情筋が言う

佐賀県 真島久美子

大声で笑う凶星に触れている

岡山県 田中 恵

秀 句

一言に声にふるえる目は泳ぐ

東かがわ市 川崎ひかり

母の勘子供のことはみな凶星

芦屋市 黒田 能子

泣きどころ秘書にがちり握られる

札幌市 三浦 強一

犯人にしたい役者が出ています
祭り好き実はとつても淋しがり

松江市 中筋 弘充
鳥取市 山野すみれ

狭い空凶星の捨て場に地団駄

倉吉市 大羽 雄大

末席の門外漢が的を射る

茨木市 島田 誠一

吐く息に吸う息の静止する

紀の川市 辻内 次根

大声で笑う凶星に触れている

岡山県 田中 恵

堂々と凶星を顔に書いておく

笠岡市 藤井 智史

ためらってそとつついてみる凶星

東京都 川本真理子

さり気なくエレベーターへ導かれ

堺市 矢倉 五月

オスプレイは落ちるみんなが知っている

奈良市 大久保眞澄

グーグルが密会の場を垣間見る

豊橋市 藤田 千休

カルチャーに美女が来てから無欠席

川西市 山口 不動

決定的現場とらえる週刊誌

橋本市 石田 隆彦

蜘蛛の糸夏虫ドンと来る枝に

鳥取市 福西 茶子

深い深い闇です的の真ん中は

橿原市 居谷真理子

悲しいことがありましたかと鳥は

海南市 小谷 小雪

飛んできた話がすっぽりと嵌る

松江市 石橋 芳山

原料がなくなつた国産凶星

沖縄県 森山 文切

ホンモノの息子は電話よこさない

弘前市 高瀬 霜石

秀 句

千代紙に包み隠してある凶星

富田林市 中井 アキ

呆けもせず金さえあれば茶寿皇寿

河内長野市 村上 直樹

凶星だと素直に言える友がいい

池田市 上山 堅坊

橘高薰風句抄

〔橘高薰風川柳句集〕平成十三年発刊

惜春の音の一つに昼の三味

子が病んで鑑のごとしわが妻は

おたやんは大阪弁で喋りそう

寝正月ガス中毒をしてへんか

実印に苦悶の情が見えてきた

ビリの顔もトップの顔も苦しそう

誘拐をされこどもの日母の過ぐ

轉るは人の飼う鳥武蔵野よ

サングラス男の隠れ蓑ならず

忍従の女心に光る貝

豪雪の今年つくらぬ雪だるま

雪を搔くもはや旅人にはあらず

積雪一丈その下の金魚の朱

降る雪に貧しきものが先ず隠れ

美しいものに雪置く美しさ

元日の駅前広場広場となる

元日や王城の内写される

行灯の灯は恩愛を思わしむ

つり合わぬ恋にかじかむ女の手

火の消えた炬燵の上の置手紙

六法全書の重さと聖書の重さ

將軍に枕して寝る世が久し

家へ帰れば襦袢も替える男だが

十二月某日ブランコ揺りいたり

男待つ灯に春夏秋冬

娼婦死し十字架にまた星戴く

独楽二つ回りいることは息苦し

青春のわが思い出に一神父

愛読書青春以来ツルゲーネフ

寺と萩マンネリズムも美しや

「 城 」

清水英旺選

(投句 224名)



三食を食べて眠れる城がある
 小さくとも笑い溢れるおらが城
 どん底を礎にして僕の城
 ローン済み小さな城は軋み出す
 白塗りをし過ぎたかもね姫路城
 姫路城に湧いて出て来る異邦人
 年金の上に建つてる老いの城
 僕の城四畳半だが南向き
 僕だけのほくが息する僕の部屋
 気がねなく寝ころべるのが僕の城
 私の城 入場料は取りません
 深海の私の城で脱皮する
 優しさで迎えてくれる母の城
 隅にある机が私だけの城
 ドアロックおんな一人の城守り
 復元の城に昔を語らせる
 定年後居場所を探す城の主
 わが城の主は私でないらしい
 一城の主の居場所ない間取り
 城百選旅し冥土の土産とす

富田市	山野	壽之	富田市	福土	慕情
今治市	渡邊伊津志		今治市	山野	壽之
京都市	三宅 満子		京都市	三宅	満子
尼崎市	清水久美子		尼崎市	清水	久美子
大阪府	高木 道子		大阪府	高木	道子
三田市	九村 義徳		三田市	九村	義徳
三田市	堀 正和		三田市	堀	正和
紀の川市	辻内 次根		紀の川市	辻内	次根
海西市	小谷 小雪		海西市	小谷	小雪
鳥取市	田中 天翔		鳥取市	田中	天翔
生駒市	飛永ふりこ		生駒市	飛永	ふりこ
大阪市	若本 安代		大阪市	若本	安代
八王子市	川名 洋子		八王子市	川名	洋子
犬山市	関本かつ子		犬山市	関本	かつ子
大洲市	花岡 順子		大洲市	花岡	順子
神戸市	能勢 利子		神戸市	能勢	利子
米子市	生田 和之		米子市	生田	和之
犬山市	金子美千代		犬山市	金子	美千代
鳥取市	山下 凱柳		鳥取市	山下	凱柳

城山に登りて春を確かめる
 虫が泣く城を枕の人悼み
 城跡の風が忘れぬ関の声
 中世の松籟を聞く山の城
 震度七熊本城はふんばった
 火の国の城泣くもんか泣くもんか
 貧しくも安らぐぬくい城がある
 妻の城開け渡されて男飯
 この先は立入禁止妻の城
 白じらと天空の城音も無し
 雲海に浮く城憂き世忘れさせ
 ふる里の城に達者な母が待つ
 佳 句
 城跡でロマンに浸る歴女たち
 臥薪嘗胆隠し砦で石を研ぐ
 天守閣無礼なビルに覗かれる
 さくら咲き乱れる城下わが故郷
 北向きの部屋が私のお城です
 人
 単身赴任城は守ると妻の檄
 地
 吟醸酒さげて絵になる城下町
 天
 死ぬるまで母は守ると過疎の城
 軸
 誰彼も詩人にさせる苔の城

川西市	大坪 一徳	南あわじ市	萩原 狸月
西予市	黒田 茂代	豊中市	永見 心咲
岡山市	木藤こみつ	東大阪市	居谷真理子
河内長野市	穂口 正子	高槻市	富田 保子
高槻市	富田 保子	西宮市	福島 弘子
松戸市	山下 明子	三田市	尾崎 一子
上尾市	中村 伸子	男鹿市	伊藤のおよし
四條畷市	吉岡 修	弘前市	高瀬 霜石
豊中市	松尾美智代	河内長野市	木見谷孝代
高槻市	富田 美義	大阪市	奥村 五月

「好き」

(投句 227名)

永見 心 咲 選



- まだ好きでいるのか化膿する思い
好きだけ出来る朝寝も飽きてくる
戦場へ大好物を食って行く
好きですと下書きまでではできあがる
好きだけ食べられへんと三杯目
訳なんてない何もかも好きだもの
たまねぎは嫌いオニオンスープ好き
大好きな人の前では貝になる
好きずきに散っては戻るバスの旅
好きな人の言葉すんと落ちてくる
周りから見ればその恋脈がない
フオーリンラブ気付けばじっと見つめてる
河内長野市 関 よしみ
八尾市 山根 妙子
那覇市 前川 真
岡山県 丹下 凱夫
宝塚市 田中 章子
宝塚市 太田としお
加西市 金川 宣子
箕面市 出口セツ子
鳥取市 福西 茶子

- パスポートのいらぬ鳥にも好きな街
好きだった魔女が補聴器めがね杖
一人っ娘を蓼食う虫に齧られる
好きな時間を過ごす二つのマグカップ
好物は体に悪いモノばかり
もう好きを通り越してるねぶた馬鹿
好きだけ飲めと言われて酒を絶つ
無精卵きみのまるさを好きになる
八十路まだサユリストです悪しからず
フィルターのをかけてあなたを好きになる
履いて楽結局いつも同じ靴
好きにしなさいと外した子の鎖
- 佳 句
- 塩ひとつまみ愛ひとつまみ目玉焼き
けつたいな男と一番馬が合う
休日の朝のビールを夢に見る
旧道がわたしを好きと離さない
居酒屋の椅子がお尻にフィットする
- 人
- 四季あつて水の綺麗なこの日本
- 地
- 好きだから一寸触ってみたいくなる
- 天
- 帰りたくないと素直にそう思う
- 軸
- 密着の楔が不快だとしても
- 京都府 榎本 宏子
堺市 澤井 敏治
豊橋市 藤田 千休
大阪市 森 廣子
奈良市 大久保眞澄
弘前市 福士 慕情
貝塚市 石田ひろ子
沖繩県 森山 文切
札幌市 三浦 強一
神戸市 富永 恭子
大阪市 古今堂蕉子
羽曳野市 徳山みつこ
- 大阪市 柴本ばつは
三田市 北野 哲男
岡山県 紫 しめの
青森県 松山 芳生
弘前市 高瀬 霜石
- 池田市 上山 堅坊
- 今治市 渡邊伊津志
- 佐賀県 真島久美子

初しよ教室

題一返す

居谷 真理子

〈重くてもいただきますと手〇受ける〉

さて右の句、〇にどんな平仮名を入れますか。

手で受ける、手に受ける、手を受ける。

どれも川柳として成立しますね。けれど作者は「が」を入れて「手」を主語にしました。

：私は遠慮したいのよ、でもこの欲張りな手が受け取るの：とひとひねり加わりました。

小さな助詞の大きな働きです。

重くてもいただきますと手が受ける

南 麗子

今号「返す」の投句締め切りは8月15日。

酷暑の中でのご健吟です。

(原は原句 参は参考句)

原 原免許返納すれば田舎は暮らせない(生)和之

原 子等のため返して欲しい青い空 宏子

原 句とも難はありませんが、人ごとを詠ん

でいるような感じがなきにしもあらず。

参 免許返納歩いて医者に行けという

参 子等のため取り返したい青い空

原 細長く生きていますと寝返りす(大)安子

寝返りには二つの意味がありますね。

参 生きていくように寝返り打ったから

参 細く長く生きるためには寝返りも

原 アンダーライン大事なケ所読み返す 厚子

参 アンダーラインだけを大事に読み返す

原 閉めた筈十歩出てから引き返す 孔一

参 閉めたはず十歩の距離を引き返す

原 裏返す見たくないもの抱いたまま(門)幸子

面白い表現です。下五に工夫を。

参 裏返す見たくないもの嫌だもの

原 農作業返済したい齢になり(畑)節子

参 農作業返上したい歳になり

原 物よりも感謝で返す良い仲間 美枝子

参 物よりも仲間に返すありがとう

原 借金を返してからの晴れやかさ 紀美代

参 借金は完済快晴が続く

原 親の恩返す返すと五十年 洋一

参 親の恩返す返すとそのまんま

原 振り返る思い出胸に余生き ひでお

原 思い出が溢れ脳裏に繰り返す ひと

二句を一句にしてみました。

参 振り返るたびに思い出溢れ出る

原 はしっこは返し縫いして止める糸 こみつ

参 はしっこは返し縫いして止める縁

原 胸にまだ返しそびれた義理を持つ 真

参 胸にまだ返しそびれた義理の瘤

原 納税は里へ返礼期待して 明子

参 納税は無論返礼期待して

原 九〇のわが身二十才に返してね 久子

久子さんの優しい言い方もいいですが、

参 九十のこの身二十にして返せ

原 挙げつかれ返すことばが見つからぬ 澄子

参 虚をつかれ返す言葉が見つからぬ

原 子が親に返すお金は少し減り 弥生

参 目減りしたお金を子から返される

原 仕返しは倍で返してまだ残る 勝正

参 倍ほどの仕返ししてもまだ足りぬ

原 空の星返信ほしいメールして(東)美智子

思いっきりロマンチックに詠んでみました。

参 お星さま返信メール下さいな

原 脳トレで口達者なり若返る ももと

参 脳トレで口も達者に若返る

原手のひらを返され気づく夢のあと つばき

参手のひらを返されあれは夢だった

原頑固だと解っちゃいるが口答え 律子

参頑固者だけど一応口答え

原終活にエンマ大王返事なく まさる

参終活に返事寄こさぬエンマ様

原出席の返事は勿論クラス会 (高)道子

参クラス会返事もちろん出にマル

原裏返し新の気持で使ってる こずえ

参裏返すほら新品になりました

原振り返る見れば向こうも振り向いた 雄大

参振り返る君もやっぱり振り向いた

原借りた金返す気あれど主不明 勝治

参尋ね人返したい金あるのです

原愚問にはおうむ返して反撃し のぞみ

「おうむ返し」はこの句だけでした。

参愚問にはおうむ返しという返事

原本返すお礼は畑の花オクラ なつみ

花オクラ、美しい食材です。貰われた方も

喜んだことでしょう。

参畑からの花オクラ添え返す本

原返照に朝顔黙し明日を待つ 紀恵

参照り返しに耐えて朝顔明日を待つ

原返す波小亀をつれて旅に出る 治子

目の付けどころが素敵です。

参返す波小亀を旅に連れ出した ミヨノ

原見栄張って返却なしと許したる

参返却はご無用ですと張った見栄

原老いの手紙返事こないと気にかかる 風露

参やっと思いた手紙に返事まだ来ない

原海老で鯛みたいな返し気が重い 澄空

読み手を信じ、思い切った表現で、

参海老あげて鯛返される気の重さ

原お返しの商品には時がある (田)廣子

参お返しの商品考えて昨日今日

原裏返へる里芋の葉に玉の露 一平

参露ポロリ里芋の葉の裏返る

原寄せては返す波はゆりかご子守唄 旅人

このままでも十分ですが、音に焦点を絞つ

てみました。

参寄せて返す波は地球の子守唄

原借した本返ってこない消えない記憶 寧

下七はいかにも重いです。

参あの本を誰に貸したかない記憶

原添削で返却されたラブレター (小)雅美

参ラブレター添削済みで返される

原捨てようと思いつつ又読み返す のり子

読み返しているのは手紙？本？日記？それ

によって雰囲気が変わります。その雰囲気

句にしたい。

参捨てなくちゃいけない手紙読み返す

〔佳句〕

やんわりとジョークで返す年の功 恵子

被災地へお返しですとボランティア 福貴子

うちの皿隣の猫が使ってる 里子

好きですにあっさり返す嫌いです 崇明

良い返事だけはするから三角だ 亜希子

借りた傘磨いて返す母の礼 隆子

お返しの商品に笑顔添えておく 美穂

その言葉お返ししますそのまんま 不二夫

お返しへお返しのあるおつき合い (前)洋子

通り過ぎ踵を返す特価品 由紀子

〔今月の推せん句〕

返球の日日速さ増す成長期 中島 一彌

裏表返してみても嘘はない 北原 昭枝

返す気があれば千兆借りません 奥園 敏昭



(投句205名)

一昨日、田

んぼの畦道に二、
三本の彼岸花を
見つけました。

猛暑の中にも秋の足音は確実に近付い
ているようです。

また、巷ではミサイルあり、政治家や
芸能人の不倫ありと騒がしいことこの上
なし。

だからといって何も出来ない自分は川
柳の世界に埋没するのみです。
では、ご一緒に。

AIに恋のノウハウ伝授中

(評) そのうちになんてなってしまうんで
しょうかAIは。AIに恋されてしまっ
た人なんて、何かお気の毒そう。

好きな人嫌いな人と仲がいい

(評) よくありますね、こんなこと。好



きな人が自分の嫌いな人と仲良しなのは
ちよっとイヤ、わがままだと思っけ。

ファッション誌イメージですと注がある

(評) あなたがこれを着たからといって
この通りにはいきませんよ、と念を押さ
れているようですよね。

平行線交わる時はきつとある

(評) 希望を持って物事を見守ってい
らっしゃる作者、きつといい人に違いな
いと思います。

待つ人のないふる里が遠くなる

(評) つくづく思うのは、ふる里とは父
母あってこそのものであること。兄
弟姉妹ももちろん大切ですけれど。

人前で幸せごっこする家族

(評) 仮面夫婦というのはよく聞きます
が、とうとう仮面家族まで現れてしまっ
たようです。

シエルターへ逃げ込むそんな日がくるの

(評) どこかの国のせいで、学校で防災
訓練が行われたりしています。ニュース
を見てもまだピンと来ません。

結婚しようエプロン似合う男なら

(評) 広い世界で活躍する女性が増えて、

結婚するなら妻の役を引き受けてくれる
男性がいいという女性もいるとか。

新党結成党の顔にはこのふたり

(評) 政界が何かと騒がしい昨今です。
離党したりくっついたり、分かるのは国
民のことは考えていないということ。

ぼくの方が生命線は長そうだ

(評) 圧倒的に女性の方が寿命が長いよ
うなのに、これはまた頼もしいことす
ね。男性にもガンバッテ頂かねば。

アクティブなシニア自分で発光す

流れ星いくつ願いを呑んだやら

砂時計割れて時間のコマ送り

鬼ヤンマ追うたふる里下駄の音

肉じゃがで妻に決めたという神話

このハート勿体振って重いです

影法師だけが味方の風の街

夕焼け小焼けまだ純情が跳ねている

横浜市 川島 良子

堺市 揮井 敏治

島取市 斉尾くにこ

和歌山市 武本 碧

松江市 石橋 芳山

西宮市 亀岡 哲子

佐賀市 真島久美子

大阪市 平井美智子

大田市 山中 康子

倉吉市 海老池 洋

枚方市 菅重 耕三

三原市 菅重 耕三

青森市 守田 啓子
友達のまんま平行線のまま

鳥取市 倉益 一瑠
熱いもの抱いて走っているのです

大阪市 古今堂蕉子
妄想の愛がバチンとはじけ散る

香芝市 大内 朝子
すれ違う愛もやがては元の鞘

三田市 堀 正和
ピギナースラックと気付く半年後

箕面市 出口セツ子
わがままを言いたい甘えてもみたい

鳥取市 谷口回春子
街角の監視カメラは嘘つかず

米子市 八木 千代
天の川以後もハートはそろかしこ

堺市 内藤 憲彦
よく笑い平均寿命使い切る

西宮市 緒方美津子
夕ぐれの打水やさしさが匂う

弘前市 高瀬 霜石
すったもんだするから夫婦なのである

大阪市 石橋 直子
人生の凸凹うまく楽しもう

唐津市 仁郡 四郎
君を呼び君に呼ばれてそれからが

大阪市 藤田 武人
シャンパンを割り満帆のドラが鳴る

高槻市 初代 正彦
さすが超人ボルトの脚に惚れました

生駒市 飛永ふりこ
じゃんけんでラブを装うのも秘訣

西宮市 福島 弘子
東京五輪二度目も見ると決めて居る

大阪市 小野 雅美
遠くから見つめるだけで恋終わる

鳥取市 田中 天翔
体力は落ちても夢は無量大

明石市 梶谷 和郎
原点に戻ろう迷う暇はない

奈良市 山本 昌代
なつかしい郷土の風と駆けている

和歌山市 古久保和子
たそがれへ一人の影は辛すぎる

香芝市 山下 純子
赤白のふうせん飛ばし出直そう

唐津市 坂本 蜂朝
飛べよ飛べこれを限りの春である

枚方市 小林 わこ
どこまでも平行線と今知った

尼崎市 清水久美子
寡夫と寡婦ですの不倫と違います

大阪市 柴本ばっは
まだ元気不用品とは言わせない

大阪市 江島谷勝弘
アドバルーンむかしは情緒ありました

榎原市 居谷真理子
保育所の頃から相思相愛で

宝塚市 田中 章子
気がつくときポケモンブーム消えていた

和歌山市 上田 紀子
この恋の行き着く先は天の川

大洲市 中居 善信
五十年まだ燻っているハート

芦屋市 黒田 能子
うちの子は大器晩成よろしくね

青森県 松山 芳生
好色を騙すガラスの首飾り

鳥取市 前田 楓花
幸せは我慢くらべの先に待つ

大阪市 森 廣子
恋数多女は何時も夢を見る

神戸市 奥澤洋次郎
台風の日も時時は余所見する

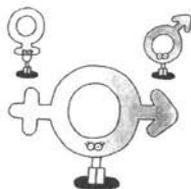
大阪市 岩本 安代
アイラブユー言えそう虹が消えぬ間に

岡山市 永見 心咲
恐竜もかわいい子には旅をさせ

奈良市 長谷川崇明
元カレに遭えば挨拶出来る歳

高槻市 松岡 篤
片思い長かったけど良い予感

12月号発表 (10月15日締切)



(平本 勝彦 画)
柳箋に2句

川柳塔鑑賞

同人吟 伊達 郁夫

— 9月号から

「川柳とは」の定義に大先輩達の名言。

川柳とは人生陶冶の詩である。句は人の心であり、人の姿であり、そのリズムは人の呼吸である。(路郎) 川柳とはユーモア、風刺、穿ちを主流とし、俗の真を見い出さんとするものである。(水府)

川柳は人間である。川柳は一幕の舞台劇である。川柳は生活の詩である。(大雄)
川柳は5・7・5で詠む心の翼である。(サトウ・ハチロー) 川柳は人間風刺の詩である。人間探求の詩である。(堺利彦)
川柳は謎解きである。(復本一郎) 川柳はズバリ斬る。チクリ刺す。ニンマリ笑う。ボンと膝を叩く表現である(堤丁玄坊) これらの名言を心に銘じて、じつくりと鑑賞させて頂きました。

疑えば符号すること二三

中居 善信

疑いが生じると、その疑いは悲しいか

な、どんどん広がり深さが生じます。

そして、符号することを見つけようとする人間の性に溺れていきます。

幸せなお家の墓に花がある

辻内 次根

今年も、お盆に墓参に行きました。周

囲の墓はお供えの花が競うように並んでいました。しかし、ぼつんと雑草が生え、供花の姿のない墓が点在。墓参をする人の心の余裕・愛情が伺われ、幸せな環境を忍ばせません。

ちよつと良い話に風鈴が揺れる

山岡富美子

楽しい・嬉しい話の輪に風鈴が涼やかな音で響く、風鈴が揺れる程の、細やかな風が吹く。小さな幸を肌で感じます。

多忙ではないが暇でもない老後

岸本 宏章

同感です。現役の時の様に、仕事・時

間に追いまくられる事はないのに何故か自分で雑用を作って、気ぜわしくしている老後ですね。まあこれが長生きの秘訣かも。

忘れたい過去がへらへら従いてくる

両川 無限

思い出したくない過去は誰にでもあります。その過去が夢の中・持ち物・記憶などから、ニタリと顔を出してきます。忘却こそ妙薬との言葉があるのに。

アングルを心安らぐまで変える

大内 朝子

見方を変えると、価値観が変わるものです。心が安らぐように、自分の物差しをいろいろと変えることこそ、上手な処世術ですね。作者の様な心のゆとりと知恵が、羨ましく、感服します。

生かさず殺さず良心飼っている

夏目 一粹

崇高な良心を持って余すことも。でも最低の良心は心の中に住まわせる。この生き様に揺れることがあります。下5の「飼っている」に、その心情が良く表現されています。

年金の歩幅で舞っているのです

倉益 一瑤

年金の窮屈な枠の中で、精一杯舞を踊る心意気。年金の句はたくさんありますが、この素晴らしい表現に脱帽です。

茶番劇互いに主役演じきる

田中 恵

お互いが主役を譲らないから、茶番劇なのです。互いに主役を演じてる自負。このアイロニーが良く効いています。

素つとんと決めてはいるがメニユー見る

岸本 清

一番シンプルな注文。素うどんと決めてはいるが、やはり、メニユーに目を通す。この穿ちが素晴らしい。この人情の見栄にくすぐりを感じます。

高齢者とひとくくりするのはやめて

三宅 満子

そうなんです。老人にもプライドもあるれば、自負もあるのです。若者やマスコミが、高齢者を一束にして、表現するには少なからず、私も頭にきます。

淋しい人の淋しい嘘に貸した耳

平井美智子

淋しい人が淋しい嘘をつく。このやる

せなさに、耳を傾ける情。何ともしみじみとした人情の機微。この切なさど温かさに胸が熱くなりました。

生きて行く目盛りは父と母の歳

升成 好

人生の節目に、ふと父母はこの歳にどんなシナリオを演じていただろうと立ち止まるものです。父母の歩んだ道こそ、自分の羅針盤になります。

ラストラン着順なんぞ気にしない

矢倉 五月

ラストランなのです。完走することが、目標なんです。着順なんかどうでも良いのです。一生懸命悔いのないよう走り続けましょう。

あれもこれも憧れたまま閉じてある

吉岡 修

振り返れば、憧れたことがいっぱい。その内手に入れたものは、どれほどかと4コーナーを曲がって、振り返ると、残念ながら、どれもこれも蓋を閉じたままと気づく。まだ行ける。蓋を開けて憧れに挑戦しましょう。

考えて考えぬいて白いまま

安芸田泰子

熟慮千遍、妙案を追い続けて、そのジレンマの渦に立ち尽くすことが、しばしばです。でも残念なことに、筆を汚すことなく、時間が過ぎていきます。

早く大きな花を描いてくださいね。

平凡という豊かさに馴れ過ぎた

高田美代子

無位無官、賞罰なし、と平凡を自負する輩が少なからず居られます。平凡と言う安楽椅子で居眠り。この豊かさに埋もれてしまう。ふとこれで良いのかともう一人の自分が問いかける。

身の丈に合った贅沢して暮らす

七反田順子

自分の能力・環境の範囲内で、いっぱい贅を尽くす暮らし。最大公約数の生き方。これこそ人生の粹でしょうね。人生万歳。

まだまだ素晴らしい句がいっぱいあります。

目立たないよう私は美しい 栃尾 奏子
恥を晒したら角が融けた 藤井 文代
完璧と思えた人に泣き黒子 池田 純子
ちくはくを完成させる嘘を吐く 寺川 弘一

一冊の本が私を塗り替える 柏原 夕胡

水煙抄鑑賞

— 1 月号から

加川 靖 鬼

お隣とつかず離れず口出さず

岡 本 勲

お隣と永い付き合いをしようと思えば、親し過ぎると必ず失敗します。適当な距離を保つ事が秘訣とか！勲さんは総てを知り尽したベテランとお見受けしました。

沈黙が一ばん困るまとめ役

岸 田 武

意見を述べる人は考え方が分りますが、幹事を一番困らせるのが沈黙ですね。そんな人に限って後で難癖をつけてきます。次回はその人にまとめ役をお願いしましょう。

一雨来そう蟻がせわしく動いている

中 島 一 彌

蟻の世界は、科学的な利器よりももっと正確な感覚が備わっていて、雨の気配を掴みとります。蟻がせわしく動いている時と、蛙が鳴く時は洗濯物を取り入れ

ましょう。

ベテランは褒めて叱ってまた褒める

中 村 毅

有名な山本五十六さんが、人を使う秘訣を教えています。いろいろと勉強させて体験させて最後は、褒めてやらねば人は動かし、と喝破されています。人間だけでは無く犬や猫でも褒めると一層可愛くなります。

義理人情重たいものはみな降ろす

中 前 幸 子

こんなお荷物を担いでいるのは人間だけでしょうね。その様な人間の業を幸子さんは、卒業され達観されたと思っ

ます。

花 岡 順 子

本人は覚えていないエピソード
学生時代に、やんちゃ坊主だった同級生が突然有名人になり、昔の無茶ぶりのエピソードを披露しても、本人は全く覚えていない。そんな神経の太さが、大物になる要素かも。

ちらかった部屋が好きです元気でる

柴 本 ばっは

きれいに整頓された部屋、そこは遊びの無い無味無臭の空間でしかありません。

散らかっているからこそ、その中に宝物が息づいていると思います。その中から毎日新しい発想が湧いて、元氣も出るしお若いのですね。

表情も豊かになつた年の功

羽田野 洋 介

還暦を過ぎたら大人の顔といわれます。表情も豊かになり、人の話を聞くゆとりも生まれます。そして酸いも甘いも噛み分けた皺には年の功が刻まれます。おだやかな顔はその人の人生を物語ると思っています。

血ぐらいはあげる痒くしなければ

有 海 静 枝

女性はやさしいですね。蚊は卵を生むために血を吸うといいますが、本当でしょうか。そうであれば、今まで叩きつぶしていたのをガマンしますが、あの痒さと病気の恐さには勝てません。南無阿弥陀仏。

若い娘ら雨も弾くか傘ささず

穂 口 正 子

学生服を着た娘さん、雨に濡れても平然として怯まない。雨粒が顔に当たっても弾くのです。雨蛙のように！若さって凄いです。



女のきもち (1)

女性が参政権を得て実際に行使したのは昭和21年のこと。以来、70年以上経ち、各分野への女性の進出は目覚ましいものがありますが、「炊事洗濯は女性の役割」という考え方は、戦前とあまり変わっていないように思えます。

今に見ておれと雑巾がけをする

亀の子タワシ握ると力湧いてくる

泣けるだけ泣いたしごはん炊きましよう

わたしにも役割がある茶を淹れる

漬物を褒められやと主婦になる

寝る前に明日の献立考える

雑巾がけや鍋磨きで鬱憤を晴らすことができるのも、いっぱい泣いたから「ごはんを炊こう」と思い直せるのも芯の強さでしょう。そのようにして怒りや悲しみが収まった後は、お茶を淹れたり献立を考えたり、穏やかな主婦に戻ります。

イライラは終わることない家事のせい

えらそうに言うからごはん作らない

手間かけて造った料理残される

ごちそうもないのに多い洗いのもの

戦力外通知を待てど来ない主婦

定年が欲しい主婦の座介護の座

しかし、いくら忍耐強くても休みなく続く家事を想うとイライラすることもあるでしょう。また、「炊事洗濯は女の仕事」などと威張られるとストライキを起こしたくなるのは当

然のことです。面倒な主婦業から解放してほしいと願っても、代わってくれる人がいなければガマンガマンです。

コロッケになってしまった男たち

むずかしい顔ばかりする男たち

制限速度守る男と二人連れ

涙もろい男で連れて歩けない

観察の結果男はこどもです

男とはこうあるべきかジャンプ傘

男女平等の現代、男性が女性に注文をつけているのと同じように、女性も遠慮なく厳しい意見を述べています。

「コロッケ」とは柔くて歯応えがないということでしょう。

「むずかしい顔」「制限速度を守る」とは格好ばかりで行

動力がないこと。「涙もろい男」も「子供のような男」も真っ

平御免。男たるもの、ジャンプ傘のようにシャキッと深く

パワフルであれというの、なかなか厳しい注文です。

ハープより癒してくれる男前

ターバンを巻く民族は男前

くらくらとするイケメンにまだ会えぬ

おしよゆをちよつとたらすといい男

大好きな人の前ではシャイになる

免疫がついておとこが好きになる

アロマセラピーも悪くはありませんが、イケメンと楽しく語り合うほうが癒されるのは間違いないと思います。しかし、我らモンゴロイド系は彼の国の男達に比べるとイマイチ。醤油を垂らせば少しはキリつとなるでしょう。シャイな大和撫子に「免疫をつけさせていただく」のも男の役目。

真島久美子

上田ひとみ

前田三津子

中井 アキ

栃尾 奏子

宇野 幹子

吉井菜々子

最上 和枝

川名 洋子

谷口 義

清水久美子

横井 幸子

永原 昌鼓

米澤 椒子

鈴木 霞

原田ますみ

柏原 夕胡

榎本 宏子

榎本 宏子

榎本 宏子

榎本 宏子

榎本 宏子

榎本 宏子

『川柳塔』の一行詩人・小島蘭幸論

―麻生路郎の人肌のポエジーを求めて―

文学博士・東京川柳会副主宰 平宗星

I 井上剣花坊と麻生路郎の

川柳一呼吸詩論

「川柳マガジン」で小島蘭幸が、全日本川柳協会の新理事長に就任したことを知り、それを祝して「小島蘭幸論」を三回の連載で執筆することになった。

『川柳塔』の編集人・木本朱夏より小島蘭幸川柳句集「再会Ⅱ」をお送り頂いたのでこの句集に収録された作品を通して比較川柳論の視点で一行詩人・小島蘭幸の川柳を論じてみたいと思う。

第一回目は、先ず麻生路郎の「一行詩」論を取りあげ、その川柳観が、どのように形成されたかをみていきたい。

麻生路郎は明治四十四年七月に短詩社から発行された『轍（わだち）』（創刊号）に評論「短詩概論」を掲載している。そこで路郎は、明治の「新川柳」を「短詩」

と捉え、「情景渾融」の「抒情詩」と規定している。路郎が二十四歳の時に書いた評論である。

昭和二十八年十一月に路郎は川柳雑誌社から川柳句集『旅人』を刊行する。この句集には、「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」をはじめ、路郎の代表句が収録されているが、そこには一行表記の他に多行表記の川柳も収録されている。このような表記の柔軟性に路郎の川柳観が最もよくあらわれている。

サルトルを伏せて

女に

溶け込みぬ

この川柳は三行表記になっている。こうした表記は歌人の石川啄木や土岐善麿の三行書きの短歌の影響の他に井上剣花坊が大正八年八月に刊行した川柳論「川柳を作る人に」収録されている「川柳一

呼吸詩」論の影響が強く認められる。

剣花坊は川柳を「短詩」と捉え、「新川柳は一呼吸詩である」と主張し、「五七五では到底十分に心の表現を為すことが出来ない時、無理に纏めては、句の生命が無くなる」と語る。そして川柳作家が「刹那の感情を詩化する」場合、「自分の一呼吸」を大切にし、創作すべきであると語るのである。

剣花坊の「一呼吸詩」の川柳には、次のような作品がある。

死、死、死、死、―世界はない

あかつきのさびしさ赤い塗枕

一滴も無い水甕に青い石

どつしりと座る一萬二千尺

美しい蝶が悶搔くよ銀の針

二十七年今に陣痛

くちびるだけの三角関係

黙し立ち渺茫の海を見飽かぬ巨巖

やせかけた犬に火焰のやうな舌

さくら音頭を踊るさびしさ

後五百年凡响生れて又千里

剣花坊が大正八年にこのような川柳の「一呼吸詩」論を展開した背景には、当時、アメリカの民衆詩人・ホイットマンの「草

の葉」が翻訳され、日本の民衆がこの詩集を愛読していたことによる。劍花坊はこの『草の葉』を読み、川柳こそ日本の「民衆芸術」であると確信したのである。

大正八年と言えば、同年九月九日に「井上劍花坊歓迎句会」が天王寺安井天神美川庵で開催されている。この歓迎句会に麻生路郎も出席し、劍花坊と会っているのである。路郎、三十一歳。劍花坊、五十歳。この時、劍花坊の「川柳一呼吸詩」論が話題になったに違いない。劍花坊は路郎に「新川柳は詩でなければならぬ、対象物の中へ我心を打込んで其生命と共に生きるものでなければならぬ」と主張し、「一段推し進めて、文壇の民衆詩でなければならぬ、自由詩でなければならぬ、而してどこまでも我國の詩であるということとを忘れてはならぬ」と情熱的に語ったと考えられる。

もし路郎の多行表記の川柳を「サルトルを伏せて女に溶け込みぬ」と一行表記で表現した場合、路郎の「八四五」の「一呼吸」によるリズムが「五七五」の「外在律」による作品として読まれてしまう可能性がある。麻生路郎はそうした可能性を否

定して自分の「生活からにじみ出た」「呼吸をある程度知ってもらいたいため」に多行表記の川柳を試みたと考えられる。

路郎は昭和三十二年十月に『川柳雑誌』（三六五号）に「一行詩人」と題する一文を発表し、「川柳は一呼吸の一行詩」と定義し、「たとえ短い十七音字中心のものであるうとも、私の生命を刻み込むのに尤もふさわしい」短詩であると述べ、「一行詩これが私の墓だとは」の川柳を創作している。

『新川柳評釈』の「序文」でも「句はその人のこのころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」と述べている。

路郎の「一呼吸の一行詩」には、次のような作品があげられる。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

その日ぐらしも

軒に雀が

こぼるよ

その嘘に

女は縫りついてゆく

蝙蝠よ
僕も裏切者にされ

君・君

もう少し静にし給へ 蠅

彼の一生

雨雨雨のままだった

愚かにも

顔見にゆけば

雪になる

路郎の川柳は一行表記でも多行表記でも「一呼吸」の長さで創作された「一行詩」であるところにその特色が最もよくあらわれている。

次号では、麻生路郎の「一呼吸の一行詩」論が、どのように小島蘭幸の川柳に表現されているかを蘭幸の句集『再会Ⅱ』を通して論じていくつもりである。

〈参考文献〉

麻生路郎『麻生路郎読本』（二〇一〇年九月、川柳塔社）（続く）（敬称略）

『麻生路郎読本』余滴 (42)

「川柳職業人宣言」前後②

栞 原 道 夫

車山、松南青螺、田邊幻樹、金子猫三、鴨志田竹緒、坂本一胡、大森不及、小林平吉の八人によるもので、1行18字の375行。3段組みで、28頁から34頁の上段にわたっている。路郎の「川柳職業人宣言」に対する、当時の川柳人の考えがうかがえる重要な資料なので、筆者の感想・注釈を交えながら全文紹介する。

竹 緒 車山君から提議があつたので今夜は*1川柳職業人は是非といふ論題で集まつて貰つたが、*2既に職業川柳家として進む事を発表した先輩も出て来られたし、又

本誌の大谷五花村先生も屢屢職業川柳家の出現を望んでみられるので、この問題は範圍としては稍々狭いかも知れないが大いに今夜は論じて貰ひたい。

*1 この合評の題は、前述したように「職業川柳人は是非」であるが、路郎の「川柳職業人宣言」に影響されて、このように発言したか。

*2 「既に先輩」とは、麻生路郎を指すと思われる。

猫 三 一體職業川柳人つて何ういふ意味だね、幻樹君。

幻 樹 生活のために川柳を引提げて起つ

といふ程の意味さ。精神生活のための川柳から、食ふための川柳に自分を求めるとでも、言へば言へるのぢやないか。

車 山 僕は職業川柳家の出現は現在の柳界に取つて大變心強く感じる。これに依つて柳界が急速に飛躍するとか發展するとは思はないが、何か齎らして呉れるだらう。既に宣言した*人たちは何れも長い年月を川柳のために精進してゐるのだから、當然その努力に對して酬はれるものがなければならぬと思ふ。

* 前回の「余滴」の、前田雀郎の文中に「十年の昔、村田周魚の果敢なるこの種の宣言」とあり、村田周魚のことも含んだ発言か。あるいは、路郎の「宣言」のあと、続いて「宣言」をした人がいるのだろうか。

竹 緒 然し職業川柳人の出現が柳界の進歩に大きな影響を與へるか否かは、現在はずきりと斷定は出来ないと思ふ。それに長い年月川柳に精進したから食へても好いだらうといふだけの考は何うかな。要は、その職業川柳人の作家的に卓越した素質が、それを決定する大部分だと思ふ。

前回は、職業川柳人の出現を望んでいた大谷五花村と前田雀郎をとりあげたが、川柳家の誰もが、「川柳職業人宣言」に對して、諸手を挙げて賛成した訳ではない。路郎自身も、私が職業川柳人として起つことの發表を見て「オヤあの人は職業川柳人ではなかつたのか」と事の意外に今更のやうに驚くのは世間の人で、「そんなことが出来るものですか、私たちは川柳を楽しみに創りさへすればいいので、川柳で飯を食はうなどとは思つてゐない」と變な眼使ひをするのが所謂川柳家ではあるまいか」と、「川柳職業人宣言」で述べているように、懷疑の目を向けた人も少なくなつたことが想像できる。

「川柳研究」昭和12年3月号に、「職業川柳人は是非」の合評が掲載されている。熊澤

平吉 その問題は川柳を一つの趣味としてものか、又は生活に一つのサークルを持つたものかといふ事から考へなけりやならない。僕の今の氣持は寧ろ後者の方に大きいかも知れない。だが職業といふ言葉が何うかと思ふね。

幻樹 それは單なる潔癖ぢやないか？とは言ふもの嫌な言葉だ。文學青年の嘸言かも知れないが。

平吉 然し僕達が今何のために川柳に没頭してゐるのかといふ事を考へると、それは單なる一つの趣味としてのみは考へられなくなつてゐる。だからその反面所謂「職業」といふ事が言ひ出されるとも言へるが、幻樹君ぢやないが嫌な言葉だ。

幻樹 これは何時も淋しくなると考へるのだが、川柳が職業的に立ち行かないのは川柳にそれだけの價值がないからぢやないか。

車山 幻樹君の言葉とは思へないな。今までの川柳が認められなかつたのも、さういふ自己卑下のやうな共通心理が大いに災ひしてゐるんだ。

平吉 價値といふよりは認識の問題ぢやないか、その認識を改めさせる一方法とし

ても、川柳職業人宣言もい、かも知れないが、果して名乗を上げた人達にその充滿した氣持があるだらうか。さうして更に恐しいのはやがて食はんがため、自己生活保定的のために川柳を利用する人間の出で来る事だ。

不及 僕は食ふために川柳をやるんだつたらその人を輕蔑するな。生活の一つの手段として川柳を選ぶのだつたら、他の物でも好い譯だ。自然と食へるやうにならなければ駄目だと思ふ。

幻樹 それは我我の單なる言分で極端な言葉だよ。但し今までの大家である川柳家が餘り川柳に對して對外的に消極的でありすぎたといふ事だけは言へる。それを今更宣言されたのだ。その寂しさがグンと我々に食ひ込んで來たので、こいつはたゞ通り一邊のスコールみたいな感情で直ぐ晴れて行つてしまふのだ。

一胡 僕は藝術なんでものは職業になるならぬで、その價値を決めるものではないと思ふ。川柳ぢや飯が食へないから下らないものさ、なんて言ふ人があつたら、それは常識ばかりで腹充滿になつてゐる奴で、到底藝術なんて解らないよ。紫式部が、

源氏物語を書いて原稿料も貰はなかつたら、あれは駄作だといふ人間があつたら、川柳も職業にならなければ下らないといふ事になるがね。

車山 自分の作品に商品價値を持たせる事が何うして藝術の冒瀆なのかな。

幻樹 いや食ふための手段として宣言したといふ事なら、藝術の純粹性から言つてやりきれないといふだけなのだ。

車山 兎に角、自然に食へるのを待つたんで、大公望のやうなことを言つて居たのでは、到底川柳は趣味以外を出ない事になる。既に食ふべくスタートしてしまつた人達の、切實な問題として考へて見やうぢやないか。*それに時期を待つて食へるやうになつても結果は同じで、その一方だけを輕蔑するといふのは何ういふもんだらう。寧ろ、食ふべく自ら努力した方に却つて悲壯な眞劍さがありはしないか。

*「それにく同じで」とは、「藝術の純粹性から言つてやりきれない」という思ひは、「食ふための手段として宣言」しても、「時期を待つて食へるやうになつても」、同じように抱くものだ、という意味だらう。(次回に続く)

本社 九月句会

◇九月七日(木) 午後一時
アウイーナ大阪

朝夕に秋の気配を感じる七日、九月句会は一三一名(内投句者二一名)の参加で開催された。初出席は佐々木真樹子さん(生駒市)。

今月のお話は本木朱夏副理事長。「編集の現場から」と題して、川柳塔誌発行の裏話をされた。編集に配属されたのは二〇〇〇年。編集長を拜命して七年目。誌面作成で一番悩まされるのが、誤植。誤植の具体例をたくさん上げ、会場は笑いの渦に包まれた。

誌面の間違いを無くすためにも投句は濃い鉛筆、またはボールペンで、文字は正確に楷書で、締切厳守をと、協力を求められた。最後に本社句会恒例となりつつある歌の時間は「ふるさと」を全員で合唱した。(憲彦)

月間賞は 山田葉子さん(長岡京市)
(司会)蕉子・真理子 (協取)五月・勝弘
(受付)ふりこ・宏造 (清記)憲彦

席題「どっかん」 水野 黒兎 選

どっかと遺産相続降ってきた
孫の尻ジジの胡座へどっかんと
平和呆け地雷の上で昼寝して
どっかともうけどどっかん下がる株
こつこつと貯めてどかんとお買い物
初対面どっかんハート射貫かれる
どっかんと打ち上げるたび餓死者増え
ミサイルのドカン聴き飽きた聴き飽きた
ドカンドカンまた打ち上げる北の鬼気
どっかんと下せ鉄槌北の国
均衡と平和どっかん崩す核
おきやおきやおきとどっかと男の子
父の喝だよ 大花火 大太鼓
昭和にはどっかん父の威厳あり
どっかんの父の雷昭和の絵
いろり端父のどっかん懐かしい
ドカドカン文春様のお通りだ
どっかんとギョクリ腰がやってきた
目が覚める程どっかんと叱つてよ
民の声落としくなる永田町
どっかんと妻の雷落ちて晴れ
どっかんと怒鳴るかみつくむきになる
どっかんと言えばいいのに焦れたい
へそくりでどっかん妻へプレゼント
どっかんと射止めて乗った玉の輿

藤原千恵子
山本 昌代
安土 理恵
飛永ふりこ
柴本はつは
渡辺 富子
吉村久仁雄
青木 公輔
坂上 淳司
村上 直樹
出口セツ子
山田 耕治
小島 蘭幸
酒井 紀華
山野 寿之
酒井 紀華
木本 朱夏
新家 完司
藤村 亜成
三宅 保州
松尾美智代
山口弘委智
升成 好
川端 六次
石田ひろ子

どっかんと叫びストレス落としてる
定年へどかんと戻ってきた時間
どっかんと又も玉砕プロボース
どっかんと社長の椅子は心地良く
ゆく夏をどっかん送る大花火
大花火胸に一発だけ揚がる
どっかんとあれは花火かミサイルか
揚げ花火それはきれいな恋でした
どっかんと妻が座ると座が縮まり
どやし甲斐ない男だとやされる
どっかんとは大概妻が震源地
ドドドドド妻のマグマがドッカーン

佳
どっかんと今日も夕陽が落ちてゆく
大花火二人の仲が深くなる
どっかんと和尚が座り七回忌
八十路のどっかん再婚するという
どっかんと生まれ名もなき花になる

人
忘れまいビカリどっかんキノコ雲
地
どっかんと大ばら吹いてから孤独
天
くよくよとするなよどっかんと夕陽
軸
どっかんとは花火であつた世の平和

藤原 大子
太田扶美代
柿花 和夫
松岡 篤
中川ひろ介
居谷真理子
太田としお
久保田千代
松岡 篤
海老池 洋
藤井 則彦
木本 朱夏
能勢 良子
肥山 一文
上田 和宏
山本希久子
小野 雅美
澤井 敏治
鈴木いさお
山本希久子

兼題「味」 初代 正彦 選

おいしいかどうか眼鏡をかけてみる
甘かったが一味ついて来た二人
それなりに口馴らされて妻の味
亡き母の味の決め手は愛だった
おつな味出してなごんでくる夫婦
激辛にはまり忘れた京の味
冬瓜と鶏の煮物は祖母の味
有り難い事に夫は味音痴
関の鯖父をうならす塩加減
SNSで伝わりますか人の味
羊水に旨味成分は育つ
なたって日本の味は味噌醤油
味付けに少し煩い鍋奉行
夜遊びの味を忘れて紙おむつ
歳重ねいい味出している白髪
脇役を重ねて味が出る役者
味付けは恋の雫も混ぜておく
仙人の気分味わう一人酒
妻去んで娘の料理味けない
健さんは味ある役者だったのに
薄味の作り話がよく弾む
煮崩れて味な女になれました
第三の調味料です妻の愛
妻の味に慣れて駅蕎麦が辛い
熟れ鮓に知る発酵の深い味

大久保真澄
吉岡 修
福田 好文
細川 花門
渡辺 富子
榎本 宏子
指宿千枝子
油谷 克己
柴本ばつは
松浦 英夫
宇賀 史郎
平賀 国和
木嶋 盛隆
川端 六点
松尾美智代
鈴木いさお
青木 公輔
新家 完司
荒川 鈍甲
田中 章子
村上 玄也
米澤 俣子
山本希久子
山田 耕治
水野 黒兎

けれん味なく生きて茶漬の美味い朝
接客に柔らかな味苦労働
兼題が解けて美味しい独り酒
ええ味出してるええ役者になった
新婚さん家庭の味を仕込み中
汗の味愛情の味自家野菜
料理する夫が味にこうるさい
二度漬けはしないが五秒溺れさす
この糠漬の味留守に姑来たらしい
毒味するパパベットの目が刺さる
飾らない言葉にほんわか人間味
褒め方も一味違う苦労働

鶴彬味は不屈の二字だらう
二枚目の舌で味わう甘い汁
薄味に馴らされ舌も丸くなる
一合と決めてお酒の味を知る
ボ口家でも家族揃えば癒す味

村上山 直樹
安福 和夫
上山 堅坊
古今堂蕉子
山口 光久
山野 寿之
原田すみ子
清水久美子
中川ひろ介
澤井 敏治
藤原 大子
藤井 則彦
岩佐タン吉
西出 楓楽
鈴木いさお
山田 耕治
榎本日の出
上山 堅坊
山田 葉子
新家 完司

兼題「リレー」 栃尾 奏子 選

若手同人ミニエッセイにウエルカム
呱呱の声聞いて僕似とはしゃぐパパ
大島紆ひいばあちゃんのリレー品
仏壇や墓のリレーは棄権する
聞き上手な男離さぬ三次会
せっかくの内緒さあ伝言ゲーム
退屈な話に欠伸リレーする
巣立つ娘へ渡すバトンに愛を秘め
アンカーが勝負握っていたリレー
体育祭リレーのびりが大主役
喪主の座に父そっくりの子が座る
命をつなくドナーカードを持ち歩く
遡上する鮭は命のリレーする
噂話にどんとん尾ひれついていく
遺伝子の見事なリレー丸い鼻
紋白蝶花のいのちをリレーする
行く夏に向日葵の種バトンパス
ひまわりにバトンを貰う秋桜
夏から秋へバトンタッチをする風よ
夏休みの赤字を秋で取り戻す
四季の花リレーで埋まる花暦
土に還してリレー続ける花の種
花の種やさしい人にリレーする
かあさんとするしりとりは終わらない
母妻娘揃ってしゃべりお節介

藤井 智史
松岡 篤
榎本 宏子
大久保真澄
野口 晶子
前 たもつ
松原 寿子
石田 隆彦
柴本ばつは
居谷真理子
内藤 憲彦
大内 朝子
能勢 良子
渡辺 富子
鴨谷瑠美子
山根 妙子
木本 朱夏
大内 朝子
立蔵 信子
米澤 俣子
升成 好
鴨谷瑠美子
寺川 弘一
村田 博

新郎の母と新婦がハイタッチ
ぬか床も繼いで旧家の割烹着

山田 耕治
島田 誠一

焼夷弾バケツリレーをした昭和
ボランティアバケツリレーのありがたさ

水野 黒兎
江島谷勝弘

つっこみとボケのリレーで恙無い
七年目命のリレー 蟬の羽化

小林 わこ
北野 哲男

ブーケトス受けた少女が嬉しそう
伝書鳩恋に落ちたか戻らない

森 廣子
清水久美子

家業継ぐ間口二間のラーメン屋
独裁のバトン三代目の焦り

澤井 敏治
島田 誠一

バトンタッチそれがなかなかむつかしい
武富士で借りてアコムへ返します

谷口 義
太田としお

輪廻転生抱いて滔滔ゆく大河
伝言リレー丸は四角になりました

村上 直樹
山本希久子

教えられて教えて知恵の輪ができる
七十余億アダムとイブからのリレー

籠島 恵子
矢倉 五月

反戦の祈り次世代へのリレー
子へ繋ぐ九条死守というバトン

小野 雅美
澤井 敏治

大切なバトンだ丁寧にわたす
天

籠島 恵子

受けとったこれは命というバトン
軸

居谷真理子

満ち潮へ命のバトン産み落とす

居谷真理子

兼題 「つっこり」 油谷 克己 選

通帳に添い寝しているおばあさん
こっそりと夫も知らぬプチ整形
こっそりと「社会の窓が開いてます」
連日の句会こっそり家を出る
全没の彼音もなく姿消す

大久保眞澄
清水 英旺
上垣キヨミ
山崎 武彦

こっそりと見てきたあの世楽しもう
こっそりと勿体ぶって鮎ひとつ
こっそりと飲んだお酒が良く廻る
こっそりと見えぬ尻尾を振っている
満月に2センチ伸びる尾てい骨
いつの間に離婚再婚してた友
こそこそとするからばれるつまみ食い
名を告げず黙って置いてきた善意
店の隅こっそり妻へする電話
忘れっぽくなってこっそり辞書を引く
難聴で大声こっそりは苦手
こっそりと入籍済ます出来ちゃった
読経すむ頃こっそり座る隅の席
袋とじみんなこっそり開けてない
別居していることは誰にも言っていない
善人面でこっそり生きるのも辛い
こっそりの話の好きな壁の耳
つまみ喰いこれほど旨いものはない
こっそりと隠しこっそり捜して
返り血をこっそり父は洗ってた

鈴木いさお
古今堂蕉子
山野 寿之
寺川 弘一
居谷真理子
澤井 敏治
清水久美子
太田扶美代
矢倉 五月
遠山 唯教
片山かずお
前田 紀雄
升成 好
石田 隆彦
村上 玄也
今井万紗子
大内 朝子
内藤 憲彦
中岡千代美
渡辺 富子

こっそりと洗う仮面の裏表
こっそりと借り堂堂と返す金
鍵閉めてタンス預金を数えている
こっそりと鬼を一匹飼っています

久保田千代
宇賀 史郎
松尾美智代
柿花 和夫

こっそりの耳が男の骨を抜く
臨死体験こっそりあの世見て帰る
こっそりと整形をした後遺症
こっそりと防空壕を掘っている
生き恥はこっそり焼いて煮て食べる

山野 寿之
中川ひろ介
山岡富美子
新家 完司
吉村久仁雄

匿名で出し悪事でバレている
ぼっくりと逝ってこっそり家族葬
天

居谷真理子
村上 直樹

堂々とデイト出来ませうご内定
軸

前 たもつ

こっそりのデート文春嗅ぎつける

前 たもつ

兼題「濃い」 片山かずお 選

張りこんで名前濃く書くのし袋
 四分六のいつもの濃さが誘つてる
 失恋のせいか濃茶が眠れない
 高安の胸毛三ツ編みしたくなる
 天空の青を深めて夏が逝く
 疑いが濃くても記憶ない議員
 ひからびたころへ浴びる濃いみどり
 剃りあとの青魅せられたのは昔
 若いねと言われお化粧落とせない
 コテコテの大阪弁が減つてきた
 威風堂々信念曲げぬ濃い眉毛
 濃い影に主治医が黙り込む不安
 加速する老いに抗う厚化粧
 句は我が子化粧濃いめに送り出す
 濃く太く元氣とだけを母へ書く
 親と子の濃さがさすのか内輪揉め
 濃いのが故に喜劇悲劇に血の絆
 血の濃さのゆえに揉めるとややししい
 血の濃さがきつい言葉になる介護
 付き合ひの濃さで決めてる祝い金
 問延びた会話に注ぐ濃い目の茶
 濃いお茶に妻の機嫌を入れている
 濃い粥に退院近い予感する
 濃い髭でジョリジョリ孫が寄り付かず
 敗色が濃い言い訳の三つ四つ

福田 好文
 吉岡 修
 加門 萌子
 清水久美子
 新家 完司
 山野 寿之
 渡辺 富子
 米澤 徹子
 内藤 憲彦
 宇都満知子
 石田 隆彦
 山崎 武彦
 鈴木いさお
 島田 誠一
 矢倉 五月
 三宅 保州
 緒方美津子
 村上 玄也
 萩原 狸月
 能勢 利子
 今井万紗子
 奥澤洋次郎
 松岡 篤
 坂上 淳司
 吉村久仁雄

濃い化粧UV対策兼ねている
 こてこての河内弁ですうちの嫁
 人情の濃さにふるさと出られない
 濃い顔が我家の自慢どんぐり目
 お湯割りは少し濃いめでたのんます
 稜線がくつきり秋の晴れた空
 驚天の濃い関東のうどん汁
 会うたびに愛が濃くなる昼の恋
 老いのあし疲労の色が濃いくなる
 濃い故にカツラですかと問われる
 男の嘘ゆでて真つ赤な汁を出す
 濃厚な恋をしてから半世紀

中川ひろ介
 堀 正和
 三宅 保州
 松尾美智代
 江島谷勝弘
 油谷 克己
 水野 黒兔
 柿花 和夫
 遠山 唯教
 松岡 篤
 渡辺 富子
 安福 和夫

住

これ以上濃いものはない母の愛
 濃い味の郷土料理のおもてなし
 人情の濃い下町は話好き
 濃い目の茶昨夜の酒をたしなめる
 火の酒を呷り繕う胸の傷

人

もつと濃い影になりたい影法師
 地 海老池 洋
 明日嫁ぐ娘と語る濃い時間
 山口 光久
 天 黒々と書いた「禁酒」を当てに酌む
 澤井 敏治
 子や孫に濃い血の繋がりのクセ毛
 軸

兼題「淡淡」 小島 蘭幸 選

淡淡と刻は流れて無味無臭
 栄光も名誉も問わぬ家族葬
 淡淡と語る苦勞は重かった
 八徳持ち淡淡と生くかたつむり
 シベリアを語り始めた九十歳
 原爆忌総理淡淡たる弔辞
 淡淡と等身大の花咲かす
 淡淡と別な心でいる二人
 淡淡と生きてやさしい風になる
 淀みなど無いだろ淡淡と白寿
 元の他人に戻りましたと来る手紙
 秘訣はないただ百年を生きただけ
 淡淡と生きる竹光ふところに
 淡淡として語り部の深い皺
 火のような自分史淡淡と語る
 もう過去のひとです笑顔交わします
 淡淡とルーティンこなす主婦の朝
 手を振つて娘は嫁に行きました
 淡淡と生きて色無し一行詩
 心まで貧しくしない酒は呑む
 欲すてて淡彩になる尉と姥
 空蟬のこの世に未練ないかたち
 淡淡と回顧波乱も万丈も
 淡淡と見送る百歳のいのち
 ガン告知世間話をするような

清水 英旺
 上垣キヨミ
 藤井 智史
 野口 晶子
 田中 章子
 北野 哲男
 渡辺 富子
 柿花 和夫
 松尾美智代
 米澤 徹子
 前 たもつ
 太田扶美代
 西出 楓葉
 水野 黒兔
 小山 紀乃
 山田 葉子
 宇都満知子
 山本 進
 中川ひろ介
 柴本ばつは
 遠山 唯教
 木本 朱夏
 川端 六点
 西出 楓葉
 山本 進

アユの塩焼き三匹は食べたいな 江島谷勝弘
 淡々とシベリア語る亡父だった 加門 萌子
 その日まで一日ずつを老いていく 居谷真理子
 水のように生きてさらりと逝くつもり 木本 朱夏
 淡淡とこなす介護士の温い目 宇都満知子
 淡淡と生きても葦は傷だらけ 松尾美智代
 淡淡と小言を聞いて飲みに出る 奥澤洋次郎
 淡淡と生きた証の尊厳死 山崎 武彦
 淡淡と言わねば涙溢れ出る 中村 恵
 淡々と黒衣に徹し奢らない 水野 黒兎
 年月が過ぎて語れることがある 立蔵 信子
 茶封筒別れの文は簡条書き 栃尾 奏子

佳
 淡々と自転車で帰って行った 谷口 義
 淡淡と語るヒロシマの語り部 木藤こみつ
 淡淡と生きてる一階と二階 古今堂蕉子
 独り居に見合う釣果で竿をおく 澤井 敏治
 淡淡と明日を見ているケアハウス 初代 正彦

人
 悲しみを男は独り乗り越える 森 廣子

地
 琥珀色静かに生きてきたんだね 居谷真理子

天
 レットイットヒーふたりで歩けたらいいね 山田 葉子

軸
 あとはもう一句を遺すだけである

句会 燦 燦

八月句会を読む 弘 津 秋の子

一枚で気楽に涼むアツパツパ
 席題「一枚」からの一句。アツパツパは首と腕の部分を切り抜いた女性の夏衣。意味を知らなくてもパツパツパと暑さを払った一句に涼しさあり。

八月忌愚直な犬と正座する 初代 正彦

折り鶴の四隅をゆるがせにしない 木本 朱夏

兼題「犬」と「丁寧」からの句である。八月忌は被爆二世の私にとつては八月六日になる。オバマ大統領にハグされた森重昭さんは、私の憧れの先輩のご主人であった。「八月はまだ簡單な月でない」橘高薫風氏の句を朱夏さんに教わる。

秋田犬の駅長がいる五能線 松尾美智代

つくづくをほじくつている妻楊枝 柴原 道夫

「きらっと具象」を合言葉に川柳教室に参加している。この「五能線」「妻楊枝」が「きらっと光る具象」である。

点滴からスープに 命よみがえる 石田 隆彦

ヘナヘナの時の点滴は天の葉である。しかし点滴だけでは人は人に戻れない。スープを自力で飲み込み、お粥を食べれるようになると蘇ってゆく。実感句である。

気付けせず妻はとづくに背いている 上田 和宏

川柳人の男性はあなどれない。妻の本心をとづくに見抜いて黙っていることができるのだ。

生きるとはつくづく自分とのいくさ 西出 楓楽

丁寧に締めたネクタイほど歪む 藤井 則彦

丁寧に書かねば書けぬ薔薇の文字 木藤こみつ

丁寧に言っただけならぬ避難指示 江畑 哲男

常にアンテナを張って暮らす日々は「戦」でもある。疲れた日は、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

常には、丁寧に薔薇の字を書くとしましょうか。

むせぬ城

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳あまがさき(星座)前月号大浦 初音報

呆け封じ寺の帰りの道迷う
宝くじ神棚に置き拌んでる
豊作やだけど農家も朝はパン
初日から土産をあさる旅の空
認知あつてもずっと一緒に生きて行こ
通夜の席どっさり友に囲まれて
明日はさて置き今日という日を楽しもう
父さんは一息置いてお説教
あなたの事は心のすみに置いとくわ
どっさりと亡父が残した後始末
割り切つてロボット頼る介護の手
私に火をつけたのはあなたです
補助線を引いてチャンスを探つてる
暑いので家では殻を脱いでます
どっさりと愛が届いた誕生日
スッポンと黒酢に頼り夢を追う
おはぎなどどっさりつくる母でした
青空に雲のちぎり絵置いてくる

英 坊
柳 明
修 平
初 音
菊 江
千 賀
つ 子
利 子
芳 香
り 香
雅 美
こ み
紀 恵
雪 菜
ヨ シ
ま つ
お
宏 造
紀 華

蚊取り線香ゆっくり時を刻む渦
子測不能列島縦断する豪雨
お互いに小言言い合い頼り合う
負けました澄んだ瞳が駒を置く
あなたが頼り頼りとアゴで使われる

岸和田川柳会(大阪)前月号石田ひろ子報

最後まで汗流したか問うている
賑やかな義母で肌艶とても良い
寄せ植えに肌の合わない花がある
姐御肌の妻の後ろを付いて行く
恩人のピンチ一肌脱ぐ覚悟
老人会世話やく祖母の肌の艶
美肌の湯期待はするが元が元
老いはれも孫の元気に救われる
拉致されたわが子救えぬ国の壁
生きのりが迄宿題しない夏休み
生きのりがややつで水を飲んでいる
ざりざりで当選しても大威張り
逆境の町に灯りのフラガール
徳儀に足かかっています絵理
ボランティアが救ってくれる聞き役で
認知症いいえギリギリもの忘れ
店員のリップサービス聞き飽きた
究極のサービス受けるモリとカケ
サービスに特製笑顔つけてます

川柳塔みちのく(青森) 稻見 則彦報

小雨なら情緒ゲリラ雨は恐怖
とんち小僧ぐつぐつ煮てる仏さま

靖 鬼
美 龍
哲 男
哲 夫
か ず
お
丹 吉
カズコ
香 代
清
大 輔
隆 昭
ふ さ ぬ
忠 太
喜 代 志
和 美
喜 八 郎
笑 司
律 雄
英 雄
信 子
洋 二
珠 子
紀 雄
み つ 江

童謡の雨と遊んでみましようか
一粒の雨一粒の芽となりぬ
名所見てあとは出で湯と酒で閉め
ハローワーク今日も冷たい雨ばかり
どろ沼で悟りひらいて連りの花
初デート名所めぐりで盛り上げる
今まさに試されている披露席
世界遺産全八資産沖の島
地図好きで名所を巡る博学者
タンポポの綿毛が試す青い空
招かざる雨が運んでくる悲哀
八十歳試したい事山のほど
ヒマワリの笑顔が消えた午後は雨
雨あがり下駄の二の字をつけて行く
絵日記へ毎日虹を描いて嗚呼
女偏ぐつぐつ煮込みまだ老いず
老いて古都修学旅行の道たどる
試食ならご法度本気ならOK
女尊男卑雨上がりです京都宇治
落ちりんこ涙をとばしジャムになる
マイナスイオン見えるようです青荷道
ぐつぐつと煮込む家内の味加減
初物のとうもろこしださあ夏だ
ワンカッブから怒り溢れて酔えない日
学童の見守り兼ねて散歩する
認知症ならぬ程度に動いてる
原爆忌あの日と同じ熱い風
消費期限訂正してる古稀間近か
辻褄を合わすとずれてくる眼鏡
五百円玉もわたしも頼りない

則彦
嘉
重虎
井蛙
美鈴
久美子
吹喜
一呑
花匠
隆樹
芳生
洋子
ひとし
小とみ
黙人
柳子
英子
夕香
のぶよし
きよし
真由美
吞舟
規子
初枝
京子
龍馬
ふさぬ
花峯
氏加子
霜石

年金日入浴床屋のれん酒
親愛の度合いはフルーチェ作りから
りんご二個皮まで食べて長生きす
一つとむ
和香子
一花

川柳打吹(鳥取) 野口 節子報

山登りよりもしんどい家事育児
天辺に登って梯子外された
昇りつめると地震も雨もないところ
履いてくれ錆びて待ってる登山靴
うかうかと乗った話に手が回り
うかうかと空の財布で買物へ
うかうかと卒寿の坂をよじ登る
終活しようかうかうかすると迎え来る
輪の線上で内にされ外にされ
ごつてりと秘密抱えて飛び立てぬ
脂汗ごつてり絞る山の神
お返しはごつてり愛を贈ります
皿鉢にはごつてり土佐のおもてなし
婦警としらずごつてり油しぼられた
美しさごつてりよりもスッピンで
ごつてりと後悔重ね生きている
自己紹介自慢話のてんこ盛り
頂上に登って落ちる運が待つ
朝焼けの海と語れば無の心
梅雨明けて海の色まで鮮やかだ
服のまま海水浴の子連れママ
もう一度海で遠泳してみたい
身の丈の海しか知らず海語る
海と陸どっちが先かコロンブス
奪うもの奪って海は凧いでいる

泰山 石花菜 完司 照彦 重利 悦子 妻子 龍枝 道子 清子 滋坊 玲坊 重忠 岳人 公恵 紀の治 たいけ代 紀美恵 貴恵 義人 瑞子 芳光 野蒜 美ツ千

泳ぐのは下手だが海に抱かれない
ごめんなさいと書かれた海の一ページ
産声は海と別れの雄叫びか
目ん玉に広き海ありクロマグロ
くにご
節子
三津子

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

月映し水をたたえた千枚田
階段を這ってでも行く我が子待つ
怪我をして降りる階段にがてです
覚悟して十三昇る死刑囚
名人へ着々昇る藤井くん
国内地内緒で掛ける階段を
階段を一步踏み出すボランテア
ウメ地下の階段今日も間違えた
夢を追う少年虹の橋渡る
夢だけが渡れるのです虹の橋
虹の橋かけて雨神さまがゆく
満中陰少し濃い目に紅を引く
紅一点そんな会合すきやねん
次に画く虹は色濃く鮮やかに
上向いて歩こう虹に会えるから
振り向かずおんな再起の紅を引く
沈む陽も紅の夢見せまたあした
知らぬ振りし泳がす妻の勘
群れを振りし泳ぐ雑魚にも生きる知恵
とりあえず泳がせとくと課長いい
習わずに雑魚の動きを身に付ける
生かされて神の手のうち泳いでる
抜き手切り泳いだ戦後復興地
世間という海を巧みに立ち泳ぐ

福貴子 舞夢 廣子 一歩 美世子 芳香 昌紀 志津子 直子 かりん 克己 五月 大子 日の出 隆昭 重信 雅美 公平 美籠 満作

藤井則彦 選

恍惚の母が拾っている昔
我慢した褒美にもらう笑い皺
明日はあるそれでも今日は貴重な日
ひとり言いえ亡夫との会話です
握り拳に男のメンツ閉じてこめる
口こもる世代の違う知恵袋
やさしさへ役目を果たすピアニッシモ(矢)五月
思い出し独り笑えば猫がなくな
母さんに似たわたくしを好きになる
傷心をやさしく包むオムライス
美佐子

佳句地十選

(9月号から)

政岡 日枝子 選

スカスカとノックもしない無二の友
母さんの杖になろうとする介護
てふてふと書いても読める戦中派
こつそりと孫にお金を渡して
道草をしながら心地よい余生
決断は車返上八十路坂
なぜかなあ老母の寝顔にほつとする
偉人伝なるほどなあと読んで寝る
勲章はないけど俺は真つ直ぐだ
毎日を僕が主役で歩んでる
妻子 満洲夫 則彦 忠子 昭紀 治代 よしこ 守啓 重忠 ダン吉

水槽の鱷の群れが人見てる
 核心をつかれ総理の目が泳ぐ
 せつかくの浮世気楽に泳ぎます
 爾爾と八つの句会消化する
 スマホしてうまく泳ぐよ若者は
 精一杯昭和平成泳ぎ切る
 プランにはない旅となる聴診器
 ノープラン当たって砕け散る覚悟
 ルンルンでプラン満載夏休み
 クルーズに行くプラン抱くパスポート
 あの世に着地すく逢いにゆくあの人に

和歌山三幸川柳会 楠見 章子報

世の中の流れ知ってるマンホール
 二つある穴聞き分ける嗅ぎ分ける
 トネルを避難場所には出来ないか
 母の席穴が空いても話しかけ
 ちょうど今円月島に入る夕日
 穴の中出てこい話聞いてやる
 穴埋めにいつも私が座らされ
 でこばこ道だから人生おもしろい
 前頭葉どこかに穴があるような
 風穴を大きくあけて嫁姑
 胸の穴あなたの住んでいたところ
 鍵穴に詰め込んでいる内緒ごと
 敗戦の遺産防空壕だろう
 高金利甘い言葉の落し穴
 傘立ての中に逢瀬のひと滴
 その時はあなたの傘になりましょう
 ジャンプ傘男は覇気に立ち向かう

妙子 宏枝 次根 義雄 あき子 義泰 タン吉 美羽 明子 ままき 当代 みつ江 昭枝 昇 一雄 倫子 干子

傘下には入らず私色で咲く
 蟬りとけて貴方の傘の中
 里芋の葉っぱカッパの傘だろう
 終電車無賃乗車してる傘
 一ノ谷のいくさ青葉の笛哀し
 地球儀を横に広げたメルカトル
 時折は横にさせたい地蔵さま
 幸運の女神が横を通り抜け
 人の世の愛の深さと悲しみと
 いつ見ても清そな姿白い襟
 脚光を浴びても忘れないマナー
 拝啓と敬具で結ぶ母の文
 お育てが匂う立ち居に振り返る
 成金のマナーは白い眼を集め
 マナー無視自然破壊へ走り出す
 日本のマナーで五輪おもてなし
 マイルールイコールマナーマイベース
 最大のマナーは平和守ること

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

四季がある地球は生きているんだね
 骨片をたどり憶万年を知る
 シニアアー歳をとるのも悪くない
 ふるさとは車窓で見るだけとなり
 ながらえは哀れこの身もしよはくれる
 長生きの知恵味噌汁の具具山
 長寿者の振りはしっかり見ておこう
 こちらこそお礼言いたい母の日に
 ご褒美と言って休んでばかりいる
 一強の驕り支持率叱ってる

菜摘 絹子 千鶴 日出男 俣子 起世子 准一 富香 和子 純子 智三 敏照 ひろ子 知香 保州 かずこ 和之 亜矢 和代 奈美 章子 寿々子 千恵子 慶一 葵

おしどり夫婦お手本は両陛下
 総活躍のあれから忙しくなった
 夜なべした手の節々は高いまま
 萎れずにぱつと散るのは難しい
 検診の赤い結果に暑さ増す
 懐メロ歌う原点に戻るため

竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

アイスクリーム三段愛のてんこもり
 自家製のぬか漬これも愛である
 追憶の彼方に消えた愛の唄
 「愛してる」ずっしり重い置きみやげ
 愛されてますかいい顔してますか
 愛の子感揺れ止まらないイヤリング
 十二色並べて迷う春の彩
 懐かしく並んで植えたあの田圃
 雑壇のタレント欲しい国語力
 残念だ不満を並べ立て
 雑壇の閑條お詫びが好きらしい
 ガラポンへ並んだ末に白い玉
 悩み晴れたか明るく弾んでる
 ハッピーな窓だひまわりが笑ってる
 幸せの彩がこぼれる窓明かり
 スマイルと明るい声が友を呼ぶ
 三歳の明るさ無垢という白さ
 シングルマザー強く明るくベタル踏む
 電話口明るい声の孫が出る
 差し向かい明るいいはなしエンドレス
 懐かしい人日替わりで夢に出る
 彷徨うて思考回路をオフにする

華蓮 陽子 安子 美恵子 游子 公弘 比呂子 千代美 規代 慶子 蘭幸 幸子 鬼焼 節生 汎美 半徳 淑子 陽子 弘子 敬子 昭紀 宣之 笑子 輝恵 栄香 歩美 厚子

窓ごしに見おろす花は笑つてる
水ぬるむメダカクロールで泳ぐ
悪さする顔も寝顔も憎めない

栄 恵
貞 子
史 子

きやらぼく川柳会(鳥取)後藤 宏之報

ビールにも鮎の香吸わせ焼きを待つ
ことわざに秋茄子嫁に食わずなど
過去忘れ未来に向かい歩み行く
稀な山百合花壇に咲いてありがとう
ダメージが財布に響く九連休
トラは皮われは没句の山残す
向日葵の花の動きは陽を慕い
夏の陽は大山さんのシルエツト
朝刊を見てアクビして昼ごはん
とりあえず酒さえ飲めば日が暮れる
日時計にこれから従い暮らしたい
元気でな竹馬の友へさりげなく
さえずりの鳥の会話に癒される
炎熱にトライアスロン感動す
ブレゼント杖と行きます八十路坂
白鵬の土俵に遊びめくゆとり
好きですなトライアスロンこの暑さ
沈黙の刻は眠っている老いよ

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報

大声が出るからまだまだだくたばらぬ
声だけは若いですねと褒められる
まだ死んでたまるか天の句が出来ず
遠くから眺める丸い海がすき
八月の海に祈りは深くなる

重 忠
完 司
清 信
一 平
一 瑤

海よりもっとも深い父母の愛
戦争は嫌声を大にして叫ぶ
付度をして権力の声を聞く
腕組んで歩幅合せて爺と婆
海の機嫌読むのが確かだった亡父
うれしいことは大きな声で言いました
太陽を飲んだが海は暗い闇
笑い声皆元気ない朝だ
百万の声が届かぬ主の下
大幅な値上げ絶対ない年金
産声を聞いて安堵のコウノトリ
ソプラノの声で鏡と話す妻
我が家にも元気をくれる呱呱の声
罵声浴び我慢重ねて秘書をする
よそゆきの声で頼んでみましょうか

一 粹
天 翔
茶 子
公 子
美 恵 子
蟹 郎
た ぬ
菖 子
幸 安
敏 子
真 理 子
振 作
雅 女
彰 夫
節 子

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

アプローチ君のハートが射抜けない
げんこつと僕の間にも母がいた
旧姓の印籠かざす妻の乱
ろくすっぽ答弁できぬ安倍総理
まだ傘寿ホップステップしてジャンプ
ろくすっぽ汗もかかずに七光り
不器用で旧姓のまま焦けてます
プロポーズまでの手順がむずかしい
旧姓が取れぬ職場の局さま
旧姓にこだわり生きる婿養子
旧姓の逃げ場なくなり添いとげる
ろくすっぽ給料入れぬぐず亭主
ろくすっぽ敗戦知らぬ若者よ

善 平
清 信
紀 美 江
凱 柳
金 祥
彰 夫
八 郎
一 瑤
寿 之
隆 浩
敏 限
無 限
洋 々
無 限

化学者と宇宙アプローチが続く
熱風に向かう木の葉サラサラと
道祖神いつも野花が手向けられ
金もない名もないだから手向かわぬ
手向かつて育ったキユウリよく曲がり
旧姓の頃のウエストSでした
勝負服胸の谷間を見せている
ろくすっぽ金が無いのに見栄を張り
アプローチしそい愛が伝わらぬ
まだ恋はできそう唇は熱い
あなたまだ旧姓なのと言われたわ
手向かつていい事のない税と医者
手向かつてあの日の母は泣いていた
旧姓を巧みにつかう古狸
ママゴトの旧姓はみな孫を連れ
病夫を看るつきつぎ花の季も過ぎて
テポドンに向かう用意ありますか
御局に向かううんてい度胸
手向かつてみてみよ勝つ目のない芒
お金なら何とかします閻魔様
手向かうな神にたたりがつきものだ
まず一杯のんで手向かうことにする

とも湖
一 平
山 節 子
美 佐 枝
真 理 子
み つ こ
ふ み か
八 千 代
楓 花
三 千 代
鐘 馥
昌 鼓
幸 子
回 春 子
蟹 郎
美 恵 子
妻 子
天 翔
稲 佐 嶽
野 蒜
一 粹

京都塔の会 山田 葉子報

人魚姫のつもり夕陽の露天風呂
競馬場出かける時は勝つつもり
痛いのに加齢ですなと言われても
スマホ自在に操って九九いえぬ
地図を頼りに自分探しの旅にでる
見いつけたチャンス逃さず捕まえて

哲 子
五 月
弘 子
美 津 子
弥 昭
生

病氣とは平和共存するつもり

にこにこ世間あざむくペアルック

年の差婚ちよつと無理あるペアルック

必ずに至る努力が勝利呼ぶ

必死に生きた証オヤジのごつつい手

笑顔なら必ず解けるわだかまり

青春のフオーカス熱い甲子園

飢えてもミサイル上げる金はある

マウンドに通訳連れて行くコーチ

石段を降りてカッブル西東

一対がとつても似合うさくらんぼ

大輪を咲かすつもの土を掘る

恋のつもりか嫉妬の気持湧いてくる

若々しくしてるつもり背のまがり

走ってるつもりばらばら脳と脚

化粧より必死の顔が美しい

嘘・手抜き必ず見てる昼の月

何があつても必ず朝はやってくる

炎天にポトルいっばい水を持つ

あの世でもロマンチストで居るつもり

必ずの裏に多分という本音

妻よりも少しお先に逝くつもり

生涯現役立派に生きた一〇五歳

メーク落しわたしひとりの顔になる

葉子

ふりこ

満子

元一

公子

求芽

北舟

多津子

弘志

千賀子

光久

文代

宏子

英旺

則彦

正彦

忠子

紀乃

保子

かずお

泰夫

義昭

勝弘

俊雄

煩惱の鱗まだまだ落さない

満点の父の背追つて五十点

五割引きいつもとれだけ稼いでる

水割りの底で揺れてる今日の悔い

目一杯生きて明日の風を待つ

いつ見ても笑点人を笑わせる

言い訳の落としどころを間違えて

点と線夜空にはつと大花火

点と点線で繋いで生きている

欠点を重ねてみる僕がいる

点かせぎ今日も蛸焼買うてくる

また次点達磨ウインクしたまま

一点の非も無き青い青い空

風起こす気持ち少しは残ってる

片隅で点火の時を待つ野心

今朝の蟬生さる遊べとかりたてる

バカ野郎父の拳固に飛びあがる

句読点打つて明日を生き直す

女子力を喋る食べるで維持管理

どん底で分かった人の裏表

国民の怒り沸点越えている

過ぎた日を揺すれば悔いが落ちてくる

偽りの答弁してる顔がむ

子供の目きさら疑いを持たぬ

堅坊

寛昭

節子

洋志

野鶴

高志

弘委智

直樹

和夫

縣侳

実

あさ子

北舟

志華子

修

郁夫

榎香

ばっは

満洲夫

榮子

星雨

博

義昭

千恵子

席題にまたも頭を掻きむしる

心配を掻き消す手立て迷ってる

刺る前のヒゲで掻いたら気持よい

笑つても煮え繰り返る腹の中

答弁はいつもうらはらアベ総理

心ない美辞麗句などよう言わぬ

付度ではかり知れない腹の底

謙遜はせんなんて言うけど類そめる

謙遜はせんなんて言うけど類そめる

話しては途中で言葉つひ挟む

遺す言葉さりげなく挟む

アルバムに実らぬ恋を挟み込む

オバサンが両側挟みつばとばす

逃がさんぞと両脇かかえ三次会

更衣室小耳に挟む異動先

挟まれる位置になつたと社の人事

冗談を挟むと丸くなる空気

サッカーのハーフタイムで観る野球

サツカーのハーフタイムで観る野球

沢山ハーフサイズで採めている

仏壇の母といつても半分っこ

ベターハーフ失くして気付く深い穴

期待しようハーフの嫁がやって来る

欲枯れてハーフサイズの暮らしぶり

武臣

弘委智

東風

栄子

いさお

シマ子

恭昌

篤

ルイ子

ひさ乃

弘子

一步

実

裕弘

あや子

楓楽

真佐子

あさ子

郁夫

国和

更紗

俊雄

志華子

昌紀

紀乃

柳右子

たもつ

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

南大阪川柳会

津守

柳伸報

柳伸

猛暑日の風に揺れてる百日紅
風水害東京五輪の邪魔をする

直子 忠昭

川柳塔なら

大久保眞澄報

裏門を諭吉でござると開けさせる
この猛暑地獄の釜の蓋が開く

和夫 盛隆

おぼれそなる僕の心は半開き
今のごころ言葉の海で開ける辞書

貫優

親展に深呼吸して封を開ける
ジャンプ傘開く他人のまままでよい

よう子 完次

開けっ広げの人にもあつた涙壺
仏壇を開けるとメロン熟れている

萌子 薫

おもてなし財布と心開け広げ
心配をかけぬ仮面の目がうるむ

史郎 朝子

遣された夫の仮面守り札
ウエディング私の仮面は美しい

敬子 千代美

アバンチュール恋の仮面の罪つくり
ちらちらとぞく仮面の裏の鬼

ふりこ 成子

議員さんバワハラ不倫二重婚
新能能に見る人生図

美代子 勝弘

四島を返せと波が打ち寄せる
宝くじ買って稼いだあぶく銭

恭昌 賛郎

ざぶざぶに濡れても母は来てくれる
川柳でざぶざぶ洗う老いの日日

辰雄 堅坊

この暑さ水をかぶって大ジョッキ
黒い金洗って青天に晒す

崇明 國治

ざぶざぶと洗う心の好奇心
泣いたつてしょうがないから洗う顔

甚之市 理恵

鳴き砂の私語を聞いてる土踏ます
真夜中の素足で逃げた震度七

のぶよし 紀雄

土踏めば足の裏から湧くフアイト
限界の裸足で挑む心意気
タンス預金開けたら金利とられてた

富子 恵美子 眞澄

川柳わかあゆ(鳥根)

松本はるみ報

翔びたかる澄んだ青空折鶴よ
まあいかどちらが勝つか鶴と亀

はるみ

好きなの食べてちらび生きたいわ
炎天下応援傘も色あせて

好栄 ハル子

それなりに理由もあるうがゴミにされ
鉛筆に書かせた愚痴はとどまらず

安子 かつ子

胃カメラがもう止めなさい酒の席
ロブスターもザリガニもよく分らない

恵美子 昌

川柳茶ほしら(愛知)

関本かつ子報

友だちにはじき出されて引きこもり
友達と阿吽の呼吸旅に出る

雅美 まみ子

べろべろになつても帰る城がある
悪友の刺激一番面白い

三樹夫 遡行

親友は母親だった仏間の灯
アルビノも同じ種のうち区別せず

美千代 かつ子

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

幽霊に抱かれて寝たい熱帯夜
配膳車待つようになり抜糸する

大鮎 茶子

適当でいいが一番難しい
戦前の亡霊背負う改憲派

孔美子 鈴

適当に呼んではいかん救急車
適当な丸がいつばい描いてある

照彦 盛桜

長寿の相と長い眉毛を誉められた
ゴロゴロと惨めな過去を吐いてみる

重忠 小鹿

この暑さゴロゴロしていいですか
町内の幽霊役は決まってる
偶然だ奇遇ですなと調子者
誉められた事じゃないがと自分誉め

裕文 草文 文道 蟹郎

適当にあしらうと仲間も逃げる
ゴロゴロと寝たり起きたりして生きる

ゆり子 実満

ゴロゴロと転ぶ煩惱踏んで行く
腹の虫ゴロゴロ軽くダイエツト

すみれ みさ子

適当に違う物差し使い分け
運転の免許返納褒められる

満 妻子

誉めるから同じ物を又作る
適当に飲むか銚子のあかね空

和子 富久江

幽霊も帰省中です盆三日
踏まれても咲くたんぼを誉めてやる

綾子 かおる

腹時計時間になると合図する
木戸銭を出しても見たい怖いもの

京 恒

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

生真面目に会社背負つてる気でした日
退職金の質問も出た入社式

勝 則彦

わが身より社の行く末を案じ喜寿
ゆつたり心の削らぬよう生きる

黒兎 桂子

ピーラーで大根足も削りたい
心まで削る思いの片思い

奈津子 長一

着もしない筆筒の和服今じゃゴミ
きまじめで縦は縦だという強気

久子 郁子

北の拉致ただ黙してる遺骨あり
君と居て楽しカンバイ今一度

孚彦 正子

期待され頼りにされて胃が痛む
柳童

柳童

帰る子へ開かずの部屋を片付ける 春代
楡皮茸もう出来ないよ洪水で 信男
世渡りがやつと上手になる背広 美佐子
「また来るし」と二歳の孫がハイハイ 一弥

ブラザ川柳(大阪)

梶原 弘光報

故郷は満開夏の甲子園 淳司
白鵬ほどやってみなさい猛稽古 弘光
猛烈に背後で怒鳴る仮面女子 修
甲子園猛虎応援四万人 政夫

このハゲ一罵声猛烈真由子節 克三
八月六日激しく蝉の鳴く八時 清乃
猛烈なゲリラ豪雨が町を飲む 悦夫
クネクネと擦り寄る夫のむず痒さ 文子
雪囲い縄結う父に見惚れた日 和代
日本髪結った写真は母の母 五月
三つ編みのマドンナは今へアピス 一彌
おみくじの吉凶ゆれる枝の先 正子
結び目が綻び出した遺産分け 久美子

川柳ささやま(兵庫)

北澤 桐民報

酸性雨アジサイ色をかえていく かほる
マドンナも飾らず詛るクラス会 哲男
金よりも農に捧げた汗みどろ 勇
五百円今日も句会が楽しめる 真由
知らんぶり犬も食わない何とやら 開子
部屋履きは若向き買つて軽い足 幸子
的射てるおそらくそれが本音かも 照代
人の顔千差万別見飽きない 美智子
返事なき兄の遺影のいい笑顔

朝ドラの昭和がぼくに丁度よい 善輔
うしろにはいつも神いる笑つてる さゆ子

川柳あまがさき(兵庫) 大浦 初音報

惜しくない命と言つて葉飲む 雪菜
ガン手術命が惜しい我慢です 柳明
夏休み虫捕り遊び命知る 修平
猛暑です抹茶アイスが一息を 富夫
命つきる線香花火みるごとし 初音
腹八分食を減らして長く食う 健二
お国訛変えずに個性うけている りこ
天命に医者が余計な腕を見せ 英坊
ほやくほどますます寿命延びてゆく ひろ介
すつびんに自信あるからすつびんで こみつ
振らなけりや社長夫人になれたのに 菊江
育毛剤変えてもはえる気配なし 花門
燃え残る命で良けりや預けまじ 晶子
自信がなげだかいつも没になる 紀恵
命までかけるお人が現われぬ 靖鬼
たくさんの命いたたく朝の膳 紀華
帰る家覚えていればよしとする 章子
民泊へ衣替えした京町家 正和
105歳生きた証が心の灯 千賀子
最後まで現役だった百五歳 祐康
一瞬で遺品に変えたエノラゲイ 宏造
命名は一字受け継ぐ我が家系 美籠
負けるなど鼓舞してくれる蝉しぐれ ヨシエ
捨てる手を止めるキレイな包み紙 かずお
髭剃つてください家に居るときは 耕治
髭つすぐに生きる自信はついている 芳香

乱心の妻がヴィイトンを買いあさる まつお
お取り寄せの銘茶へ百均の湯呑み 公子
かあさんにありがとうです生まれた日 ひとみ

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

損得は転がし昼寝仏の手 蜂朗
日曜ごと老いたる父へ博多より 實
長病みの姑に千代紙強請られる 高明
景気波のがしはせぬと若旦那 節子
徘徊のアテは立ち読み週刊誌 四郎

はびきの市民川柳会(大阪) 永田 章司報

空蝉よやがて私も地に還る みつこ
行列の中で謀反を抱いている ダン吉
思考力もやる気も飛んで行く猛暑 大子
やがて来る冬へ鍛える心技体 いさお
種蒔いてやがて花野にする矜持 寿之
けちれないクーラー代とアイス代 かつ美
避暑にきた北海道が暑すぎる まつお
やがて散る花にたっぶり水をやる ヨシ枝
散る花を見ている人も散る運命 朋子
天国への行列にまだ入らない 雄太
遺産無いやがて頼むと子に託し さくら
良く鳴いたやがて消えゆく蝉しぐれ アヤ子
結婚するドバイで住むと言うお嬢 シルク
あのとときの輝きいまも身をつつむ 美代子
向日葵と太陽並べ画く園児 美喜
しつかりときつちりコラボして不滅 壽峰
配給の行列並んだ戦中派 真
目標に向かって進めやがて成る 清

妻のお陰お店に客が並んでる
野辺送り思い出抱いた人の列
やがて来る終末まずは遺書を書く
御仏の元へやがてはいくこの身
やがて秋便りを持って来たとは
とりあえず行列の中私居る
暑い日に唸る喉越し一気飲み
被災地の乱れぬ列に和の誇り
戒名を一つ残して軽い骨
熱中症帽子をかぶれ水を飲み
若い芽が九秒台へあと一歩

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報
国会のえんま大王忙しい
せいっぱいその気持には答えない
うそなんかついてませんと嘘をつき
答弁がしどろもどろで妻にバレ
楽しんであとで笑えるうそがいい
これなあに孫に答えるこんくらべ
病床の母に笑顔でうそをつく
妻からの相談先に答えあり
思春期は向けた背中で答えてる
うそばれる度にバッグを買わされる
時々はスパイス代りにうそを混ぜ
真実は嘘で固めた裏の貌

川柳塔さかい(大阪) 内藤 憲彦報
年金前もやし炒めと冷奴
困ったと言ってる割によく食べる
本当に困った時は黙ってる

一文

千鶴子

久仁子

高鷲

泰子

フジ

洋一

ちづる

欣之

ひろ介

章司

薰報

やすの

笑子

泰子

薫

昭好

風

あや乃

正太郎

敬子

勇ちる

勇太郎

亜成

朝子

好子

さくら

いざの時困る近所はみな後期
相部屋の見舞に困るでかい声
困っても顔に出さない気丈夫さ
長寿国支える税で困ってる

猛暑続きお墓の花もすぐ枯れる
一人立ち出来ぬ子供羅針盤
困らせてくれたと母は父恩ぶ
お飾りの扱い困る名譽職
ブリーズチョコレート初めての英語
どうぞどうぞなんて言われてへれけに
世界中どうぞとゆずれば戦さなし
譲られても歳の順では座らない
いじめられ川を流れて行く河童
生きるため脈うつ静と動の川
楽しみだ三途の川のおもてなし
二人なら飛び越えられる川の幅
ふるりの川思い出と共に歌が出る
平和とはこの川の音樹々の色
永遠に原発の罪流す川

世界から女消えたら地獄だろ
妻が逝き酒のさかなも消えました
高台のお屋敷今じゃ困りもの
マスコミに知れると困ったことになる
寄ってくる男さんと金が無
福々し苦勞知らずが心配だ
夫婦辛苦勞を共にした結果
不老不死の薬飲み過ぎ死にはった
吹つきろう暗い話ほしない主義
風鈴と葛切りで涼夏夏しのぐ
富士の樹海クマと出会って死んだふり

玄也

澄空

かりん

憲

八千代

志津子

和夫

雅美

みつ江

ばっは

廣子

憲彦

敏治

淑子

ゆみ子

ひろ子

舞夢

誠一

みつこ

堅坊

五月

時雄

としお

玲子

ヨシ枝

光雄

愿

扶美代

妙子

清

不機嫌をくすぐってみる新酒出す
夫婦というくさりの重さ知らされる
唯教

二人だから捜してくれるかくれんぼ
棚の隅ポトル煤けて独り言
山動く人の心も又然り
夢でしか会えぬあなたのアドレス帳
お花畑の景色を秘めた登山靴
平和だな女房イビキをかいている
文学の豊かは語彙にオノマトベ
私の命を繋ぐ微毒薬
あせらずにジツタリ待てば来るチャンス
泥濘の中でもがいている孤独
必要に迫られポロリ出た本音
不思議だねチャンスの後に有るピンチ
祈り祈りの真心胸に花結び
優しさを隠す口元一文字

盆踊り夜空のネジを巻くチャンス
常夏の島に帰らぬ亡父眠る
ねじ一本緩め人間取り戻す
沸点を越えたか涙涸れている
沙羅の花梵字の捨身白さ増す
崖つぶち何ぼか踏んだ手長猿
一粒が命のニトログリセリン
必要と言った私と言う器

世紀子

唯教

伸雄

正治

田鶴子

常男

隆充

清

朋子

慶子

壽峰

高鷲

澄子

武人

恵

一文

あかり

奏子

寿之

アキ

よしみ

晴美

欣子

森子

珠生

一歩

川柳大阪

山崎 珠生報

今日もダメ幾度見上げた引き揚げ船
まだ八十路百五歳までははるか先

まだ行くの俺はいいけどほな行こか
 おしゃべりがまだまだ続く散歩道
 段取り悪もう昼過ぎやのに掃除まだ
 警察にも権無視がまだ残る
 初デートもまだかまだかと待ちぼうけ
 地獄には空きはおまへんまだ来るな
 戦いを避け九条の叫びよ
 一手先読めず流した負の涙
 肉食の妻にお茶漬けでは勝てん
 異文化に触れて目覚める好奇心
 C.T.に輪切りにされて血はでない
 満月が癒してくれる熱帯夜
 長い無沙汰へ里の門戸が狭くなる
 被爆者の心逆撫で視野狭い
 狭くとも心許し友となら
 手狭でもそこそこの夢持ち合わせ
 大宇宙地球はチリの大きさか
 狭き門くぐって真価試される
 文化の日焦がれ夢見る叙勲待ち
 大阪では粉もん文化幅きかす
 若者はころ寝マンガの文化の日
 紛争をするなどデモる文化人

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

夏休みくれと肝臓ごねている
 税金で優雅に渡欧バツジ族
 じじばばは一年中が夏休み
 夏休みでんわやんわの孫が来た
 忙しい主婦にも欲しい夏休み
 良かったね塾も部活もない休み

鬼一

勝弘 芳香 美世子 聖坊 克己 朝子 美籠 まつお かよこ 照月 賢子 紀雄 わこ 万紗子 ひろし 雅美 俊雄 福貴子 比呂志 失名

世界へと飛んで行きなと子を放つ
 傘さしてたんぼは種は風まかせ
 逸る気が飛ぶほど尻を蹴つ飛ばす
 風船が手から離れた夢ひろげ
 黒塗りのページで飛んだ会議録
 見る前に飛んだ人生素寒貧
 好奇心先ずは飛び込む週刊誌
 るくでなしめためた弥次るため議員
 ためたの原子炉つけば国民に
 ためたになつても生きる元氣出す
 ためたな暑さに脳も焦げそうだ
 ためたに愛の一言出た効き目
 八十年落ちぬ汚れがべつとりと
 べつたりと座って風の通りみち
 鴛鴦に習う夫婦の倦怠期
 腰抜けてべつたり座る震度六
 べつたりと夫の手足となつてきた
 べつたりと塗ってもらった村芝居
 べつたりと寄り添われたら窮屈だ
 めためたでハッと気付けば救急車

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

悠然と故郷の山は変わりなし
 押させてはならぬ最後の核ボタン
 青々と水をたたえている瞳
 こともあるうに青い瞳の嫁が来た
 悠られても慣れたものだ悠然と
 悠然と構えておれぬ平和論
 悲しみは終い笑って明日生きる
 少年の瞳に今も焼野原

のぶ久

紀美恵 日出子 萩江 大鯨 美知江 野蒜 祐子 智恵子 茂夫 瑞枝 龍枝 玲子 由紀子 雄大 康子 醉芙蓉 恭子 妻子 風露 照彦

うそひとつ繕うて嘘が束になる
 しみじみと命を思う蟬しぐれ
 最初まで人間らしくほくらしく
 悠然と楽しむ量は落ちた酒
 悠然而しむ量は落ちた酒
 朝帰り言い訳をする目が泳ぐ
 戦には壊させないぞこの平和
 最後の被爆地の願い鐘が鳴る
 選手宣誓見据えた瞳のさわやかさ
 悠然とほら吹き民を煙に巻く
 飢餓の子のつぶらな瞳胸を刺す
 ゆつたりと構えて富士は今日も晴れ
 地球から最後通告じわじわり
 しらを切り内閣かばい出世する
 泣き笑い共に紡いだ赤い糸
 最後尾に付けば事情がよくわかる
 記憶ない人が出世をする不思議
 迷う子の眩しき瞳信じよう
 千羽目の鶴へ祈願のありつたけ
 核炸裂そして誰も居なくなる
 お笑いをサブリメントにして暮らす
 笑った日いくつあったか鶴彬
 紆余曲折あったが最後には笑う
 飢餓の子の瞳に僕ははどうつる
 硝煙が子等の瞳を曇らせる
 あの瞳を前に嘘などつけますか
 いつ見ても構え悠然暮
 預貯金の名義変えられ死期を知る

長柳会(大阪) 辻村 ヒロ

紀乃 純甲 克己 聖坊 珠子 みつ江 英夫 満知子 蕉子 ひろ子 いさお 鮎子 一行 福貴子 敏子 一歩 ばっは 朝子 はな 直子 ダン吉 浩子 穂夫 信二 眞澄 たもつ 遠野

紅白のひもゆるまず五十年
オバチャンのランチお喋りは姦しい
猛烈も残業さえも消える辞書
失恋し溜息漏らす孤独感

アホやねん甲斐性無しでも良いと惚れ
にわか雨猛暑に不意の贈り物
壊れゆく猛烈な水息をのむ

おもしろさ見つけ引き出す人が好き
猛烈に逢いたい人が帰る盆
的を得た言い訳夫知能犯

爆買いと一緒にマナー買って行け
モノナリザの微笑は永久に謎残す
残り福当てにしていたのに外れ

的を得た意見をのべる老人会
宝くじの夢にむなしさだけ残る
悔るな声なき声の底力

記憶にはございませんとしてやられ
猛暑避け友と歩いた上高地
終点はヒマワリの海路線バス

退院日嬉しい髪を結び直す
減私奉公視点変えたら見える空
二人三脚悔いを残さぬよう生きる

ピカドーンが聖母の顔に酷い傷
お下げ髪夕焼け雲よ遠い夏
夕焼けに心が染まる頬染まる

生きのびて今の平和は宝物

川柳さんだ(兵庫)

田中 章子報

思いつきり転ぶ青空笑つてる
転けるなどだけのメールが息子から

ヨシエ 正和

弘美

由夏

純風

洋二

福子

一男

美子

旅人

幸子

けい子

孝

光弘

ともこ

輝子

隆彦

辰男

正博

たけし

和子

マサ

ふみ

孝代

淳司

直樹

登美子

正美

この腕をしつかりお持ち僕が杖

よく転げるだから一人で出掛けない

お帰りとホームでニッコリ老母の顔

帰省する夢も挫折も積んだバス

帰省する度に居場所が狭くなる

バス停に母が待つて居る息子

盆休み風のように来て去る息子

ハートまで冷やさぬように気をつけて

恋しいアイズノンでも熱冷めぬ

民主化を冷やす文字の獄の闇

主人とは一緒に墓に埋めないで

隠れ宿他人のそら似肝冷やす

冷房が寒いとせいたくなはなし

ポッコリと落として割れた梅の壺

年の差婚ぼっこり出来た王子さま

無芸大食ぼっこりおなか自慢です

べちゃばいもポッコリ見せる下着技

ポッコリと土盛る子等の蟬の墓

被災地のぬるぬる泥に泣かされる

ジュンサイが美肌に良いと喉通過

蛸塩でもまれぬるぬるそして茹で

ミシユランの星よりうまい玉子かけ

自慢話はヌルヌルとへばりつく

お願いよもつと呑んでと孫が注ぐ

暑い朝孫と黙祷八月忌

将棋ブーム孫と手合わせ夏休み

ええおっさん理由も聞けない丸坊主

ひまわりに元気を貰う夏猛暑

幸福度アップさせてる笑い皺

ひと夏の恋向日葵が燃えている

優子

隆

雄太郎

修平

雅尚

野薫

利子

ひとみ

博

哲夫

花門

義憲

耕治

歳子

順子

ひろ介

えい子

美籠

キヨミ

俊昭

千津子

祐康

千代美

加代子

一子

善弘

宣子

つな子

遠野

周三

喧嘩する相手が欲しい一人っ子

磨いても光らぬけれど丸い石

八月忌絞り出してる蟬の声

三色のダンゴの味がみな同じ

古書店でかすかに触れた森の息

ご先祖の畑を森に返します

捲ります明日のページもオンナです

アルバムを捲ると若い顔に会う

一枚を捲る素顔が見えてくる

掛け布団捲って新しい朝だ

人間を拒み続ける鳥の森

花びらを捲って好き嫌い

想定内ひと皮めくるくらいでは

介護歴めくれば母の微熱から

何事も遅いのろいが得意わざ

日捲りを継ぎ足しながら生きている

若者へ語ろう平和反戦史

ひと周り森が太った雨あがり

太陽と遊んで星と酒を飲む

ページを捲る今日の無口はなお無口

時として森へ入ってみたくなる

再放送野際陽子が若すぎる

過去を捨て新しい過去つくります

家計簿をめくって見る金が飛ぶ

蝉しぐれめくる暦もあと半分

一日に一度は捲る医学辞書

年下の友が多くて気が若い

ストレッツチ若いつもりで腰痛め

光久

哲男

恭子

けいこ

宣子

芳光

厚子

風露

雄大

石花菜

小鹿

寿代

大鯨

幸子

昭子

紀の治

照彦

くにこ

芳山

美ッ千

富隆

正唱

道男

鈴野

久子

規雄

コスモス

清明

姫たちは坊主めくりがお気に入り 完 司

六甲川柳会(兵庫) 市坪 武臣報

原爆忌あの日もあつい朝でした
盃蘭盆会過去帳そつと読み返す
顔上げて君はこんなな美しい
豪雨被災凍と立ち上げ絆増す
五センチの鯛の料理を頼む孫
風鈴が猛暑の客のお持て無し
亡き母のそっくりさんに街で合い
日傘にも水浴びさせる猛暑かな
スタートの時計は待つてくれません
落葉の風情と掃除抱き合せ
引き算の答えあわないウオーキング
この暑さきれいに咲くはサルスベリ
紅葉して散つてゆく葉であればよし
お盆には父が遺した掛軸を
よちよちのあんよは母の手にゴール
路地裏の線香花火小宇宙
スタートはリングが木から落ちたこと
大空へぐんぐん伸びてゆけ双葉
ひこばえが生きる生きると背を押す

川柳塔まつえ吟社(高根)相見 柳歩報

灯台のあかり海馬は眠ってる
念押したのんびりの人まだ来ない
のんびりとしたいが貧乏性である
のんびりは我が家の指定席が好き
のんびりが性に合わないアリのむれ
耳の穴グチがとぐろを巻いている

キャンペーン秘密兵器は会話術
一人では話もできぬ出かけた
ここだけの話に足も羽根もはえ
激辛の話を呑んで胃腸薬
長話お味いかがと問うて来る
ネガティブもポジティブもある昼下がり
昼の酒飲んで男は心太
わたくしとどこか似ている昼の月
使いわけ飯と昼との顔・顔・顔
貞淑な昼の夜面を外す夜
猛暑日りの十二時独りギョーザ食う
褒めちぎりその気にさせる誘い水
暑いから魔法の水で酔うとする
もつともつとおいしくなれよ水道水
その話し水に流そう手を握る
きつとある広い銀河に水の星
最期の砦実は一億隠してる
人としてなんでも守る理想かな
暑い日は雲が太陽守っている
守る程財も無ければケセラセラ

哲子 初物のフルーツ先ずは神様に
俊子 モノ溢れ座る場所のない子の下宿
あきら 病んでいる時こそ真の夫婦愛
德利 神さまも話相手をお探しか
とも子 愛情つてなんとやさしい言葉だろ
寿代 初恋の思いは遙か青りんご
弘充 あの時の友の助言で今が有る
雪代 北方四島祖国恋して寄せる波
涼子 怖がりの孫槍ヶ岳制覇した
瑞人 美女になる呪文をかけて化粧水
草庵 裸だと王に教えてあげてしよう
ゆき 親も子も気づかい合った生活費
輝山 始まりはいつも本気の習い事
静枝 フルムーン空気になつている二人

翠洋会(大阪) 佐々木清作報

深呼吸ひとつ形は整った
友情から恋愛になる青春譜
同期生会社はなれて友となる
親友の死に思い出の糸からむ
車間距離とって友情長続き
みつくすじゅうす勿体ないが詰まつて
いじめつバナナにぎればすく笑う
ケーキにはイチゴ無しでは売れません

良子 赤蜻蛉季節を先に教え来る
夢 秋はすぐそこガンバレと子のメール
公平 日の本の四季はきつちりめぐりくる
蕉子 四季折風情楽しみ酒を酌む
楓 嫁入りの着物が米になつた母
理恵 古里に軍服似合う祖父の遺影
日の出 慰霊と不戦素朴に思う終戦日
善之 活字よりいつてみなはれ広島へ
空戦争始まりそうな米と朝
竹槍で守れる筈のない戦
もの忘れ追えば追うほど逃げていく
へなへなのシニアゴルフは寄せ上手

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

逃げるから追いかけてくる督促状
外堀りを上手く埋められ逃げられぬ
天変地異逃げる準備をしておこう
病み上がりへなへななの祝い酒
強い男へなへなへななの祝い酒
へなへなの女性大臣見すかされ
夕茜ひぐらしの中葉参り
額縁と写真と食べる盆の昼
雨傘の所在なくしたこの猛暑
語彙採し辞書に頼つて捻りだす
渋滞に物語りあり里へ向く
年金のお蔭で出来る子と別居
はだしのゲン生きていたなら八十路坂
君の夢すべてに拍手送ります
家じゅうのクーラーつけて孟蘭盆会
逃げないで生きる黎明きつと来る
へなへたとポルトが崩れ日本銅
七十二年核廃絶は夢の夢
暑中見舞硯に混ぜる蟬の声
逃げ方もいろいろある将棋

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

洋次郎 敦子 光久 遠野 光こ 光子 弘子 恭子 千代 宣子 靖夫 哲男 勝弘 ひとみ 盛夫 健彦 邦果 野薫 伯備

子が書いた妻の絵ちよつと美人すぎ
亡母恋う一日だけの絵蠟燭
絵にしたら心の歪みあらわれ
首傾げて見ると目が合うピカソの絵
だまし絵の中で迷子になっている
ヒロシマの絵には書けない物語
サラリマの運びやばかり五十年
涼風が味覚を運ぶ秋の膳
想い出も一緒に運ぶ雲樞車
一輪車姥捨山の遠いこと
赤児抱きポストに運ぶコウノトリ
あの世には急いでならぬボチボチと
毎日がボチボチですな生きること
北台風ボチボチ日本列島に
ボチボチと秋の旅を決めようか
窓際族ボチボチ来るぞ肩叩き
瑞風もボチボチ消えた新鮮味
ガンガン照る太陽に恨み節
ガンガンと迫ってくるよ老いと死が
ガンガンと敲き大工の見せる技
ガンガンと言いたいけれど釈迦になる
天才とカリスマオーラがぶつかる

岸和田川柳会(大阪)

石田ひろ子報

自画像は実物よりも美人がいい
美術館出れば夕暮れ知らぬ街
孫からは絵文字ばかりでメールくる
絵空事並べ空想家の誇張
生きた事小説なるが絵に書けぬ
虎の絵を描くとだんだん猫に化け
独狐峰絵にすれば皆富士に似る
寄り添った影絵を照らす遠花火

残り火を炎に変えて生きてやる
ワタクシは太陽系の宇宙人
魂を炎に込めて焼く陶器
水平線ジュツと夕陽の沈む音
その昔太陽だった古女房
付度をお天道様はお見通し

道子 美ツ千 大鯨 龍枝 芳光 石花人 岳人 たけ代 三津子 野蒜 みち子 久芽代 美美子 節子 貴恵 清 照彦 公恵 悦子 滋 美知江 くにこ

今を生き炎のように輝こう
いらいらの犠牲になった子ら哀れ
券売機の前でもたもたせんといて
いらいらの元を正せば金のこと
いらいらとさせて相手の自滅待つ
いらいらを鎮めるための猪口二杯
いらだつと私言葉に刺が出る
世の乱れつものいらいら不安の日
戦せぬ国を皆んなで讀えねば
旨いなあこの肉じゃがに愛がある
恩人の柩を担ぐ走馬灯
嫁さんを讀えることは探してる
生涯を現役立派日野原氏
自然力讀え畏れること忘れ
癌の有無前置き長い担当医
三猿のポーズで世間泳いでる
核禁の署名をしない政府持つ
敵に塩私名のポーズです
制裁のポーズだけする国がある
幸せのポーズ見せ合うクラス会
死んだふりとても上手になりました
太陽が三つあの朝のヒロシマ

豊中もくせい川柳会(大阪)初代

正彦報

苦手相手いつもやられる甘い脇
麗人の甘い言葉にのる余裕
悔んでも悔みきれないあの一球
甘い嘘一気においしくなる紅茶
ねえあなた何を探すか忘れたの
探すけど探してくれぬ青い鳥

のおお カズ子 英夫 忠太 白水 いさお 珠子 一子 隆昭 まつお 三成 律雄 和美 みつ江 笑司 ひろ子 義泰 清 玲子 喜八郎 ダン吉 武彦 健三 求芽 英坊 堅坊 肇

少年を夜店の中に探しゆく

一泊で日帰りコースこなしてる
将来に甘い希望の持てぬ子等

儲け口他人に教えるはずがない
平和の日つくっていつも未完成

爽竹桃盛り平和の鐘鳴らす
美しいままで降りましょ八十路坂

それごろん甘い話は泥の舟
ゆううつな今日は終れと早寝する

北米日国のトップが皆おかしー
救助隊かすかな声も逃さない

身構えてしまふ封書で来る手紙
あれそれと眼鏡を探す老い二人

ありがたや平和な国でする昼寝
探しものわたしだけではなないみたい

張りつめた気分をほぐす咳ばらい
ホラそこに指差す方を見てごらん

丁寧を書く履歴書にある祈り
気分屋の美女は涙を使い分け

平凡な街でのんびり子が育ち
八起き目に気付く夫のやさしさに

たかが水そんなに甘いはずがない
ほんとうの私を探す迷い道

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

ゆつくりと我が身の丈で生きて来た

人波をスマホ片手にご迷惑

過ちも成功も無し四大家族

本気度が増したアラート北の核

逆転の構図敵を泳がせる

真理子

多美子

美津子

健二

美佐子

きらり

久子

玲子

見清

玲子

義昭

美籠

則彦

満子

葉子

正彦

昌代

黒兎

雅美

千鶴子

美智代

眞澄

ヨシエ

国訛り距離近くなる繩のれん

人生に泳ぎ疲れた介護棟
樹酒の正味溢れた酒の高

生まれつき泳ぎ上手で世を渡る
遠き日の手旗信号狼火台

正直に生きて寡黙な床柱
母の目は子等の進路の羅針盤

そこそこの距離がとりもつ嫁姑
お財布が踏み絵のように落ちている

遠くまで手まねで合図手話の友
約束の合図果たせぬ遠花火

ポケットに入る程度の幸でよい
幸せに生きる笑顔のVサイン

そこそこのしとかなきつと火傷する
そこそこの幸せでよい蟻の汗

そこそこの実力あとは運の良さ
そこそこの思い人生終わりたい

夏の河渡つてみたい夏の夢
まだ負けぬしたい夢ある古希の坂

がむしゃらに泳ぎ余生の岸にいる
あん餅の正味を自慢する老舗

丁寧に生きるほかない蝉しぐれ
大かきが出来て天下をとった顔

生き方の証しのように節くれる

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

九月三日楽しみに待つご婚約

老いの身も期待されてるポランティア

少年の瞳に光る期待の芽

期待してくれた親にはすまなくて

清

高鷲

壽峰

忠央

高志

寿子

弘委智

弘一

ルイ子

麗

郁夫

賢子

朝子

洋

さち子

修

祥昭

武彦

堅坊

あさ子

鈍

博泉

恵子

期待され重い荷物を背負う日々

阪神は若手の星がたんといる

期待などしないで私あんなの子
大酒を飲めば荒波打ち寄せる

ガラケーでハアハア波に乗れません
一強の余波に年寄りアッブッ

八月の波に漂う鎮魂歌
国民に波風立てる共謀罪

ミサイルで世界に波紋巻き起こす
ウエーブが起こるたまにはトラも勝つ

びったりと波長が合って金婚譜
三度目はばれないようにうまくやる

三度目で結婚式も馴れたもの
三度目の会社も辞めて無職です

第38回 桜井市民川柳大会

日時 10月15日(日) 10時開場

会場 桜井市まほろばセンター 2F

会費 1000円(発表誌・軽食・星)

宿題と選者

「匂 う」 佐藤 辰雄 選

「ブレイキ」 吉田 栄子 選

「団子(連記)」 島岡美智子 選

「器」 植野美津江 選

「流れる」 池 森子 選

「ゆらゆら」 大西 将文 選

出句 各題2句 締切 11時

主催 やまと番傘 桜井川柳会

育代

一步

フジ子

一文

信二

みつこ

扶美代

紀雄

光男

六点

いさお

まつお

雅枝

喜代子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 まつえ社 ま吟	14日(土) 12時30分開場 土・海・点・つらい	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川柳 ねやがわ	15日(日) 12時開場 スタッフ・冗談・責める・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	15日(日) 14時締切 机・目尻・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岸和田 川柳会	15日(日) 12時開場 岸和田市民川柳大会	岸和田市立「労働会館」2F 詳細は川柳塔誌9月号48ページ参照
豊中 もくせい 川柳会	16日(月) 13時50分締切 ゆとり・とほける・渋い・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳 さんだ	17日(火) 12時開場 第6回 さんだ川柳大会	キッピーモール 6F (JR 三田駅前) 詳細は本誌 10月号46ページに掲載
川柳 たちばな	18日(水) 14時締切 席題・ごめん・重い・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)Tel.06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川柳塔 みちのく	21日(土) 17時締切 慣れる・しんなり・伝説	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」Tel.0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 Tel.0172-36-8605
はびきの 市民会 川柳会	22日(日) 14時締切 友・感じる・なにより	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	22日(日) 13時30分開場 自由吟・アスリート・着地 桁違い	開発ビル 2F 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	23日(月) 18時開場 餌・エッセイ・沈む・がらり	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 すみよし	28日(土) 13時開場 雑・焦る・アイデア	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸会 川柳会	28日(土) 12時30分開場 カード・駆ける・晴れ	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 (住所不要) ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
京都 塔の会	30日(月) 14時締切 クレーム・ほやく・炎	京都ハートピア 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な ら	5日(木) 14時締切 困る・はらはら・鍵	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄「奈良」駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
倉吉 川柳会	7日(土) 14時締切 疲れる・よっしゃ・留守	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	8日(日) 14時締切 唐突・てれこ・射る・雑詠	八尾市洪川町・安中町集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0075 八尾市洪川町5-2-7 中蘭 清
西宮北口 川柳会	9日(月) 14時締切 志気・開く・ショック 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳塔 わかやま 吟社	9日(月) 14時10分締切 兼題 = 石仏・普通・もう少し 課題吟 = 女	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪町東2-208-5 楽原道夫
ほたる 川柳 同好会	10日(火) 13時30分締切 塩・実る・多少	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池 螢池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔 さかい	10日(火) 14時締切 ヒント・ぐったり・折句=よせい	東洋ビルディング4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
川柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 痛い・服・そわそわ・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川柳会	13日(金) 14時締切 宿る・日・札束・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	14日(土) 14時締切 覗く・食欲・探し物	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪府都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
城北 川柳会	14日(土) 14時締切 待つ・距離・惜しい・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪府城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	14日(土) 14時締切 息・コンコン・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL: FII 0721-25-0603
六甲 川柳会	14日(土) 14時締切 吠える・欠伸・鼻の先・自由吟	六甲道勤労市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川柳塔 打吹	14日(土) 13時30分締切 ばい菌・退屈・ひらり	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局

柳界展望

藤一泉氏は、十五代脇屋川柳氏の遺言により、十六代尾藤川柳を8月1日より継承された。

○「あかつき川柳会」は

8月より、会長に岩佐ダ

ン吉氏、幹事長に鈴木い

さお氏が就任した。

▽執 筆△

○西出楓楽相談役は、富

山県「川柳えんぴつ」社

の8月号に、巻頭言「タ

プーに挑む」を執筆。

▽ご 芳 志△

○小島蘭幸主幹より、金

一封を拝受しました。

○故林瑞枝さんご遺族よ

り金一封拝受しました。

▽訂正とお詫び△

○9月号、P14上段6行

目、神の手を盗んで磨く

研修員↓神の手を盗んで

磨く研修医

▽新誌友紹介△

米子市 妹尾令位子

紹介者 竹村紀の治

大阪市 松下小枝子

紹介者 古今堂蕉子

大阪府 中内 孚彦

紹介者 水野 黒兎

和歌山市 上野 寛

紹介者 三宅 保州

和歌山市 定松 宏枝

紹介者 三宅 保州

和歌山市 佐藤 まさ

紹介者 三宅 保州

和歌山市 西川 千鶴

紹介者 三宅 保州

和歌山市 福島 一雄

紹介者 三宅 保州

常任理事会 9月7日(金)

①役員人事及び役割分担

について②川柳塔まつり

関連について③六賞選考

結果らつて④定例確認

事項。

次回 11月7日(火)AM10時

○「川柳さくらぎ」の尾

▽柳界動向△

刀鍛冶

秀 句 澤井 敏治

一子相伝さかしの誇る

同人成績。

市立榎文化会館で開催。

★「第31回堺市民芸術川

柳大会」は、9月10日堺

ソプラノが一人混じっ

ている説経

秀 句 村上 玄也

おを付けて少しきれい

なるお星

秀 句 上田ひとみ

者で開催。同人成績。

8月26日尼崎市立ピッコ

ロシアターで132名の参加

★「17尼崎川柳大会」は、

8月26日尼崎市立ピッコ

ロシアターで132名の参加

者で開催。同人成績。

8月26日尼崎市立ピッコ

ロシアターで132名の参加

川柳赤穂吟社創立5周年記念川柳大会

日時 10月29日(日) 10時開場
場所 赤穂市文化会館「ハーモニーホール」
小ホール

課題と選者

(各題2句・出句締切正午・欠席投句拝辞)

「汗」 牧野ねえね 選
「残る」 永見 心咲 選
「命」 鴨田 昭紀 選
「叱る」 嶋村 幸 選
「友」 古川 蓄水 選
「雑詠」 赤井 花城 選

特別課題 1句

「父」 濱邊稲佐獄 謝選

会費 1500円(記念品・発表誌呈)
主催 川柳赤穂吟社

第26回 枚方市民川柳大会

日時 10月20日(金) 午後12時開場
場所 メセナひらかた 2F
(枚方市新町2丁目1番5号)

TEL 072-843-5551

宿題 「パワー」 足立 淑子 選
「若い」 藤本 秋声 選
「粒」 美馬りゅうこ 選
「闘う」 竹村 穂夫 選
「包む」 籠島 恵子 選
「月」 阪本 高士 選

席題なし・各題2句

締切 午後1時

参加費 1000円(発表誌呈)

欠席投句拝辞

連絡先 池田武彦 TEL 072-859-1917

主催 くらわんか川柳会

平成29年度（第29回）川柳塔碑合祀祭実施要領

本年度川柳塔碑合祀祭を下記の通り行いますので、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

- 合祀祭日** 平成29年11月4日（土）雨天でも行います。
- 集合場所** 南海電車 難波駅 3階中央改札前
- 集合時間** 午前9時30分（川柳塔の茶色の旗をあげておきます。）
- 乗車時間** 特急「高野」午前10時発に乗車します。
事前申込者には割引周遊券特急券を購入しておきます。
- 会費** 4,800円（往復乗車券および往きの特急券、昼食費）
帰路の特急券は各自でご購入願います。
- 合祀祭会場** 〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山17
高野山霊園内 川柳塔碑前（奥の院下車 徒歩5分）
大霊園事務所 ☎0736-56-2966
到着後すぐに法要を営みます。（午後12時15分より約30分の予定）
- 合祀予定者（敬称略）**
（平成28年8月～平成29年7月までに逝去された同人で高野山基金に参加されている方）
波多野五楽庵、高島 啓子、宮園射月芳、林 瑞枝
恒松 町紅、小林由多香、平嶋美智子、松尾 和香

第41回 寝屋川市民川柳大会

- とき** 11月19日（日）午後1時開場
出句 2時締切
- ところ** 寝屋川市民会館 2F
〒572-0848 寝屋川市秦町41-1
（京阪寝屋川市駅東口から京阪バス「太秦住宅行」イズミヤ1番乗り場No31か31Aに乗り市民会館前下車、または寝屋川市駅下車東へ徒歩15分ほど。
TEL 072-823-1221
- 会費** 1000円（投句 82円切手5枚）
- 題と選者（各題2句 席題なし）**
- | | |
|--------|---------|
| 「きっかけ」 | 井澤 壽峰 選 |
| 「軽い」 | 小霜 眞弓 選 |
| 「運命」 | 荒川 鈍甲 選 |
| 「歯車」 | 伊達 郁夫 選 |
| 「鍵」 | 片山かずお 選 |
| 「バランス」 | 西出 楓楽 選 |
- 投句** 11月15日必着 下記事務所宛
〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
高田博泉方 川柳ねやがわ
主 催 川柳ねやがわ

第32回 渡辺銀雨賞 すずむし全国誌上川柳大会

- 課題** 「海」（2句詠）
- 選者** 十五名共選
岡崎 守・千島 鉄男・熊谷 岳朗
小島 蘭幸・平田 朝子・渡辺 松風 他
- 投句料** 1000円（郵便小為替）何口でも可
※参加者全員に参加賞呈
- 投句用紙** 所定用紙・便箋用紙・原稿用紙
住所・氏名（雅号・本名）・郵便番号・
電話明記
- 賞** 大賞（一名）楯・あきたこまち20キロ
準賞（二名）楯・あきたこまち10キロ
4位～10位 あきたこまち5キロ
11位～20位 あきたこまち3キロ
- 締切** 10月31日（消印有効）
- 発表** 「川柳すずむし」誌 12月号
- 投句先・問合せ先**
〒018-1724
秋田県南秋田郡五城目町東磯ノ目1丁目7-11
湖東印刷所内 すずむし全国誌上川柳大会係 宛
TEL 018 (852) 2430
主 催 川柳すずむし吟社

編集後記

★うれしさは秋の実りが我が家にも 薫風

★六賞発表号をお届けします。受賞された皆さん、おめでとうございます。惜しくも賞を逃された方、応募されなかった皆さん、昨年も書きました賞が全てではありません。けれど果てしない道の向うにひと際輝く「星」を目指して、研鑽を積むのも川柳の楽しみ方の一つだと、私は思います。

★蘭辛主幹の日川協理事長就任に祝意を表して、平宗星氏が句集「再会Ⅱ」の鑑賞をお寄せくださいました。麻生路郎の川柳を「人肌のポエジー」と捉え、蘭辛作品はそれを継承すると論を展開。3回連載。お楽しみ戴きたい。また

の定番、読書感想文が

楽原道夫さんの「路郎余滴」は前回八月号に続いて「川柳職業人宣言」。

川柳界に巻き起こした波紋などが、生々しく興味深く描写されている。

★九月七日の本社句会にてお話をさせて頂いた。「編集の現場から」と題して

皆さんにご理解とご協力を頂きたいことが二つ。一つ、投句は濃い鉛筆

たはボールペンで、文字は楷書で正確に、辞書で確かめて。二つ目は締切厳守。毎月十五日が土日祝日にあたる場合は前倒しで、少なくとも十三日

には事務所に到着するように。遠隔地の場合は郵便事情もありますから、三日は余裕を持って投函して頂ければ。塔誌を毎月遅滞なくお届けするた

めにもご理解ください。★この夏、夏休みの宿題の定番、読書感想文が

ネット上で売買されたという。一件300円から3000円！小学生向きには「星の王子さま」。

「かんじんなことは目に見えないんだよ」。この童話に込められたメッセージを、ネットで売買する人たちはどう受け止めたのか。ネット社会のご紹介する。

（朱夏）
先輩諸氏から譲られた
亀山恭太句集「出会い」
（S56年発行）。寺尾俊平

<h2>ひとこと</h2>	<p>苦手の道、好きの道</p> <p>今年傘寿、柳歴6年、同人2年目です。国語が一番苦手でした。五十を越えて初めて単身赴任、社交ダンスを始めました。音楽だめ、体操だめ、なのに何故か少しずつ楽しくなりいまでも続けています。為せば成る、です。</p> <p>6年前、六甲道勤労市民センターで、メダカの学校（六甲川柳</p>
<p>句集「葦川」（S61年発行）。宮口笛生句集「でごいち」（H8年発行）。川上大輪・川上富湖句集「三重奏」（H11年発行）。池森子句集「森」（H17年発行）の5冊・約三千五百句を一気に鑑賞する中から一句を</p>	<p>会）の案内を見つけ、早速に山口光久先生に電話しました。これが川柳への一歩となりました。</p> <p>暖かいご指導をたくさん頂き、お陰さまでずっと続けています。今は「川柳はいい日本語が好きになる」心地となり、メビウスの裏側を彷徨っている状況。継続は力です。</p> <p>（上田 和宏）</p>
<p>しい酒ビール 笛生人はみな生きてるだけで役に立ち 大輪子を抱けば女の中にマリア様 富湖わたくしの奥に袴めく 魔女悪女 森子それぞれ作者の味わいを大いに学んだつもりでいる。これで全没から</p>	<p>終身刑になるかも知れぬめぐりあい 恭太と、浅はかな考えに落ちる青い空 俊平ある。</p> <p>（勝弘）</p>

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号)」

地名

市都
道府道
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限りません。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「頼る」(10月15日締切)

12月号発表

齊尾くにご選 — 共選 — 山口 光久 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

12月号発表表 (10月15日締切)

初歩教室 「ヒント」(3句) 居谷 眞理子 担当	一路集 (2句) 「強 笛」 上田 ひとみ 選	インスピレーションナビ(2句) 大西 泰世 選	檸檬抄「頼る」 (2句) 山崎 久 共選	愛染帖(2句) 新家 光久 選	水煙抄(8句) 川上 大輪 選	川柳塔(8句) 小島 蘭幸 選
--------------------------------	----------------------------------	----------------------------	----------------------------	--------------------	--------------------	--------------------

1月号

檸檬抄「シャープ」
一路集「クラシック」 「どっしり」
初歩教室「自然」

川柳塔WEB句会のご案内

課題「貧しい」 □ 森山 盛桜 共選
真島久美子
締切 10月20日 発表 10月25日頃
投句料 無 料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

〒543-0052

大阪府天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)67791340番
振替0098141298479番

定価 八百円(送料83円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一七年平成二十九年十月一日発行

発行人 小島 和幸

編集人 木本 朱夏

印刷所 美研アート

第23回 川柳塔まつり

日時 10月7日(土) 開場:11時
出句締切:正午 開会:午後1時
場所 ホテル アウィーナ大阪 4階 金剛の間
〒543-0031 大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12
TEL 06-6772-1441

会費 2,000円(記念品呈)
おはなし 「おじいさん、おばあさん」 西村 哲夫
兼題 (各題2句・欠席投句拜辞)
「もしも」 齊尾くにご 選
「歌」 久保田千代 選
「追う」 早川 遯行 選
「ブレーキ」 福士 慕情 選
「時 間」 田中 新一 選
事前投句 「魚」 小島 蘭幸 選
(懇親宴) 午後5時~7時
アウィーナ大阪3階 葛城の間

会費 7,000円
主催 川柳塔社
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17
花野ビル201号室
電話 06-6779-3490

本社 11月句会

7日(火) 午後1時から

兼題 「敵」「ペール」「ばらばら」
「引く」「動揺」

川柳・俳句・エッセイ・小説 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

オニザキのプレミアムロースト

つとまごま

杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しっかりと残り、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぎな

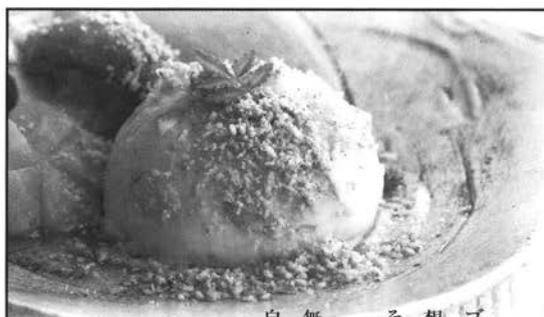
想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>